22-473

新撰近江名所圖會

清水湖州編著

發行所　文泉堂

明治
49 2 4
内務

緒　言

我が江州の地たる、四圍山岳連亘して、中央琵琶湖の存在するあれば、山水秀麗、風光明媚、古來八景の名、普く人口に膾炙せらるゝと雖も、其他の名所舊蹟に至りては之を知るもの甚稀なり。之れ從來完然なる著書なきによるか、否々古來近江風土記あり、淡海輿誌志略あり、其他二三の書なきに非らずと雖も、是等の中には、既に散佚して今傳はらざる者あり、偶々ありとするも、寫本且つ浩瀚にして、繙讀に不便なるありて、未た縣下一般に普及せざりしによる。之れ豈に一大恨事と謂はざる可けんや。

余や淺學菲才、敢て其任に非らずと雖も、曩に縣下名蹟誌の乏しきを嘆ず、近江名蹟誌てふを編纂發行するや、望外の好評を博し、初版瞬時に賣盡し、尚購買の申込非常に多かりき。吁かゝる一小冊子の、かく意外の歡迎を辱ふしたるは、是れ全く近江人士の、斯道に留意せらるゝの深きに因らずんは非らず。是に於てか、吾人は前書に比し一層詳密なるをものせんと欲し、或は實地を調査し、或は舊記を蒐集し、編纂著述すること年餘、今漸く脫稿したれば、茲に新撰近江名所圖會と改題し、再び刊行することゝせり。されど本書未だ以て完然なりと稱すべからず、尚遺漏せる所、調査に屬するもの頗る多し、之等は他日增補發刊の節に讓るべし。讀者諸君も亦記事の脫漏、事實の誤謬等發見せらるゝ事あらば、希くは垂教を給へかし、編者喜で其厚意を空ふせざる可し。

明治四十一年十一月末　　湖東野洲郡中北の里にて　　清水湖州識

目錄

○緒言

○凡例

志賀大津宮址　弘文天皇山陵　圓城寺　延暦寺
唐崎松　比良宮　日吉神社　白鬚神社　堅田浮
見堂　粟津ヶ原　石山寺　袋仲寺　勢田橋　矢走
餘飯　建部神社　高野繪光寺　多賀神社　彦根城
錦織寺　永源寺　永源寺風景　藤樹書院　竹生島

○總論……一

琵琶湖　近江八景

○大津市……二

袋仲寺　芭蕉塚　打出濱　常世川　霞関皇太子遊跡
天孫神社　高觀音　國寺跡址　園清水　小野小町遺跡
螺丸神社　螺丸物語　逢坂関址　逢坂山　逢坂關
走井　追分町　繼清水　大津通河　圓城寺　正法寺
弘文天皇山陵　新羅神社　源義光塚　大津城址

○滋賀郡……九

岩間寺　立木觀音　石山　石山寺　國分寺跡　粟津
津原　粟津原戰　今井兼平塚　膳所町　膳所城址
錦織　志賀大津宮址　志賀花園　大伴屋主社　崇福
寺址　梵釋寺址　長等山　志賀山　高穴穗宮址　足
利義晴宮址　唐崎　唐崎松　坂本城址　四教寺　比
留山　紀貫之塚　來迎寺　日吉神社　延暦寺　比叡原
堅山町　勾當内侍塚　堅田關屋跡　浮見堂　青野
觀音關址　水茎跡　比良山　白鬚神社

○栗太郡……二〇

殺丸夫人跡　夫石兵塚跡　夫石關址　大戸川　金
勝寺　新羅光寺　足利義尚關址　灰塚山　佳瀬坊住塞
觀音寺　安國寺　根津町　常勝寺　蟹饅　玉川流跡

野路矢橋　建部神社　國府跡　勢多城址　瀬田川
○瀬多橋　薩原秀郷故事

○野洲郡……二五

守山町　東門院　鬼池址　聖德太子塚　源内貫
弘塞　守山仇討　立入　足利義昭塚　山中鹿塚
兵主神社　鏡磯寺　長浜池　不宗塚　妙王川　野
洲川　例詳人街道　圓光寺　三上山　御上神社　三
上山麓塚跡　三上麓御

○甲賀郡……二〇

石部町　長寺寺　常勝寺　藤原藤房塚　善水寺
水口町　水口城址　土山　加代藤街道　田村神社
鈴鹿　源義経塚跡　鹿部温泉　信樂　紫香樂宮址
保良宮址

○浅井郡……二四

八幡町　八幡神社　四村太郎右衛門塚　八幡山城址
四光寺　國山　奥島　長命寺　沖島　淨願院　安土
宗論　沙々貴神社　安土城址　總見寺　桑實寺　觀
音正寺　觀音寺城址　浦生野　猫長者塚跡　老蘇森
長光寺　市場立手塞　阿賀神社　石塔寺　長岡集斯塞
長束政秀塞　西大路關屋敷跡　中野城址　目野町
稚國神社　照光寺　菅村神社　龍王寺　大村城跡
蹴　作蔵塚塞　源義經塚跡　鎧山

○神崎郡……二三

山上麓屋敷跡　神御國　入日市　瓦屋寺　石馬寺
善勝寺　桜宿塚跡　百松森　野島崎　伊賀御殿跡

○愛知郡……二四

北ヶ畑　百濟寺　金剛寺　永源寺　愛知川　鈴江
城址

○犬上郡……二五

彦根町　彦根城址　大洞弾左衛　木村重成首塚　佐
和山城址　烏帽山　多賀神社　唯念寺　犬上川　多
賀島

○坂田郡……二六

姥物語　有原　清通寺　源長行塞　成菩提院　藤川
伊吹山　日本武尊故事　伊吹四大寺　太平寺城址
成姫岳居陵　醒井　四行水物語　蓮華寺　北條仲時塞
磨針峠　鳥居本　法界坊塚跡　小野　朝妻城麻　筑
摩神社　忠見宿禰塞　後鳥羽天皇塚跡　名超寺　後
鳥羽神社　觀勝寺　國友鐵砲　宮川麓屋敷跡　長浜町
八幡神社　長浜城址

○東淺井郡……二五

上坂野村　四郎塞　小谷山城址　竹生島　邸久夫須
麻神社　寶厳寺　仲舒琵琶物語　姉川　姉川戰　玉
泉寺

○伊香郡……二六

木之本　淨信寺　余吳湖　賤ヶ嶽　賤ヶ嶽戰　中川
清秀塞　菅山寺　毛受勝助塞　羽柴物語　國津濱
大浦　菅浦　月出崎

○高島郡……二七

海津　張力藤女　酒波寺　今津町　朽木城址　岡林
院　彦主人王塞　繼體天皇離宮地　万木塞　安曇川
鄙鳥院　大溝町　大溝城址　近藤重藏塞　勝野原
三尾山　藤原仲麻呂亂　藤樹書院　中江藤樹塞　白
石島　饗庭野

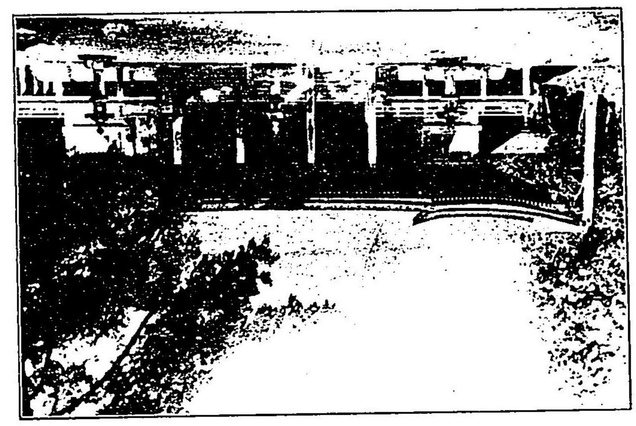
○特別保護建物……二七

○國寶……二七

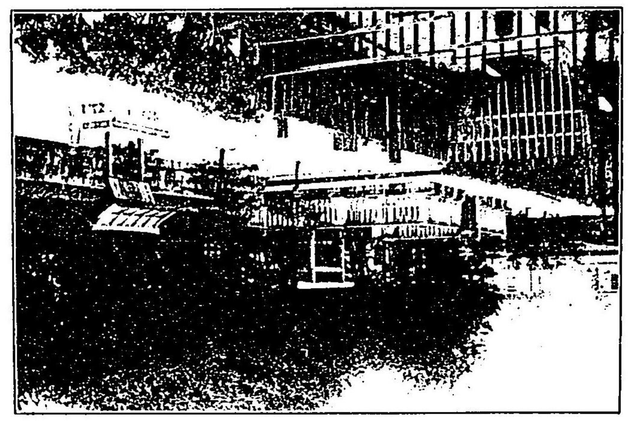
○街路里程……二八

○各港間里程……二八

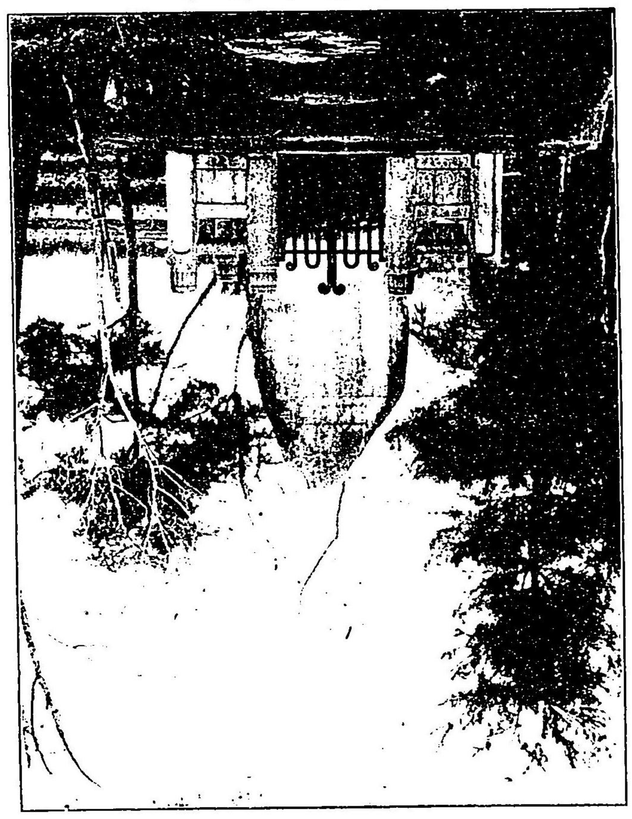
○鐵道哩數……二九



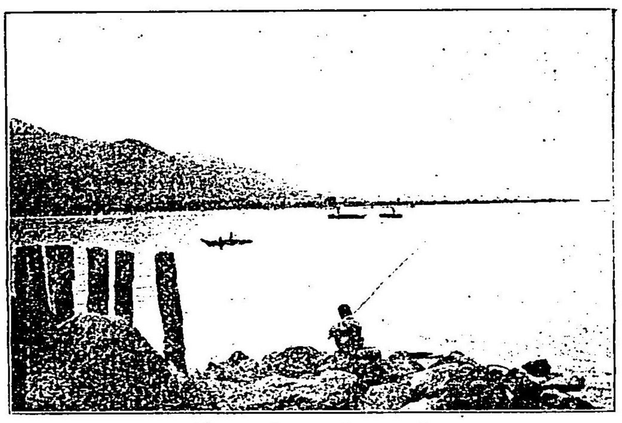
寧　遠　園



陵山昌天文弘

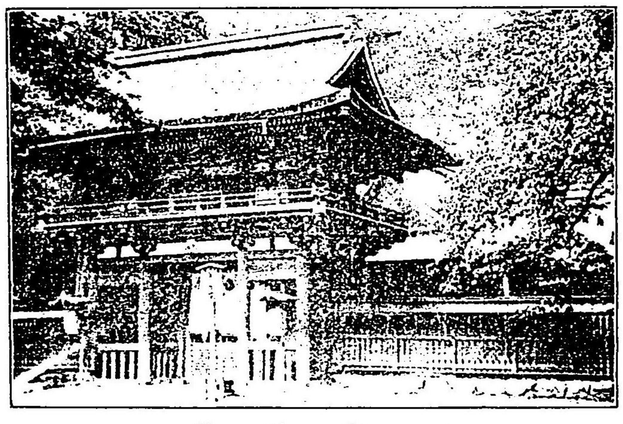


龍宮神火符志

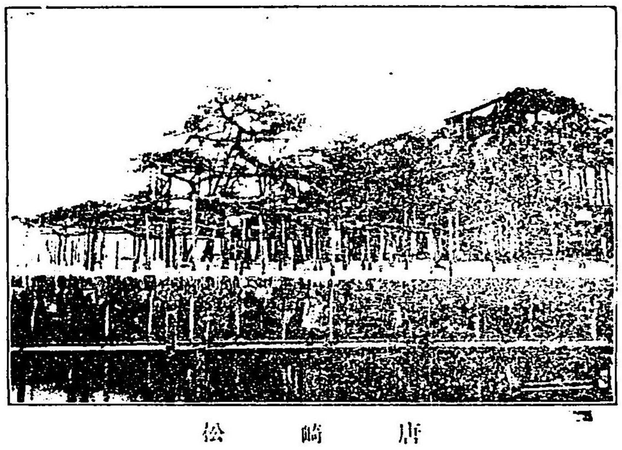


雪暮良比

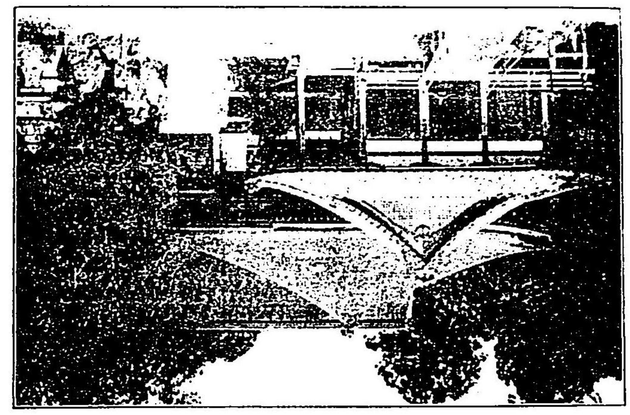
寺曆延



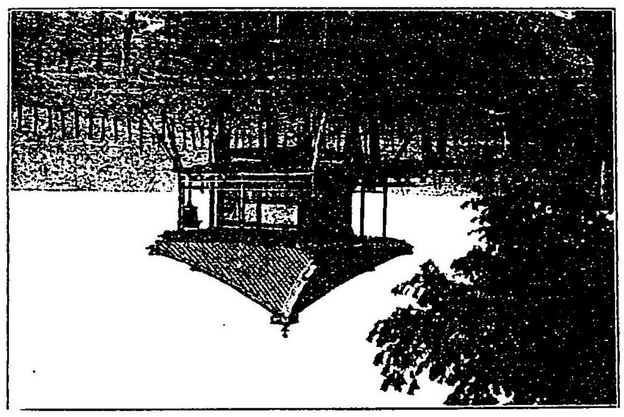
社神吉日



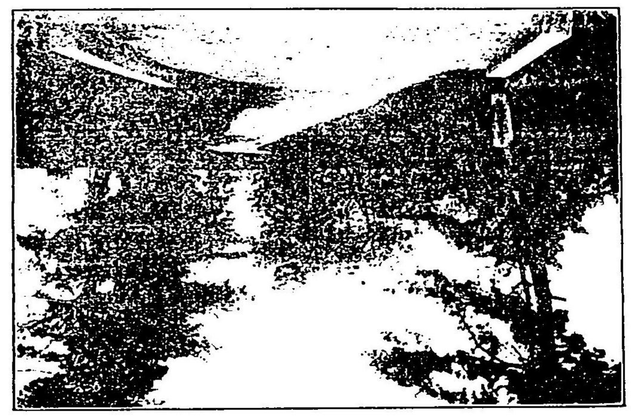
崎崎唐



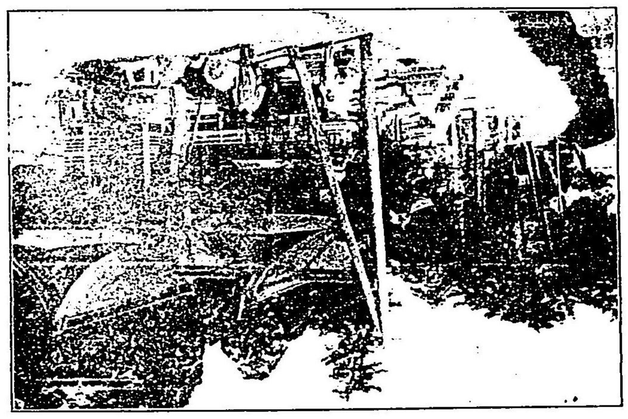
寺山石



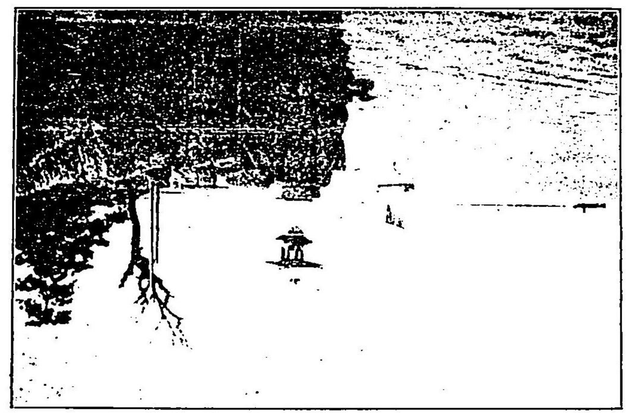
常見浮田塔



原ヶ津瀑

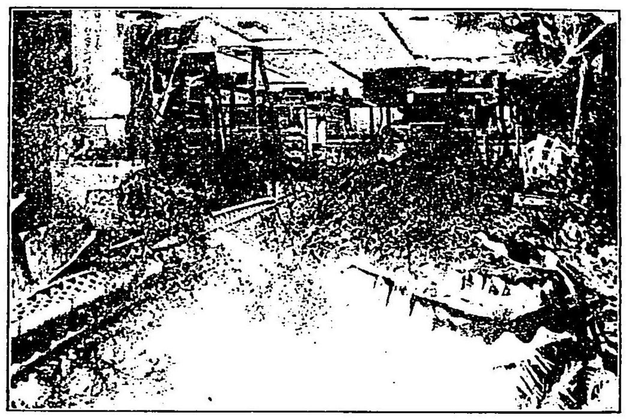


祖神囂白

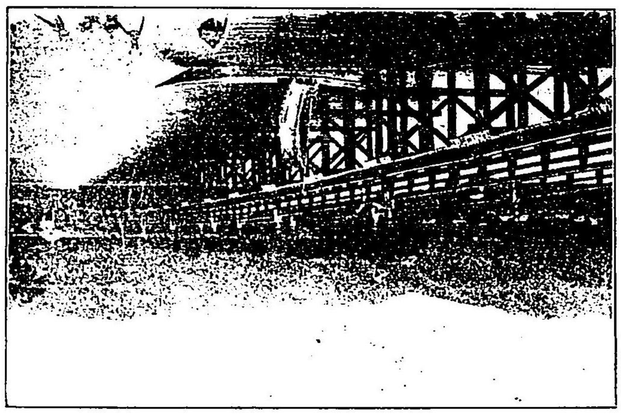


帆 歸 走 矢

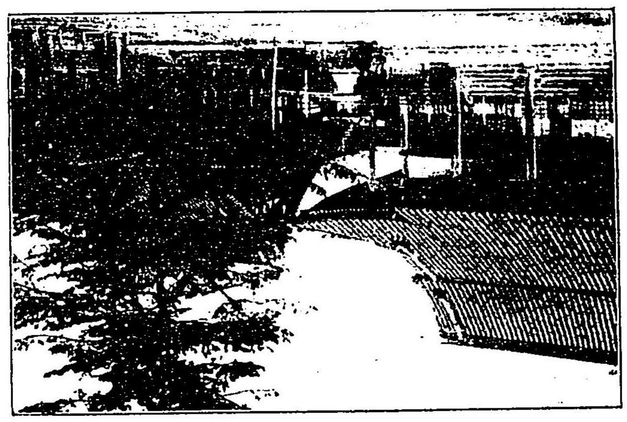
淮 南 市 北



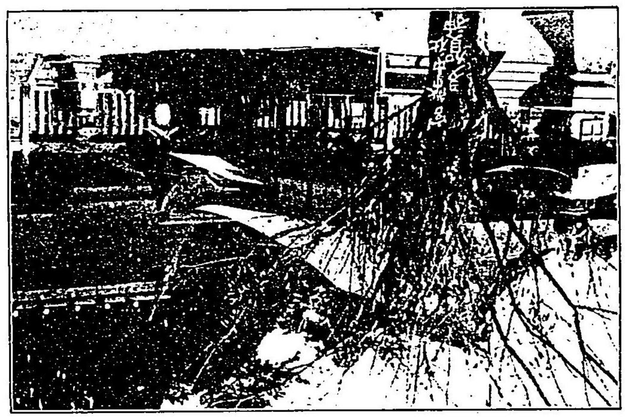
寺 仲 義



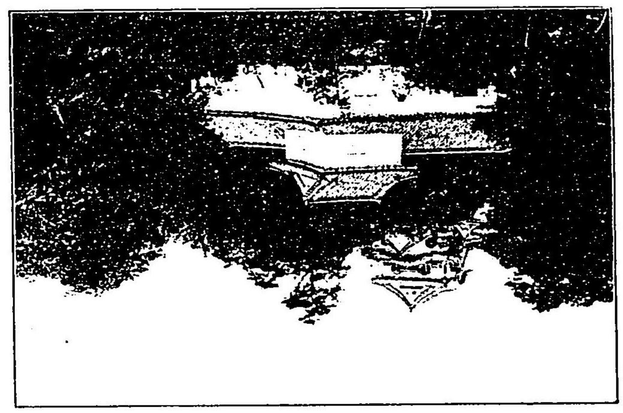
橋 川 勢



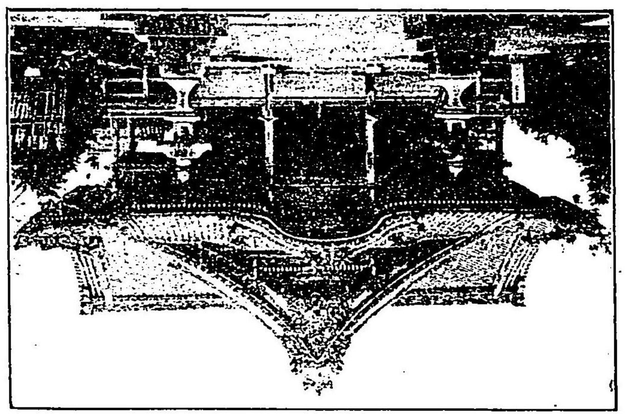
寺 鐘 鼎



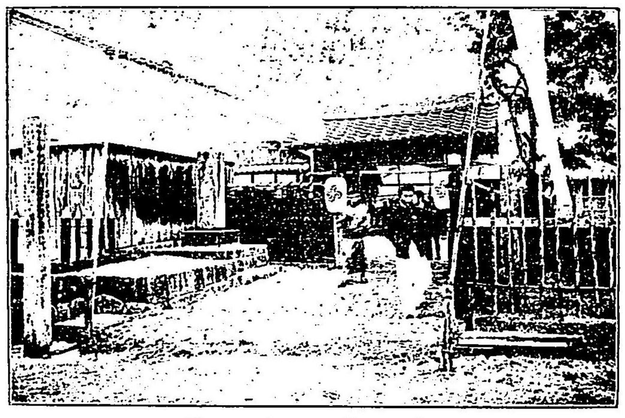
此 神 賞 多



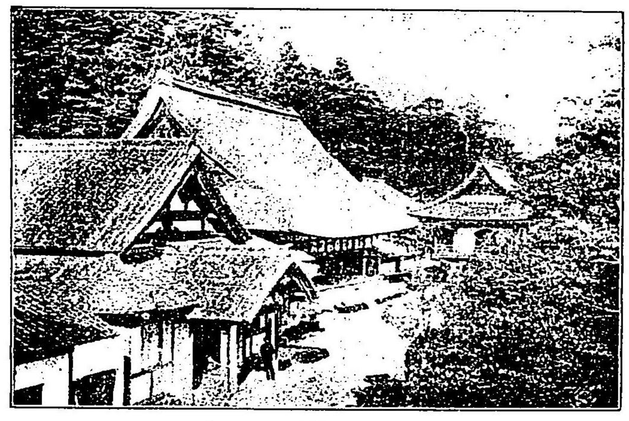
蹟 根 蹟



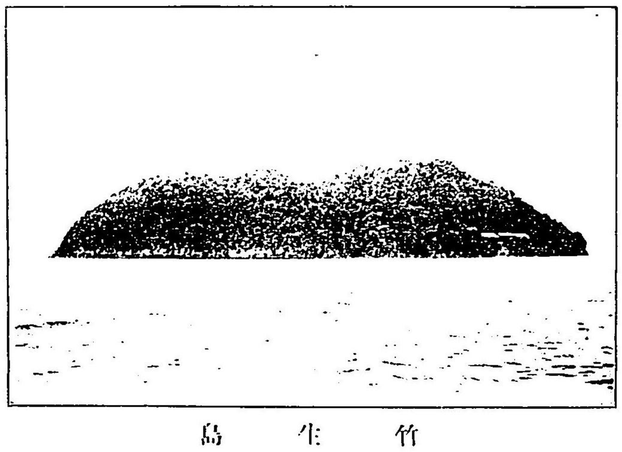
寺 光 善 野 高



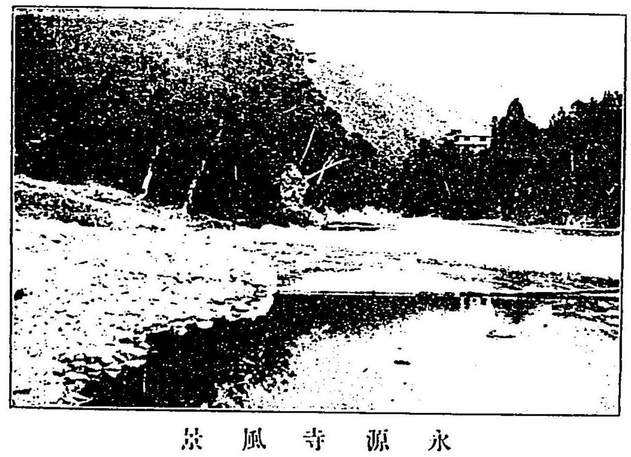
藤　樹　書　院



永　源　寺



竹　生　島



永　源　寺　風　景

総論

近江は往古淡海と書けり之れ鹽水あらぬ湖水あるを以てあり後遠江に對して「ちかつあはうみ」と稱せしが後約して遂に近江とあれり而して其位置たる東山道の西南端にありて東は伊勢、美濃に隣し西は山城、丹波に境し南は伊賀に接し北は越前に連る地勢連山四面を圍み中央に琵琶湖を湛ふ全國を別ちて一市十二郡とし戸數十萬二千五百、人口七十萬一千五百餘を有す又廣袤は東西十五里二十二町南北二十五里二十三町面積二百六十九方里、四八とす

上古成務、天智の兩帝都を滋賀郡に奠め玉ひしことあり孝德天皇の代國府を瀨田に置きて一國の行政を執りしが嘉永年間源平二氏、興るに及び近江は木曾義仲に屬したり後源頼朝全國を統一し幕府を鎌倉に開くや佐々木定綱當國の守護となり以來觀音寺城にありて子孫之を世襲す後六角京極の二族に分れ各六郡を領有す其後永正年間淺井長政江北に起りて六角氏を滅し、が幾もなく織田信長の討滅する所となる是に於て信長安土に城を築きて全國の政務を執りしが信長歿後羽柴秀吉之を領有し族秀次を八幡山城に封して全國を統一せしむ其后豊臣氏滅び德川家康之に代るに及び元勳井伊直政を彦根に封じ次で膳所、水口、大溝、三上、宮川、山上、西大路の諸藩を置きて全國を分治せしむ明治二年各藩籍を奉還せしめて藩主を知事となし同四年廢藩置縣の令あるや東部に長濱縣西部に大津縣を置きしが五年滋賀縣と改稱し近江一圓を總轄することゝあれり是を近江沿革の大略とす

琵琶湖

國の中央にあり古くは「あふみ」又鴉の海（鴉はかいつぶり）とも稱したるが其形琵琶に似たるを以て中世之を琵琶湖と改む東西五里二十六町南北十六里九町周圍五十九里三十二町面積四十四方里五分最深百十二尋あり而して湖中、奥、沖、多景、竹生の諸島散在し沿岸良港多く常に瀛船小舟を浮べて來往しつゝあり而して湖水西流して勢多川及疏水となりて京都府に入る

傳へ云ふ孝靈天皇七年一夜に涌出し其陷沒したる土壡河に墳出して富士山を作ると古來地變により土地陷沒して湖海となりし例少からぎ陸前松島灣の如き又瀨戸内海の如き其一例なりと雖も我江州の如き四圍連山にして中央凹落しあれば水の滯留して湖を成すこと毫も怪しむに足らざれば上古住民少なく湖水の存在を知らざる時偶然之を發見したるよりかゝる感想を起せし者あるべし

鴉のうみや月の光りのうつろへば　家隆

浪の花にも秋は見えけり

逢坂を打出てみれば近江のうみ　讀人不知

白ゆふ花に浪たちわたる

近江八景

琵琶湖沿岸は山岳連亘しつゝあれば山水明媚の個處少からぎ八景の如きは殊に其優勝なるものなり明應九年八月十三日大政大臣近衛政家父子管領六角高頼の招請により湖上に遊び支那洞庭湖八勝に摸して湖畔の八勝地を和歌に詠せられしに始

る爾來詩歌に繪畫に吟詠描寫して遂に有名あるに至る而して八勝地及詩歌は左の如し但し詩は相國寺林長老歌は即ち近衛政家なり

三井晩鐘

思ふその曉ちぎるはしめぞと
まづきく三井の入相の鐘

湖面朦朧畫不成。昏鯨高響出園城。霞間好是客船月。十倍楓橋半夜聲。

堅田落雁

峰あまた越えて越路にまつちかき
堅田におびき落るかりがね

鴻雁幾行更不孤。曉風帶月落東湖。靈沙背水堅田浦。猶見孔明八陣圖。

比良暮雪

雪はるゝ比良の高根の夕暮は
花の盛りにすぐる春かな

吹人雪分飛入淵。比良嶺雪暮紅寒。輕舟短棹興何盡。莫作剡溪一樣看。

唐崎夜雨

夜の雨に音をゆづりて夕風を
よそにぞたつる唐崎の松

激灩湖光朝露晴。玲瓏山色暮雲橫。唐崎一夜摸稜手。半作松風半雨聲。

粟津晴嵐

雲はらふ嵐につきて百船も
千ふねも浪の粟津にぞよる

嵐度粟津春興長。吹霞吹雨似相狂。山花一片一蘆浪。湖上閑鷗夢亦香。

瀬田夕照

露しぐれ森山遠くすぎゝつゝ
夕日の渡る勢多の長はし

沙鳥風帆帶夕陽。夕陽人影與橋長。勢田曝綱東山月。一色江天雨景光。

石山秋月

石山や鳴のうみこる月影は
明石もすまも外あらぬかは

秋風蕭颯一天涯。霜滿四山不帶霞。古木回岸寒月影。吟殘葉々霧中花。

矢走歸帆

眞帆ひきてやばせに歸へるつり舟は
打出の濱をあとの追風

釣竿手熟白頭翁。辛苦客船西又東。幾度風帆歸去后。呂公榮達一盃中。

大津市

琵琶湖の南岸長等山の麓にありて古くは相津と云ふ天智天皇志賀郡に都せられ大津宮と號せられしは相津、大津國音同じきを以てあり其后大津宮廢せられしを以て古津と呼びしが延暦年間舊名を襲ふて大津と改めらるされどこの大津と稱するは今の大津宮趾の存する滋賀郡錦織村邊を総稱せるものにして當地は猶寂莫たる一寒村に過ぎざりしが天正年間羽柴秀吉坂本城をこゝに移築し其人家も共に移して城下とおせしより漸次民家稠密せり今町名に坂本町、小唐崎等あるは即ち舊名を維持せるなり

此地東北は琵琶湖に臨み南は滋賀郡膳所町に連り西は京都府に隣す町數九十七戸數六千人口四万餘を有し東海、東山、北陸、三道の要衝に當り昔時は頗る繁盛なる一驛なりしも今や東海鐵道開通してより甚衰微せるが如き觀あるに非らざれども猶ほ縣下の首都として車馬駱驛商業繁盛亦舊時に讓らざるなり

君が代は大津のはまのまさこもて　匡房
數にとるともつきしとそ思ふ

秋の日も長等の山の紅葉は　隆祐
大津の里のかさしなりけり

義仲寺

馬場町にあり義仲は源義賢の子なり幼時木曾山中に成長したるを以て自ら木曾冠者と稱す治永三年源範頼と粟津原に戰ひ遂に敗軍し逃走の途馬水田に陷りしを以て遂に石田爲久の爲に射殺せらる時に年三十三天文二十二年六月二十四日管領六角義賢石山寺に詣で歸途粟津原に義仲の古墳を尋ね一宇を建立して義仲寺と名づけ石山寺に屬せしむ

松尾芭蕉墓

義仲寺にあり芭蕉は有名なる俳人なり名は宗房と云ひ伊賀國上野の人なり幼より俳諧を好みしより長して京師に出て北村季吟に師事す而して後江戸に到り剃髮して庵を深川に結び庭園に一株の芭蕉樹ありしを以て芭蕉と號す元祿七年諸國行脚の途次病にかゝり十月十二日大坂御堂前花屋仁右衛門方に歿す年五十一門人其角、支考等師の遺言により柩を當寺に葬り一基の碑石を建て其角之に題して曰く

木曾殿とせおか合せの寒さ哉

打出濱

今の石場松本邊の濱を云ふ往古は逢坂を出でゝ此地に來りこれより粟太郡矢走へ舟渡しありて頗る繁昌を極めたりと太平記に「末は山路を打出濱、沖を遙に見渡せば、鹽あらぬ海にこがれゆく、身を浮船のうき沈み」云々とありて往古の名所なり

駒おべて打出の濱を見渡せば　後鳥羽院
朝日にさわぐ志賀の辛崎

近江なる打出の濱のうち出でゝ　讀人不知
恨みやせまじ人の心を

常世川

松本町にあり一に玉造川と云ふ之れ往古此邊を玉造莊と名つけたるに因る

いくちたひ君が御代には近江なる　元輔
玉造川すまんとすらん

一つして萬代てらす月あれは　讀人不知
底を見えけり玉造川

露國皇太子遭難

明治二十四年露國皇太子ニコラス殿下は希臘皇族ジョージ殿

下と共に觀光の爲め我國に來朝遊はさる五月十一日京都旅館を出でさせられ腕車に乘御大津市へ御來遊あり三井寺を觀光し夫れより唐崎へ赴むかせられ歸着の後縣廳にて御晝餐を召上られ午后一時頃京都へ御歸館の爲め從員奉送の腕車一百餘輛と共に小唐崎町五番屋敷を成らせらるゝ時道路警護の任にある巡査津田三藏と云へる者突然跳り出で帶劍を引き拔き殿下の頭部を目かけて斬付けたり不意の狼藉に殿下は大に驚かせられ直に腕車を飛下り四五間前途にかけ給ふ時津田巡査は尚追跡しあはや再ひ刀を加へんとすこの時晩く彼の時早く希臘皇族ジョージ殿下は携へ給へる竹鞭もて凶者の背部を亂打し給ひければ凶者少しく躊躇しけりこの間に殿下の車夫向畑治三郎北賀市々太郎の兩人は凶者を引倒し其劍を奪ひて背部を斬り付けつゝある時警部巡査等馳せ來りて遂に凶行者津田巡査を捕縛せり

ニコラス殿下は直に同町永井呉服店へ避難し給ひしより侍醫は直に傷所を繃帶し參らせ一時縣廳へ歸らせ給ひしも同日午后四時京都へ御歸館相成りたり

凶漢加害の報一度新紙に依て傳はるゝや國民何れも愕然として驚かざるはなく　聖上陛下殊に宸襟を惱ませられ翌十二日京都に行幸ニコラス殿下を常盤ホテルに御訪問親しく御慰問遊ばされたり

ニコラス殿下はまもなく傷所輕快に赴むかせられしも遂に觀光を中止し十三日京都御出發神戸なる御召軍艦に乘御十九日拔錨して浦鹽斯德へ回航遊はされたり

凶漢津田三藏は伊賀國上野の士族なり同年一月巡査を拜命し野洲郡守山警察署三上駐在所詰を命せられしが同日警護の爲め出津し遂にかゝる凶行を演せし者にして同月二十七日大津地方裁判所にて公判開廷遂に無期徒刑の宣告を受けたり又車夫向畑治三郎、北賀市々太郎の兩人は能く危急の際勇敢なる働をなし危害を輕からしめたる功勳により勳八等年金參拾六圓を賜ひ尚十八日ニコラス殿下御歸國に際し御召艦に召され御手づから小鷲勳章を賜ひ更に當座賞金として各二千五百弗づゝ下賜あり尚終身年金壹千圓を下賜せらるゝことゝなりたり

● 天孫神社

四宮町に鎮座す祭神大巳貴尊、國常立尊、伸哀天皇、彦火々出見尊の四座とす故に一名四の宮大明神と云ふ延曆年間の創立にして元龜三年兵火に罹りて燒失せるを青地伊豫守再建す而して古來日吉神社の神殿とあり毎年四月阪本に至り日吉神社の神を迎へ來り日吉祭禮の日之を阪本へ送るの古例あり又祭禮は十月十日に行ふ此日は町内より山鉾十四臺を出し市中を引き廻り觀客群集市中第一の祭禮あり

● 高觀音

市の西南長等山上を云ふこゝに園城寺五別所の一なる近松寺あり寺内に圓珍作觀音像を安置す延喜年間安然の開基する所にして敎待安然相會集する松あるを以て寺名とす又高地にあるを以て高觀音とも名づくこと市中を眼下にし遠く湖上の眺望に宜しく又櫻花楓葉多し近年公園となりしより四時遊客の登攀する者甚多し

● 關寺舊址

今の關寺町なるべし當寺は何人の草創なるや其建立年代すら未だ詳あらずと雖も寺域廣大堂宇壯麗佛像（彌陀如來純金五丈）は日本三大佛の一に數へられしを以ても如何に其高大なりしかを想起すべし然るに可惜この佛堂も物換り星移るに隨ひ漸次荒廢しつゝありしを惠心僧都見て其靈跡の煙滅せんことを慨き治安元年僧延鏡と共に伽藍を造營し佛像を鑄造して之を中興したりしが之もいつしか荒廢して遂に後世に傳はらざるに至れり

徒らにゆきゝをとむる關寺は　衣笠内大臣
六つの道をやゆるさゞるらん

● 關清水

一名關の小川とも云へり往古は和歌に詠まれて頗る有名なりしがいつしか埋沒せられて今は唯清水町の西人家の後に其舊跡と云へるもの存するのみ

夏くればゆきこふ人を逢坂の　關は清水にかかせてぞ見る　後頼
越えてゆく友やかからん逢坂の　關のしみづの影はかれねば　定房

● 小野小町舊跡

小町は其父祖及履歷詳らかなと雖も仁賢天皇の頃の人にして和歌に好妙なると容姿美麗なるとを以て一世に名高かりしが老後零落して乞食となり關寺邊に居住したりと其時の歌憐れあり我身のはるやあさみとり
つねには野べの露と思へば

この說或は謠曲關寺小町より出でたる者にしてかの通小町、雨乞小町、卒都婆小町などと同じく後世小說家の作り事に過ぎざるべし今片原町念佛寺に小町の墓と稱する者あるも之亦好事家の建立なるべし

● 蟬丸神社

上片原町にあり祭神猿田彦命にして弘仁十三年の造營による（此外清水町、大谷町にも蟬丸神社あり）而して當社もと逢阪山上にありて手向の神と云ふ手向とは昔し旅人の峠を越ゆる時道中の無事安寧を祈らんが爲め必らず幣帛（絹又は紙の類）を山上の神に捧げて通過したるあり之に因て山上を「たむけ」と稱せしを後「たうげ」即峠に轉化したるありと

紅葉をば關もる神に手向おきて　實守
逢阪山をすぐる木がらし　伸正
鳥居たつ逢坂山のさかひあるて　手向の神よ我あいさめぞ

● 蟬丸物語

蟬丸は其出身詳らかなる今傳說によりて記せば延喜第四の皇子にして兩眼盲なるを以て延喜二十二年三月勅命により逢坂山上に左遷せらるる而して蟬丸和歌に巧に又琵琶に堪能なるより茲に庵室を作りて日夕唯琵琶を弄して樂しむ然るにこの事姉宮かゝ聞かせられ景慕の情に不堪一夜宮殿を逃れて此地に來給ひ蟬丸と同棲せらるゝ事となりぬ而して姉宮久しく櫛風沐雨

山河を偏歴し給ひし故頭髪逆倒す故に御名を逆髪と云ふ蟬丸天慶九年九月二十三日逝く壽三十一故に毎年九月二十四日を以て祭禮とすと

其他博雅三位と云へる人毎夜三年の間逢坂に通ひて蟬丸に流泉啄木と云へる琵琶の秘曲を傳授さるゝと云へることあるも之亦妄談怪事にして信ずるに足らず又蟬丸を盲者にする者ありれども左記詠歌の詞書に「逢坂の關に庵を作りて住みけるに行こふ人を見て」とあれは其妄なるや明かなり今蟬丸の詠歌として傳はれる者二三首を左に記すべし

是やこのゆくもかへるも別れては
知るもしらぬも逢坂のせき

世の中はとてもかくてもありぬべし
宮も藁屋もはてしなければ

逢坂の關のあらしのはげしきに
しゐてぞねたる夜をすごすとて

● 逢坂關址

上片原町にあり桓武天皇都を平安に奠めらるゝや始めてこゝに關所を設けり後延暦十四年一度撤廢したるも天安元年再び設けられたり古來伊勢の鈴鹿、美濃不破と共に日本三關と稱して有名なり

夜をこめて鳥のそらねはゝかるとも　清少納言
よに逢坂の關はゆるさじ

逢坂の關には人もおかりけり　歳仲
岩間の水のもるにまかせて

● 逢坂山

市の西南にあり一に手向山又關山とも云ふ其逢坂と云ふは昔し武内宿禰忍熊王を追擊して此地に來り遇然此坂に逢ひて其軍を破りしを以て名づくと今山麓を穿ちて東海道鐵道を通せり之れ本邦最初の隧道とおす又往古此地に駒迎と稱することあり這は毎年八月十五日東國の牧より馬を貢進し來るを勅使この坂迄出て迎ふると云ふ古歌に駒引又駒迎とて多く詠めるは之なり

別れゆく今日はまさひぬ逢坂は　貫之
歸りこん日の名にこそありけり

逢坂の山の櫻やさきぬらん　宗宣
雲まに見ゆる關の一むら

望月の駒ひく袖もうちしめり　家隆
さ夜ふけにけり逢坂のせき

室鳩集

驛路遙遙林數間。征人走馬出東關。自此行々知日遠。回頭猶望帝鄉山。

● 逢坂戰

神功皇后三韓を征討し筑紫に凱旋して皇子を産ませらるゝや仲哀天皇の庶皇子麝坂王天位を奪はれんことを恐れ弟忍熊王と相謀りて皇后の入京を拒む皇后乃ち武内宿禰に命して之を討たしめ玉ふ宿禰乃ち精兵を率ゐて山背より菟道に至り謀を以て王の軍を破る王是に於て兵を引きて逃る宿禰之を追擊して逢坂に來り又王の軍を破りしかば王遂に勢多川に走り自ら

投身して薨じ給へり

● 走井

大谷町茶店の庭中にあり涌勢走るか如きを以て此名あり古來關の清水と並稱して甚だ有名なり

逢坂の關とはきけと走井の　兼道
水をばえこそ止めざりけり

走井の筧のきりはたおびけど　讀人不知
長閑に見ゆる望月の駒

熊谷立閑

悠々誦水鐘二秀精一。走流勢活有二餘情一。尋常難レ比貧泉水。
一瀨自知爽二客情一。

● 追分町　附大津繪

市の極西にありこゝ國道二岐して一は京都一は伏見に向ふ故に此名あり又此地今近江、山城の國境となれとも往古は山城に屬し國境は逢坂の南兩國寺ありしと云ふ

元錄年間大津又平と云へる畫工あり常に鬼の念佛、奴の餘持藤娘等の戲畫をものし之に粗末なる彩色を施し當地に於て販賣せらる往來の旅人爭ひ求めて之を土産とおしゝより遂に世上一般に流布せり之を大津畫の元祖とす俳人芭蕉が粟津無名庵にて詠みたる句あり曰く

大津畫の筆のはしめは何佛

● 練清水

神出大練寺境内にあり傳へ云ふ昔近江朝の時天子の御衣を此水にて練りて奉りし故に名づくと又羽柴秀吉此の水の清洲なるを賞味し遠く聚樂亭より引きて茶用に供せられしと云ふ

● 大津運河

明治十四年時の京都府知事北垣國道の計畫起工する所にして十八年六月工を初め二十三年四月竣工式を擧行し天皇皇后兩陛下の臨御を仰きたり水路は市の西北三保崎に起り三井寺山下より隧道を開鑿して京都市鴨川東岸に至る此延長六千百七間（但藤尾に至る一千三百四十間）工費百十九萬圓人夫を使役すること四百万人年を閲すること四年八ヶ月なり

● 園城寺

別所にあり天台宗寺門派本山にして昔し弘文天皇の遺命により皇子大友與多王の建立開基せられし所なり而して貞觀中智證大師之を再興して延暦寺の別院とおし台教傳法の道場とおしたり時に坊舍八百五十餘寺領四千六百石餘ありて寺運頗る隆盛なりしが天元正暦以後兩寺相分れて延暦寺を山門と稱し當寺を寺門と稱し各一風をおすに至りてより山門寺門の徒互に反目疾視し遂には爭鬪掠奪を事とし堂塔坊舍の破壞せらるゝ屢々なりき殊に治承四年以仁王に與みし平氏の爲に大惨害を蒙りし事あり又延元々年新旧足利の兩軍此地に合戰し坊舍兵燹に罹りしこと等ありて後世僅に五十餘坊を存する而已

金堂　中院にあり（境内を中院南院北院に分つ）伽藍中の最勝なるものにして内に歴世納付の金銅彌勒佛像を安置す今特別保護建造物たり

三井水　金堂の西にあり之れ俗に所謂三帝（天智、天武、持統）降誕の節俗湯に供せられし水にして是に因て當寺を三井寺と名づくるなりと云ふ此説信し難し三井はもと御井と稱し

當寺園伽井の尊稱ありしを後世之を三井と改め世人の崇敬を深からしめんが爲め故更に三帝降誕水に附會せしおるべし

詠むれば心のそこぞすみまさる　三井の清水にうつる月影　道珍

昔への御代の初湯にくみそめて　遠くすむべき我寺の水　良守

圓滿院　北院にありると京都岡崎町にありしを天文中こゝに移す悟聞僧正の開基にして園城寺長吏の住房あり寺中有名なる應擧筆七難七福の繪畫を藏せり

金堂の傍にあり中に一個の梵鐘あり（高五尺五寸厚三寸五分、口徑四尺一寸）傳へ云ふ昔し田原藤太秀郷の龍宮より得來りし者なりと詳しくは栗太郡藤原秀郷の故事と云へるを參照せらるべし

其他食堂に辨慶の汁鍋と云へる者あり往古大衆僧徒當寺に集會せる時使用したる者なり又三重塔は德川氏の伏見城より移したる者經堂は智證大師入唐傳來の經籍を納めたるものなり

● 正法寺

山腹にあり西國三十三所の一にして一に三井寺觀音とも云ふ延久四年智證大師の開基にして後三條天皇の勅願所あり境内頗る眺望に富み茲に登臨すれば琵琶太湖を初め遠く湖東の諸山を一望して風光明媚湖南第一の勝地なり

● 弘文天皇山陵

三井寺山内にあり天皇御名は大友天智天皇の皇子にして御母は伊賀采女と申す大化四年を以て御誕生あらせらる天皇天資總敏にして博學あり嘗て詩を賦して曰く皇明光日月。帝德輝天地。三才拜泰昌。高國表臣儀と是我國詩賦の始なりと天智天皇嘗て御不豫に渡らせ玉ふや皇子猶幼少なるを以て皇弟大海人を召し天位を讓らんと宣ひしも大海人病を以て之を辭し且つ出家して大和吉野に入らせ玉ふ是に於て天皇崩後大友皇子即位し玉ふ大海人之を聞くや直に兵を吉野に擧げ村國男依等を美濃に遣はし東國の國司等を徵して不破の關より近江に入らんとす近江朝廷之を聞て大に驚き急に令を諸國に發して兵を徵せども應ぜるもの少なし既にして官軍の將或は戰死し或は降りて勢威振はゞして敵軍益々强大となり遂に進んで栗太郡瀨田に迫る是に於て天皇御親から禁軍を率ゐ橋西に陣して敵軍を防禦し給ひしも官軍利あらゞ遂に大敗す天皇乃ち物部連麿外一二の舍人と共に走りて志賀山前に至り御親ら縊れて崩し玉ふ實に壬申の年七月二十三日にして御年二十五之を壬申の亂と云ふ明治三年七月謚號を弘文天皇と奉る

● 新羅神社

園城寺の北方にあり貞觀二年智證大師の建立なり傳へ云ふ智證嘗て唐に渡り求法の後歸朝せんとする時海上に於て一老翁の忽然として顯はれ大師に云ひける樣我は之れ新羅國の明神なり今日以後誓て汝の敎法を守護すべしと其まゝ影を海中に沒せり大師之を見て佛法興隆の瑞示なりとし大に喜び歸朝の後其神像を刻し一祠を建立して安置し以て園城寺の鎮守とす新羅神社即ち之なり

新羅より三井の流れにやどりきて　兼邦

幾世すむべき神の心ぞ

● 源義光墓

新羅神社の西方にあり義光は伊豫守頼義の第三子にして幼時新羅神社に加冠して新羅三郎と云ふ寛治三年兄義家陸奥に至りて清原武衡を攻むるや義光時に左兵衛佐として京師に在りしが直に官を辭して赴むき俱に協力して金澤柵を攻めて之を陷る後京師に歸へり刑部少部となりしが晩年出家して三井寺北院に金光院を建てゝ居住し大治二年十一月二十日歿す年七十三子孫世々此地に居す

● 大津城址

湖岸にあり天正十三年羽柴秀吉坂本城を茲に移築して京極高次を封す慶長五年關が原役石田三成等高次を已に從はしめんと欲し來りて質子を求む高次意は德川氏に屬すと雖も地大阪に接近し今反意を表せば忽ち攻圍さるゝ恐あるより暫らく西軍に與みし時機を待ちて東軍に投せんと欲し遂に子熊若丸を送れり八月高次朽木、脇坂等と軍に將となり北陸道に向ひしが途海津に至りて俄に軍を歸へし大津城に入りて反意を表す西軍之を聞くや直に毛利輝元秀包等に命じて當城を包圍せしむ時に淀君屢々使を遣はして高次に諭す所ありしも高次聞かゞ西軍砲臺を高觀音に置き又兵船を湖上に浮べて水陸交々攻むされゞ城兵屈せゞ能く之を防ぐ會々砲丸飛來して天守樓を破壞するあり高次妻女大に恐れ連りに和を講せんことを乞ふ高次是に於て已むを得ゞ城と質子と交換し去て高野山に入る幾もなく關原の勝報至り德川家康高次を召し能く少兵を以て孤城を守り西軍を沮止したる功勞を賞し若州小濱城に封すと云ふ

因に記す關が原役後大津城は戸田左門之を賜ひ後膳所に移築し此地には代官を置きしか明治元年之を廢したり

● 滋賀郡

本郡は一面湖に濱し西は山城國に境し北は高島郡に隣り南は勢多川を隔てゝ栗太郡に接し中央は大津市によりて兩斷せらる東西三里四町南北十里十六町面積十六方里八六而して二町十二ヶ村七十一大字ありて戸數七千四百四十八、人口四万二千八十一あり。

● 岩間寺

石山村大字内畑にあり一に正法寺と稱し西國三十三所の一なを傳へ云ふ養老六年元正天皇不豫の事あり乃ち越後の人泰澄法師を召出され祈禱せしめ玉ふに忽ち平癒ありしかば天皇感賞ましゝ乃ち此地をトし勅して七堂伽藍を創建せしめ給ふ時に大なる桂木あり師乃ち此木を切て千手觀音を刻し金銅の佛を籠めて安置す今の本尊即ち之なり其後天正五年醍醐理性院の僧堯助之を再興したるも地僻遠にして賽客の往來不便なるにや漸次荒廢しつゝありと云ふ

● 立木觀音

同村大字南郷の山中にあり當寺の緣起は未だ詳にせゞと雖も往古弘法大師此地に來り立木に彫刻したる靈佛なりとゞ近時賽客頗る多く毎月十七日には境内頗る繁昌あり

● 石山

勢多川の西岸にあり金山奇岩怪石を以て成る故に此名あり此

地古來觀月の勝地として八景の一に數へられ又夏時螢狩を以て宇治と共に雅俗の賞する所あり又山中に小屋谷と云へる所は平治の亂惡源太義平の潛伏して難波經房に捕へられし舊跡にして又南方山上には定利義昭の織田氏の軍を防ぎたる城趾あり

都にも人やまつらん石山の　　長能
　峰にのこれる秋の夜の月
あひかたき花のさかりに見つる哉　　爲家
　けふ石山の春の月影
石山の石にたはしるあられ哉　　芭蕉

石山寺

山腹にあり眞言宗西國三十三所の一にして天平勝寶元年聖武天皇の勅願により良辨僧都の開基なり而して往古は寺領六万石を有し國家鎮護の道場として曆朝の叡信深く臨幸ありしこと屢々なりき然るに承曆二年二月初めて回錄の災に罹り全寺烏有に歸したりしが本尊金銅の靈像は幸ひ無事なりしを以て再び本堂を建立せり今の堂即ち之なり（今を距ること八百三十餘年）其後建久元年源頼朝諸堂伽藍を修補す今鐘樓にある梵鐘は即ち當時頼朝の寄附したる者なりと又慶長七年豊臣秀吉の側室淀君伽藍を修補せらる今尚内陣欄間に其紋を掲ぐ又門中安置する所の二王の像は有名なる佛工運慶、湛慶の作なりと云ふ又古來即位の大禮ある毎に必らず開扉のことありて實に縣下屈指の巨刹なり

月見亭　東方山上にあり一に大觀亭又は齡眸亭と名づく前に勢多川を控へ遙に田上、金勝、三上の諸山を遠望して風景頗る宜し明治十一年十一月　今上天皇陛下茲に行幸あり同二十年二月　皇后陛下又こゝに行啓遊ばされて當山の風光を御賞美遊ばされたり

源氏間　本堂の傍にあり之れ才媛式部が源氏物語を著せし所なり、式部は藤原爲時の女寛弘元年八月當山に參籠なし源氏物語を書かんとす時に仲秋十五夜の明月玲瓏として湖上に印するを見て須磨、明石を回想し始めて筆を執り遂に全篇六十四帖を書き終り後大般若經を書寫して之を奉納せりと今尚同女の用ひたりと傳ふる硯及び狩野右近筆式部の畫像等あり

露の世を見るにつけてもかけらふの　　公條
　石山ふかき寺をしそ思ふ

國分寺舊跡

石山村大字國分にあり天平十三年聖武天皇每國に勅して僧、尼の二ヶ寺を建立せしめ僧寺を金光明四天王護國寺と稱し僧二十人を置き封五十戸、水田十町を施し又尼寺を法華滅罪之寺と名づけ同しく水田十町を寺領となし玉ふ而して是等國分寺は何れも國府附近に建立し以て國司の監督を受けしめたり（此時近江の國府は瀨田に在り）故に後年源平二氏勃興し國府廢せられてより國分寺亦盛あらず其後兵燹に罹り或は雨露に侵潤せられ遂には頽破磨朽して後世に傳はらざるに至れり今同村に塔田、堂の前、藥師田等坊名を冠する字多くあるは皆往古大伽藍のありし舊跡なり而して是等は國分僧寺にして國分尼寺の舊跡は未だ不明なるも亦この附近にありしなるべし

粟津原

膳所町より石山村大字鳥居川に到る湖邊の總稱にして今多く田圃となれるも往古は大津市馬場に到る迄、一面の曠野なりしと云ふ今松樹路傍に列植せられ枝間白帆の點綴せる樣風景絶勝所謂八景の一勝地なり

粟津野の尾花は風にちりやらで　　慈鎭
　にほてる露は螢なりけり
逢坂の鳥の音遠くなりにけり　　頓阿
　朝露わくる粟津の丶原

粟津原戰

壽永二年木曾義仲平氏を追ふて京師に入り頗る暴戾を極めてより後白河法皇之を憂へ遙に源頼朝を召させ給ふ頼朝乃ち弟範頼、義經をして之に赴むかしむ義仲之を宇治瀨田に防ぎしが宇治の守り敗るゝに及で瀨田に出で今井兼平と協力して範頼の軍に當りしも亦敗軍し遂に義仲兼平共に戰死せり

今井兼平墓

粟津原田圃中にあり兼平は中原權守兼遠の子樋口次郎兼光の弟にして今井四郎と稱し義仲四天王の一人なり粟津原の役源義弘と兵五百に將となり國分寺毘沙門堂に陣し源範頼の軍を防ぎしも遂に敗れ既にして義仲戰死したりと聞き已も亦刀を含み逆まに馬上より墜ちて死す碑は寛文元年膳所城主本多俊次の建つる所なり

膳所町

琵琶湖畔にあり本多氏六萬石の舊城市にして古くは濱田村と云ふ一漁村なりしが近江朝庭の時陪膳を獻進したるを以て膳所と名づく其後粟津莊となり明治の初年粟津錦に分村したるも今合併して膳所町となり郡中一の都會たり而して其粟津と稱するは往古當村の漁夫田中恒世なるもの日吉祭神に粟飯を獻進したる例後世に傳はり每日吉祭禮に神饌を調べ之を唐崎に到りて獻進する古例ありしを以てなり

とゞこほる時もあらじな近江なる　　兼盛
　陪膳のはまのあまの日調は
あま人もおもの丶はまの濱づとを　　同人
　月にあけぬと今やいそがん

膳所城跡

膳所町湖岸にあり當城は慶長六年德川氏の大津廢城を移し關西諸侯に課役して築かしめたる所にして東西二ヶ所に總門を設け其西方を大津口と稱し、其東方を瀨田口と稱し其間二十四町ありて結搆壯麗湖濱の一美觀なりしが明治の初年城郭を撤去し其舊址に監獄署を設置したり而して當城始は戸田一西を封じたるも元和三年其子氏鐵播州尼崎に轉封後本多俊次茲に來る同六年俊次參州西尾に移封して菅沼定芳之に代る寛永十一年其子定昭丹波龜山に轉じ石川忠總之に封せられ慶安四年石川康勝伊勢龜山に封せられ本多俊次本城に復封し爾來子孫世襲して十四世康穆に至りて王政維新となり藩籍を奉還す

錦織

滋賀村の一大字なり傳へ云ふ近江の朝天皇の御衣を織りたる所なりと或は言ふ應神天皇の世吳織、穴織の二女吳國より來朝し始て綿綾を織出し後年諸國に其人を配てり當地は其織女の居住したる所なりと

志賀大津宮址

錦織に御所跡と稱し一基の石碑の建てる所あり天智天皇六年三月大和國岡本の宮より都を茲に遷し志賀大津宮と稱し玉ふ然るに弘文天皇の代に壬申の亂起り天皇之に崩御し玉ひければ皇叔大海人即位し（之を天武天皇とす）都を再び大和に遷させ玉ひ以來廢墟とある

古來吟客名手工。沙鳥雲帆浦々風。万世嚴然詩筆祖。　梁星巖

無人弔問大津宮。

さゝなみや志賀の都はあれにしを　昔しながらの山櫻かな　忠度

漣の國つかみの浦さびて　荒れたる都みればかなしも　黒主

近江の荒たる都を過る時よめる　柿本人麿

玉だすき、畝火の山の、桧原のひじりの御代ゆ、あれましゝを、そらみつ、倭をおきて、青丹よし、奈良山を越え、いかさまに、おもほしめせか、天下る、ひなにはあれど、岩橋の、淡海の國の、さゝなみの大津の宮に、天の下、しろしめしけん、すめらぎの、神のみことの大宮は、こゝときけども大とのは、こゝといへども、春草のしゞにおひたる、霞たつ春日のきれるもゝしきの、大宮所、見れば悲しも

反歌

さゝなみの志賀の辛崎さき〳〵あれど、大宮人の舟まちかねつ

さゝなみの志賀の大輪田よどむとも　昔の人に又もあはめやも

志賀花園

天智天皇在都の時多く櫻樹を植えて叡覽遊ばされぬ之を志賀花園と稱せしか後年遷都廢園後大友與多王の莊園となりしが王出家して其處に三井寺を建立せり而して三井寺を一名園城寺と稱するは即ち志賀花園の舊跡なるを以てなり

近江なる志賀の花園里あれて　鷹羽院

鶯ひとり春を忘れぬ

宮木守なしとや風もさそふらん　咲けばかつちる志賀の花園　大御門院

大伴黒主社

滋賀村大字南滋賀にあり黒主は大友與多王の孫にして世々大友卿（雄琴邊を云ふ）に住し後大伴に改む爰代より志賀郡司となり又園城寺の別當たり黒主又和歌を善くし六歌仙の一人に數へらる延喜十七年宇多法皇石山に御幸あり還幸の途次大津打出濱を過ぎ玉ぶ時に黒主こゝに假殿を設け多く菊花を植え奉迎し左の一首を詠みければ法皇御賞美のあまり人々に數多物を下賜し玉へけると云ふ

さゝら浪まもなく岸を洗ふめり　おぎささよくは君とまれとか

崇福寺舊跡

滋賀村の山間にあり一名志賀山寺とも云ふ天智天皇大津遷都

后一伽藍を建立せんとの御志ありしが未だ其勝地を得ざりき一夜夢に一沙門來り奏して曰く西北の山に靈區ありと帝覺めて後出で乾方を望み玉へば輝々として火光あり依て明朝侍臣をして之を求めしめ玉ふ暫〳〵して侍臣還へり反命して曰く洞内に一異人あり誰何すれども答へざると帝是に於て御親ら其處に行幸し玉へば彼の異人洞口より出で迎ひて曰く此地は古仙の靈窟ありと言終て見えざる帝乃ち其靈區なるを知り翌七年正月茲に一宇を建立し丈六の彌勒佛を安置し崇福寺と號し玉ふ然るに後年屢々火災に罹りしよりいつしか頽廢に歸し今は唯其舊跡の存せる而已

浪にたゝふ鐘の音こそあはれなれ　夕べさびしき志賀の山寺　良經

梵釋寺趾

舊跡今分明ならざれども滋賀村内にありしと云ふ當寺は延暦五年正月桓武天皇の勅建にして梵天帝釋の二像を安置したるを以て寺號とす當時は伽藍宏壯にして延喜式十五六寺の一なりしと云ふ弘仁六年四月嵯峨天皇辛崎に幸し途次崇福寺を詣し次で當寺に臨幸あり輿を駐て詩を賦し玉へば皇太弟及群臣等奉和する者多かりし事日本後記に見えたり然るに中世以后甚だ衰頽し遂には廢滅に歸して其舊跡すら分明ならざるに至れり

雲嶺禪奇人縱絶。　昔將今日再攀登。　嵯峨天皇
老大松杉離舊藤。　幽奇嚴嶂吐泉水。
忽銷煩想夏還冷。　梵宇本無塵滓事。　法延唯有薜羅僧。
欲去淹留暫不能。

長等山

一に志賀山とも云ふ郡の西方に登え南逢坂山に連なり北比叡山に接す山勢高からざれど雖も古來和歌に詠ぜられて有名なり又滋賀村大字山中より京都に出づる道を志賀の山越と云ふ而して彼の古歌に所謂志賀山の井の舊跡は今尚此山中に在りとも云へり

さゝなみや長等の山の花さかり　志賀の浦風ふかずもあらなん　師俊

櫻花道みえぬまで散りにけり　いかゝはすべき志賀の山越　成元

めつらしや昔し長等の山の井は　しつめる影そくちはてにける　讀人不知

志賀浦

今の滋賀村湖邊の總稱にして往古和歌の名所なり

さゝなみや志賀の浦風ふくまゝに　氷を出つる春のつりふね　順德院

さゆる夜は遠さかりゆく志賀の浦の　波のこゑたに千鳥なくなり　頼政

高穴穂宮址

坂本村大字穴太に高畠と稱する所あり之れ其舊跡なりと景行天皇五十八年大和纒向の宮より都を茲に遷させ給ふ大祖神武天皇より十二代景行天皇の末に至る迄皆都を大和に定め玉ひしが此時始めて他國に遷させ玉ふ而して成務天皇六十一年間茲に都し玉ひしも仲哀天皇に至り長門國豐浦宮に遷させ給へり

足利義晴寓址

穴太萬松院此を穴太新坊と云ふ天文十七年三好、松永の徒五に兵を交へ京師騷擾し幕府の力能く之を制禦し難きにより將軍足利義晴逃れて近江に來り坂本常在寺に隱れしか後茲に移り憂鬱病を發し遂に十九年五月四日薨を享年四十萬松院曄山照公大居士と諡し東山慈照寺に葬る而して其子を宰相中將義藤と云ふ茲を退き比叡辻の寶泉寺に移る時に夏草の庭前に茂れるを見て一首の感慨を洩せり

別れゆく涙は袖にしぼるゝを
おけくと猶も露ぞ置そふ

唐崎

下坂本の南方湖中に突出する所にして老松の所在地として古來有名なり又祠あり唐崎神社と云ふ毎年六月例祭を行ふ之を御手洗祭と稱し衆人群集して甚盛なり

近江のうみくちくる汐もおきものを　顯房
たれ辛崎といひはじめけん
みそぎするけふ唐崎におろすあみは　平祐
神のうけひくしるしなりけり

唐崎松

古來八景の一に數へられ普く世人に膾炙せらるゝ一本松は人皇三十五代舒明天皇の世始めて植えたゝしも後年風災に罹りて顚倒せるより天正十九年新莊駿河守直賴之を植え繼がしめたるなりと今や枝葉八方に廣かり數百の支柱を建てゝ維持す

近時甚た枯衰の徴あるを以て湖面を埋め立て以て根蔓伸長に便せり

浦にみつ汐はおくとも辛崎の　宗良親王
松や波間にいつも見ゆらん
唐崎の松は扇のかなめにて　慈鎭
こきゆく舟は墨繪なるらん
唐崎の松は花よりおぼろにて　芭蕉

唐崎松之記

叡山の精舍佛閣の跡も二十年以來鹿のふしどゝなり峙つたひの道はおとろか下に埋もれはてゝ踏わくるたよりなかりしをかしこき世の御かための命により山門再興の事ありて、顯密の両宗と日々年々にいやまさりて久方の日吉の祭禮も昔のかぞこそなけれかとのやうに執行はれ志賀の唐崎の御幸も例にたがはぬ松のほとりに神輿の御船をおらへ御供おとそおへ奉るに管絃のものの音さゝ波松風にたぐひていとたふとくおん侍りさるを此松はいつぞやの大風に倒れてかたばかりものこらぬ侍れば御幸の神威も事たらぬやうに世にもひひあへり、こゝに新庄駿河守直賴とて文武世にすぐれ五常も自から備はりたる人ありさればにや齋津の御城郭をあづけ給はられしや其はらからに松庵東玉離齋直稼とてふたりありこのかみの後見にてあひそはれしが彼松の事より〳〵くやみて弟の離齋いて栽ばやとて家中の者にいひて風情ある松をとかたく尋ねられしにからうじてかり求めて植へられめぐりに埒をゆひいかさまにもけに〳〵しければ往來の人も目とゞめぬおきは少し于時天正十九年辛卯年秋の末人もぬきとりかはしみおはらへし

てそれが中によめる「おのづから千とせもふへし唐崎の松にひかるゝみそぎなりせば」ときこゆさて松はやうもおく生付て春おらぬ梢もいまひとしほの緑にて千世の根ざしいちじるき事神慮有かたくおぼえ侍り又或人に松の由來をおほむねとへばそのかみ大津の宮（天智天皇御宇）あめの御門とかや申御門いますかりて大津の都繁榮斜おらをして今の三井寺も彼御門の勅願所として法水の流れ三會の曉までたふまじき御誓約掲焉也、ある時天皇辛崎に行幸ましますに沖中より漁舟二艘さをさして來御門これをちかづけてことのよしを叡覽あれば二人の翁あり（二人に名あり神秘おれは不載）御門詔さま〳〵にて翁も神辨奇特をあらはしてかくうたふ「大伴のみつの濱へをうちさらしよせへる波のゆくへしらすも」とて舟はいづちいぬらんとも見えを則神託にて山王の御神ときこゆ星霜つもりて千とせに餘れり今も祭禮に辛崎にて粟飯の御供おとそおふるも其むかしの事おりとぞついでにさま〳〵の事あれぞくだ〳〵しければかゝを、今此御代に大津いとゝ美々敷おりてむかしの都も及ぶまじう郡のあるじ政道たゞしく民のかまどの煙も朝おゝ〳〵昨日はうすしとおびきそひ上は下をあはれみ下は上を仰ぎていよ〳〵おだやかおる御代にうまれ淡海のうみ水上絶えざらんかとは國家の榮えかはるとはえあるまじきにこそ、于時天正廿年七月下澣

青蓮院尊朝親王

坂本城址

下坂本村今津堂之おり元龜元年織田信長叡山延曆寺を滅し其寺領を收めて之を明智光秀に賜ひ坂本城を築きて之に居らしむ十年光秀叛して信長を京師本能寺に殺するや時に從弟左馬介光春蒲生郡安土城にありしが秀吉大軍を以て東下すると聞き之を沮止せんと欲し兵を率ゐて大津に出でしも秀吉の先鋒既に往路を扼せるを以て打出が濱より馬を湖水に乘り入れて唐崎に着し夫より坂本城に入りしが敵兵既に來集し城を包圍すること數重おり、是に於て光春既に爲す可からざるを知り自ら樓上に登り敵將堀秀政を招きて城中秘藏する所の名器銘刀等を渡し尙甲冑及金百兩を西敎寺に贈りて死後の香資に充てられんことを依托し遂に光秀の妻子及己が妻を殺し次に火を城内に縱ちて自殺す辭世の詩歌左の如し（詩は光春歌は光秀妻）

一戰國中生。未知風月情。朝出師望魁。夕地策運營。
依九臥龍術。横鉾千里行。幾英名如夢。終節歸清明。
はかおさを誰かおしまん朝顏の
盛りを見せし花もひとゝき

西敎寺

坂本村大字坂本にあり大崟山智善院と號す推古天皇二十六年聖德太子の建立僧良源の開基にして天智天皇丈六の彌陀佛を安置して西敎寺の勅額を下賜せらる文明十八年僧眞盛（伊勢國人紀貫之十七世孫）と云へる人あり、少壯僧とおり叡山にありしが此時山を出でゝ西敎寺に住し不斷念佛の規法を立て圓頓戒を弘む時人之を西敎派と稱したるが其弟子盛全に至りて眞盛派と改め天台宗の一派とおれり後年後陽成天皇勅して京都粟田の法勝寺と合併せしめ玉ふ今當寺方丈に安置する藥師佛即ち夫おり

比叡山

坂本村西方山城國界に聳ゆる高山にしてもと比江又は日枝と書せしを傳敎大師當山に延暦寺を建立し、桓武天皇と心を一にし之を興隆ありし故に比叡と改めたりと又平安城の東北に當るを以て艮峰とも稱し支那の例を以て天台山、四明嶽とも云ひ又我立山、鷲山とも稱す而して最高の處を大嶽（四明嶽とも云ふ）と云ふ直立一千八百五十尺、登路坂本村より一里餘あり此に登臨すれば京都市數萬の人戸は雲煙中に隱見し琵琶湖亦一大鏡の如く往來の船舶木葉の點ぜるが如く、登客をして恰も羽化登仙の思あらしむ其他東嶺、南嶺、北嶺、西塔等の諸嶺あり

鷲の山むかしの春は遠ふけれと　　時實
　みのりの花はさきにほひけり
日かゝのみふりつむ雪に大ひえや　　兼勝
　ふしを都のあけぼのゝそら

林羅山

良嶽從來守紫宸。　先王立作國家鎭。　雲波五色三津浦。
星斗千年七社神。　湖水朦朧空得月。　山櫻寂莫自過春。
好風美景非無意。　吾亦東西南北人。

紀貫之墓

比叡山中裳立山にあり貫之は望行の子にして有名なる歌人なり延喜中勅を奉じて紀友則壬生忠岑等と古今和歌集を撰す後年土佐守となり、承平中任滿て京師に還へれり彼の有名なる土佐日記は此時に於ける旅行日記なりと貫之天慶九年歿す年六十五去る三十七年公の一千年忌に當れる時特旨を以て從二位を贈られたり

來迎寺

下坂本村大字比叡辻にありとも傳敎大師の開基にして初地藏敎院と名づけしが長保三年惠心僧都當寺にありて彌陀聖衆の來迎を感じ自ら其儀相を畫き尙彌陀來迎の木像を刻して安置し紫雲山聖衆來迎寺と改む、後年洛東元應寺の兵火に罹りて燒失するや其本尊藥師如來を當寺に移せり、客殿に八景の間七賢の間、龍虎の間、四季の間等ありて皆古名家の筆あり其他名畫像彫頗る多く國寶とありしもの十數点あり、又境內に森可成の墓あり可成は美濃の人越後守重可の子なり元龜元年九月二十日坂本合戰に戰死したるを住僧茲に埋葬す

日吉神社

比叡山麓坂本村に鎭座す創立は欽明天皇の代なりとも云ひ或は天智天皇の代なりとも云ひ、未だ詳からぜと雖も延喜式內の舊社にして大山咋神を祀る往古は大比叡神社と號し、延暦寺創立以來同寺の守護神となる而して祭神總て二十一社あり即ち大宮、二宮、聖眞子、八王子、客人、宮、十禪師、三宮是を上七社とし、下八王子、王子宮、早尾、大行事、聖女、牛尊、氣比宮之を中七社とし、新行事、岩滝、山末、劍宮、小禪師、惡王子、大宮竈殿之を下七社とす、古來皇室の叡信深く臨幸ありしこと枚舉に遑あらぜ、近江第一の大社にして明治四年官幣大社に列せらる

祭禮は四月十四日に行ふこの儀式は延暦十年傳敎大師の定められし所にして往古は山法師各甲冑を帶し神輿の前後を護衛し若し一人たりとも行列を犯す者あらば立所に之を斬殺し毫も假借する所なかりしと、かゝる亂行暴爲を振ひしより今に至る迄其餘弊を存し血を見ざれば渡御せぜと云ひ傳ふ又往古は陸路を渡御したるも延文年中淵水漲り唐崎の地汎濫したるを以て乘船にて渡御したるが例となり、是より遂に船祭となりしなり、境內幽邃閑雅溪流潺湲として流れ夏季避暑に適す又楓樹多くあれば降霜の候雅俗の杖を曳くもの頗る多し

日吉とてさても頼みしあとぞかし　　慈鎭
　あはれはかけよ志賀の浦波
ねぎかくる比叡のやしろのゆふだすき　　實因
　草のかれはもことやめてきけ

延暦寺

比叡山腹にあり延暦七年僧最澄（傳敎大師）比叡山に登り一梵宇を建て比江山寺と號し後一乘止觀院と改む同二十三年最澄桓武天皇の勅を奉じて入唐し求法の後翌年歸朝し大に天台宗を弘め遂に其開祖となる、是に於て皇室の尊信篤く皇國第一護國の道場となり弘仁十四年嵯峨天皇勅して延暦寺の號を賜ふ而して寺中に三院あり一に之を三塔と名づく即ち東塔、西塔、橫川是なり

東塔には根本中堂即ち延暦寺あり之れ大師の創立せる一乘止觀院にして藥師佛を本尊とす其他戒壇堂、大講堂、法華堂、文殊樓、辨慶水、傳敎大師廟所等あり

西塔は東塔の西北にありもと山城國に屬したるも近世之を滋賀郡に入るこゝには釋迦堂、相輪堂、椿葉、常行堂、慈惠大師堂等あり之等を總べて寶幢院と云ふ、又辨慶の舊跡あり就中相輪棠は寶幢一基の高さ四丈五尺九層の形ありて十一寶幢を懸け中に傳敎大師の碑文及寫經五十八卷を納むと云ふ

橫川は橫川谷を隔てゝあり中堂を楞嚴院と云ふ其他四季講堂惠心僧都の廟所、慈忍和尙廟、不動堂定家卿墓等あり定家卿て當山に來り歿後の石塔を建つその時の歌

ふむだにもえにしあるらんこの山の
　土となる身は頼もしき哉

又中堂の西に橫川の水あり古歌に多く詠めり中二三首を茲に掲ぐべし

都より雲の八重たつ奥山の　　天暦御製
　橫川の水は住よかるらん
思ひ出づる雲井の月の影を　　眞緣
　橫川の水にすましてぞみる

右に掲げしは最著名なる者而已なり此他堂塔坊舍頗る多く往古は比叡三千坊と稱し山上山下は勿論廣く近江全郡に散在し野洲郡守山の東門院は其領界の東門たりしと云ふ、當時は寺領六万石餘ありて寺運最も隆盛なりしかば僧侶中傲慢橫暴の者多く初めは腥食女犯而已なりしも遂には兵器を蓄へ糧食を積み恰も僧兵の觀をなし而して已等の意に滿たざることあれば直に大擧日吉神輿を奉して京師に亂入し或は朝廷に嗷訴し或は武人と戰ひ其亂暴狼藉實に名狀すべからざるに至りしより、織田信長之を憎み元龜二年九月大軍を率ゐて山下に至り火を縱ちて四面より攻擊せしかば滿山無數の坊舍忽ち烏有に歸し數千の僧侶より婦女童幼に至る迄悉皆斬殺せられて山中爲に寂然たり、然れども後年羽柴秀吉此地を領するに及んで

古名刹の荒廢するを惜しみ寺領千五百石を附して之が再興を謀り德川氏亦五千石を與へて慶長年間より寛永十七年に至り悉く改造せしめかば、堂宇や、舊觀に復するに至れり

法の水あさ〳〵あゝゆく末の世を　思へばかなし比江の山寺　慈鎮

大ひえやこゝに佛の名もたかき　るりの光りや世を照らすらん　宜胤

●眞葛原

無動寺山麓一帶を云ふ昔慈鎮和尚こゝに住居し左記眞葛が原の秀詠ありしより有名となる後慈鎮京師圓山に移轉せしより世人亦其處を眞葛原と名づくるなり

我戀は松の時雨のそめかねて　眞葛が原に風さわぐなり

●堅田町

湖畔に位し當郡第二の都會として稍繁盛なる所なり此地古くは柳田莊と云ひ湖邊を關の濱又關屋の濱とも云ふ往古茲に關を置きて湖上往來の舟を檢査したる所なり、又此地の對岸を野洲郡木濱とす両岸の間僅に十數町之れ湖上最も狹隘なる所なり

平治の亂源義朝京師に敗軍し主從數十騎と共に龍華越より落ちんとする時山門僧徒の遮ざる所となり、陸奥六郎義隆戰死しければ義朝其首級を携へ堅田浦に出で之を水葬に附したる事平治物語に見えたり

月に出る堅田のあ釣まの舟は　定家

氷か浪か定めかねつゝ　問はゞやなを夕波かけてあま小舟　雅忠

かへる堅田の月はいかにと

●勾當内侍墓

堅田町大字今堅田にあり内侍は藤原經尹の女にして後醍醐天皇の侍姫なりしが後新田義貞の王事に盡しゝ偉功により、之を義貞に賜ふ、建武四年義貞越前に出陣するや内侍留りて今堅田にありしが義貞藤島に戰死すと聞き悲痛の餘り身を湖中に投じて死す土人其屍を得て之を葬むると云ふ一說に内侍義貞の首級を得て嵯峨に至り剃髮して爰に一生を終ふと

●堅田陣屋舊跡

元祿十一年堀田備後守正高下野國より爰に移封し祿一万石を食む以來六世正敦に至り更に三千石を加封せられ、其子攝津守正衡に至り文政九年下野佐野に轉封し以后廢藩す今の堅田小學校は其舊跡なり

●浮見堂

堅田湖岸を斗出すること十數間夙に八景の一として世人に喧炙せらるゝ所なり當堂は一條天皇の代惠心僧都の開基にして僧都自作の千體佛像を安置し初め千体佛堂と稱したるも後海門山滿月寺と改めたり、而して延享年間堅田町に火災ありし時當寺其類災に罹りしも後年櫻町天皇の舊殿を下賜せられ再び建立することを得たり、然るに明治廿九年湖水汎濫し堂宇佛體共に流失せしを以て翌年之を再建して舊觀に復さしめぬ

鎖あけて月さしいれよ浮見堂　芭蕉

近江國志賀郡堅田村なる海門山滿月寺は世に浮見堂と稱へて八景の中にも殊にすぐれたる所にあんこは今より九百餘年の昔　一條天皇の御時惠心僧都の創立にあり、僧都自ら千の佛體をきざみて安置せられし靈場なりとぞ、其後多くの年月をふり内には世の盛衰に隨ひて樣々のことありしかとも、尙世々の帝の尊信を蒙り殊に延享の頃堅田村に火災ありて類燒せし折にも　櫻町天皇の御舊殿の内なる木材を下し賜りて再建し同じ帝の尊儀をも安置し奉りしよりいよ〳〵光をそへつゝありしに明治二十九年洪水の爲に堂宇佛體共に流れ失せしはかしこみても尙餘ある業にあんゝされど有志の人々はかりて速に再建せられしに宮中よりも若干の寶を下し賜ひて有りしにもまされる御堂となれるを歡ひ思ふのあまりに其故よしを世の人々にも知らさまほしくて聊かしるし置にあん。

仇波に沈みてもなほ照りそふや　みのりの月の光なるらん

明治三十二年三月　權掌侍從五位　藤原敦子

●眞野

眞野村湖邊は往古入江ありて古歌の名所なりしが今は其跡皆埋もれて田圃となれり

鶉なく眞野のいり江のはま風に　尾花なみよる秋の夕くれ　俊頼

近江路やまのゝはまへに駒とめて　比良の高根の花を見る哉　頼政

●龍華關趾

伊香立村大字上龍華畑山と稱する所にあり天安元年四月栗太郡大石關と共に爰に關剗を設け京師より北國へ赴むく者を檢察す是れ近江三關の其一なり

●氷室舊跡

古來龍華にありと雖も所在確定せず仁德天皇の代始めて每國に之を置かしむ其貯藏の法たる先づ地下を堀ること一丈餘其下に茅草を敷き上に氷を置き又其上を草もつて蓋し夏季に至りて用ゆ此地は山間溪谷にして季候寒冷なれは藏氷所としては適當なりしならん

●比良山

一に比聯とも書き又小松山とも云ふ直立二千九百尺登路二里餘周圍十五里近江第二の高山なり而して山頂を蓬萊山と稱す樹木なく唯茅草叢生し冬春は白雪を頂き銀光漓然として湖面に印して風光絕美所謂八景の一なる比良の暮雪とは是なり又山中（北小松水谷）に飛泉あり高三丈幅三間あり天文二十三年足利義輝關白二條晴良と俱に爰に遊び始めて之を楊梅（溶滓とも書く）と命名す之れ江州第一の瀑布なり

花さそふ比良の嵐ふきにけり　こぎゆく舟のあと見ゆるまで　宮内卿

さゝなみや海ふく比良の湊風　高根のゆきの影はらふなり　實因

●白鬚神社

小松村大字鵜川明神崎にあり延喜式には高島郡志呂志神社とあり又比良明神とも云ふ祭神猿田彦命にして垂仁天皇二十七

年の創立あり昔し聖武天皇の代良辨僧正靈夢により石山に到る岩上に一老翁の釣を垂るゝあり僧正怪しみ問ふて曰く汝何人ぞやと老翁曰く我は比良の明神なりこの山八葉蓮華の如くあり紫雲常に掩ふて觀音利生の地なりと言終て消え失せけり良辨乃ち奏聞して比良明神に此地を乞ひ佛閣を建てける由石山寺縁起に見えたり又康安二年天下旱魃し湖水減少したる時社前町餘の沖に石の鳥居顯はれけること太平記其他の書に見えたり若し事實とすれば湖水增量して陸地を犯せしならんか

栗太郡

往古は栗田又栗本とも書けり西は勢多川を隔てゝ滋賀郡に對し北は野洲郡東は甲賀郡南は山城國に接す東西三里二町、南北五里十七町、面積十三方里五分又戸數八千九百六十三、人口四万九千四百二十四ありて一町十四ヶ村百十二大字を有す

猿丸太夫舊跡

大石村大字曾束の山中にあり太夫は一說に山背大兄王の第三子弓削王の別名ありとも云ひ或は攝津菟原郡深草郷の人ありとも云ひ其家系及び時代官名すら不詳ありと雖も晩年茲に幽居隱棲せしものにして往古此地を奥山田と云へば彼の古今集及百人一首に出てたる「奥山に紅葉ふみ分け鳴く鹿の聲きく時ぞ秋は悲しき」との名歌は茲地にて詠みたるあるべし

大石氏舊跡

大石村大字大石中にあり是れ赤穗四十七士の首領として芳名天下に隱れなき大石良雄の出生せし所なり良雄其先は藤原秀郷に出づ秀郷已が領地田原郷（大石邊を總稱す秀郷の田原藤太と稱するも之に因る）を退き關東に赴むくの日一子を大石村に留む之より子孫累代茲に住居し遂に氏を大石と改め足利氏に仕へしか後年應仁の亂に遇ひ一家全滅したるを以て同族小川久朝を迎へて家督とす而して久朝の玄孫を良信と云ひ、其子を良勝とす良勝江戸に出でゝ淺野長重に仕へ家老職たりしが後年長重の子長直播州赤穗に封せらるゝや良勝亦移りて之に仕ふ、而して良勝の子を内藏介良欽と云ひ其子を權内良昭と云ふ之れ即ち良雄の父にして良雄生まるゝや良昭大石を拂ふて赤穗に移住す而して良雄父早く歿したれば十五才にして家を繼ぎ父の職を襲ふて家老たり元祿十四年三月主君長矩江戸に出で勅使饗應の役を命ぜられ殿中に於て高家吉良義英を傷つくるや大不敬の罪とあり即日自裁を賜ひ並に城地を沒收せられたり良雄是に於て錄を失ひ四方に流寓す而して心常に復讐の念を抱きしが遂に翌十五年十二月十四日同志四十六名と共に吉良家に闖入し義英の首を得て茲に亡君の仇を報し後死を賜はる良雄時に年四十五

大石關址

下田上村大字關津にあり天安元年四月龍華關と共に新に設置せる近江三關の其一なり

大戸川

源を伊賀、甲賀の山間に發して信樂川となり西流して下田上村大字黒津より勢田川に入る一名黒津川と云ひ又古名を田上川と稱し多く和歌に詠まれしは之なり

月影の田上川に清ければ　　元輔
　　あじろに氷魚のよるも見えけり

衣手に田上川や氷るらん　　前左大臣
　　鴈のやま風さえまさるなり

金勝寺

金勝山上にあり天平五年僧良辨の開基にして丈六の釋迦如來を本尊とす天平十五年聖武天皇紫香樂離宮あり當寺に臨幸あり以來勅願所となし給ふ弘仁二年伽藍を建立し大苦提寺と號せしが其后仁明天皇金勝寺と改め勅額を下賜し玉ふ天文十八年堂宇火災に罹りて燒失せしを以て後奈良天皇勅して之を再建せしめ給ふ又當寺は古來皇室武家の尊宗せらるゝこと篤く歷代天皇の綸旨を始め奉り源頼朝、同義經、足利義銓、德川家康等の諸將軍の下知狀に何れも諸人亂入禁止の旨記載あり或は境内竹木諸役免除の朱章を下付せられしを以ても何如に當時崇敬されしかを知るべし、されどかゝる靈地も歲月を經るに隨ひ漸次頽破荒廢しつゝあるは遺憾なり

新善光寺

葉山村大字高野にあり建長五年此地に高野左衛門平宗定と云へる人あり居常佛を信じ信州善光寺に參詣すること四十八度其滿願の日、本尊夢に顯はれ宗定に告て曰く中國の衆生濟度の爲め其地に安移すべしと宗定乃ち一体を分身して故郷に歸り一宇を建てゝ安置し名づけて新善光寺と云ふ寛文元年領主本多俊次（膳所城主）新に堂宇を寄附し累代の祈願所となす爾來崇信するもの頗る多く毎春秋彼岸には參客踵を接し境内立錐の餘地なきに至る亦盛なりと云ふべし

足利義尚陣址

治田村大字安養寺にあり義尚本名を義熙と云ふ足利九代の將軍なり長享元年佐々木六角高頼居城觀音寺に在りて屢々台命に叛きしを以て義熙之を討滅せんと欲し九月十二日湖西坂本に來り兵を遣して高頼を觀音寺城を攻めければ高頼忽ち敗走して甲賀山中に逃入せり、義尚乃ち之を追擊せんと欲し十月四日坂本を發し釣に轉陣す（釣とは今の上釣、下釣、安養寺を云ふ）時に義熙一首の和歌を詠みて父義政に送れり

坂本の濱路をすぎて波安すく
　　養ふ寺に住むと答へん

義政返歌

やがて又國治まりて民安すく
　　養ふ寺もたちて還へらん

後土御門天皇亦陣中の勞を思召され中納言藤原實隆を勅使として御製の和歌を賜ふ

君すめば人の心のまがりをも
　　さこそはすぐに治めあすらめ

義熙乃ち返歌し奉る

人心まがりの里を名のみせる
　　直なる君が代につかへつゝ

かくて義熙茲に滯陣すること殆ど半歲其間暇あれば書を讀み文を講じて自ら樂しむ又常に人に謂て曰く此行敵を全滅せざんば再び京師に還らじと因て名を義尚と改む然るに不幸中途病に罹り近德元年三月二十六日遂に陣中に歿す年僅に二十五諡號を常德院殿悅山居士と稱し大政大臣を贈らる

灰塚山

治田村大字川邊にある一小丘あり傳へ云ふ當郡上古は栗樹繁茂せる一大山野ありしを以て土人之を伐採燒棄して漸次開拓せり而して其燒棄せる灰積りて山をなす之を灰塚山と云ふと傳說容易に信ぜべからざると雖も上古郡内に栗樹叢生したりしは事實にして郡名も之に因て栗太（上古栗本と云ふ）と云ひ村名にも今尙羽栗、栗林、新田等稱する所あり其他古來郡内所々より泥炭を產出しつゝあるを見ても上古一大森林ありしことは疑ふ可からざる、日本書記神功皇后記に軍衆走之及二狹々浪栗林一而多斬於是血流溢二栗林一故惡二是事一至二午今一其栗林菓不レ進二御所一とあるは即ち當郡の事を書きたるなり

住蓮坊母公墓

物部村大字焰魔堂にあり承元々年三月住蓮坊罪せられて蒲生郡馬淵に送らるゝや其母朝子之を聞き急に其狀況を見んと欲し追跡して此地に來る會々人あり住蓮既に受刑せりと聞き乃ち池中に投身して死す而して當時朝子の所持したる懷劍今尙同村大寶神社に秘藏せり

觀音寺

常盤村大字蘆浦にあり大慈山と號す聖德太子の開基にして世に蘆浦觀音と稱して有名なり而して往古は七堂伽藍甍を並べ寺領五百六十石餘を有し盛大なる寺院ありしも中世以降甚衰微したるを以て應永十五年之を中興す慶長五年關が原の役德川氏の爲め殊功ありしを以て後年當寺に於て住職及び大津の商家十四屋總左衛門とに江州代官を命じ又湖上船舶の惣司を兼さしむ今大津市に觀音寺町あるは當時住職の邸趾なりと又當寺什寶多く藏する中に國寶となれるもの數点あり

安國寺

觀音寺門前により興國年間足利直義夢窓國師に命じて每國に安國尼寺と共に創建せしむ而して之に佛舍利を頒ち安國利生塔を興せしを以て此の名あり

草津町

東海、中仙兩道の分岐点にあり往古は種津と稱せしが東海道の驛次となりて草津と改む戶數壹千餘、人口五千五百餘ありて郡中第一の名邑なり

常善寺

草津町にあり當寺は天平七年僧良辨の開基なり寶龜八年冬天下大に旱害あり光仁天皇之を憂へ住僧に勅して降雨を祈禱せしめ玉へは明年大に雨ふれり帝大に悅び詔して宣はく自今陛下寶祚の延長を祈る可しと乃ち堂宇を造營して常善寺の號を賜ふ長享元年足利義尙佐々木高賴を追擊して鈎に來り陣中病に罹るや住僧尊美をして延命法を修せしむ故に義尙薨後遺言により陣屋を當寺に寄附せしむ又慶長五年九月德川家康、關原を凱旋し上洛の途次當寺に陣す時に一將石田三成を生擒して來る家康大に喜び乃ち住僧一秀を召して寺領五十石を賜はる尋で秀忠西上の途亦當寺に陣し黃金一斤を賜ふ庭前に松あり之れ石田三成を繫ぎたる所なりと

姥餅

草津町大字大路井にあり昔は矢倉村矢走街道左右の角に一戶づゝありて各本家を爭ひしとか傳へ云ふ昔し德川家康大阪を凱旋し東下の途次此地に休息す、時に乙か姥と云へるもの餅を盛りて献上し來る家康之を賞味し又部下にも頒てり之より漸次有名となり往來の旅人爭ひ求めて賞味しけると云ふ

玉川舊跡

老上村大字野路にあり往時は日本六玉川の一に數へられ萩の名所として多く和歌に詠せられ甚た有名なる所ありしもいつしか埋沒して今僅に其舊跡を存するのみ

あすもこん野路の玉川萩こゑて　　俊頼
色なる浪に月宿りけり
鶉なく野路の玉川けふみれば　　家隆
萩こす浪に秋風ぞふく

野路

一に野路の篠原と稱し草津與驛以前に於ては此地の東方追分村を以て東海、中仙兩道の分岐点としたるより當地は頗る繁盛なる宿驛なりしも其後地理の變遷により廢驛となりしより漸次衰微を來たし今は甘藷の產地として僅に舊名を維持するのみ

近江路や野路のしのはら夕行けば　　慈鎭
志賀よりかへるさゝなみの風
旅人や朝たちくらん菅笠の　　蘆庵
見えかくれする野路の篠原

矢橋

老上村の一大字にして湖畔に位す愛より大津市松本に舟渡しあり（此間湖上五十町）又草津町へ通ずる往還即ち矢橋街道ありて往古は航湖の旅人皆道を茲にとり頗る繁盛なる要港なりしも近世隣村山田浦に航路を開通せしより此地は大に衰微すされど八景の勝地として古來有名なる地なり

浪風もしづけきけふは湖の　　家光
矢ばせの舟のふな渡りして
鳴てるや矢走の渡しする舟を　　兼昌
いくたびぞ見つ勢多の橋守

建部神社

栗太郡瀨田村大字神領にあり景行天皇四十六年四月建部稻依別王神勅を受けて祠を神崎郡建部鄕に建てゝ御父日本武尊の靈を祭り建部大神宮と稱す（建部とは尊の功蹟により景行天皇の定め玉ひし名）後天武天皇白鳳四年四月建部公安麿再び神勅によりて栗太郡勢田鄕大野山嶺に遷し勢田宮と稱し天平勝寶七年三月其山麓に遷座す今の社地即ち是なり時に天皇詔して近江國一の宮となし玉ふ以來歷朝の崇信深く貞觀二年三月官社に列せられ延久四年六月正一位勳一等を授け神領一町五反を付し給ふ平治の亂源頼朝伊豆に左遷せらるゝ途次從臣縁縁源吾盛安と共に當社に褰し社殿に通夜して行路の安全を祈願したり是に因て後年頼朝征夷大將軍となり建久元年十一月上洛する時勢多鄕三百戶を神領となす承久三年北條義時大軍を率ゐて京師を犯すとき茲に陣して火を各所に放てり是に於て宮殿寶庫其類燒に罹り神寶神記忽ち烏有に歸したり貞應二年大將軍藤原頼經本社末社等を造營し銘刀及神馬を奉獻せらる應永六年八月勢多判官章頼社殿を再建し十四年四月將軍

足利義滿社領三百戸を付せらる其後應仁の亂に細川、山名の兵火に罹りて本社再ひ燒失せり後十四年を經て文明十二年後土御門天皇勢多肥後守家昌に勅して社殿を造立せしめ玉ふ以來群雄四方に割據し神地社領を掠奪せるより當社亦漸次衰微しつゝありしが慶長以後膳所藩主社領若干づゝ寄附せられしより僅に四時の祭祀を行ふことを得たりと明治十八年四月官幣中社に列せられ三十二年七月官幣大社に昇格せらる實に近江第二の大社たり

● 國府舊址

國府とは孝德天皇に朝每國に設置せられし地方行政官廳の所在地にして其官衙を國衙と稱し又長官を國司と云ふ然るに後年源平二氏起り武士蹶起してより國司の政令行はれゝ漸次有名無實となり遂に廢滅するに至れり而して其所在地は舊記によりて瀨田村なること明かなりと雖も其舊跡は未た詳らゝ一說に國衙を大衙屋と唱ふることあれば今の瀨田村大字南大萱は或は其舊趾ならんかと云ふ

● 勢多城址

瀨田村大字橋本にあり之れ山岡景隆の居城趾なり景隆は織田信長の家臣にして祿一万石を食みて勢多城主たり天正十年明智光秀信長を京師に弑し尙安土城を奪はんと欲し從弟光春をして東下せしむるや景隆弟景祐と共に勢多橋を燒きて之を遮るされゝ景隆等微勢にして大軍を沮止し難きを知り遂に城を出でゝ田上山中に入る時に德川家康泉州堺にあり光秀の反逆を聞きて間道より三河に還へらんと欲し宇治川を越えて伊賀伊勢に赴むかんとし此地に來る景隆兄弟乃ち之を嚮導して信樂に到る時に土民峰起して道を遮る景隆等之を討ち滅し遂に家康をして無事ならしめたりと云ふ

● 勢多川

琵琶湖の末流にして滋賀、栗太郡界を流るゝ事三里二十七町山城國に入りて宇治川と名づく川は甚大ならざれゝも水勢急迅群山の間を流れ而して下流に至るに從かい漸次狹隘となり奇岩怪石兩岸を擁して奇勝言ふ可からざる所あり即ち米浙、鹿飛等なり（米浙とは水勢河中の岩石に激して其聲米をかすに似たるを以て名づく又鹿飛とは兩岸狹りて其間七八間鹿一跳すれば容易に飛超すを得べし之を勢多川中に於て最も狹き所とす）近時宇治通船株式會社を設けて石山村大字南郷より山城宇治町に往復しつゝあり

勢多川の史上に顯はれし事古來甚多し今其著名なる者を舉ゝれば仲哀天皇の代皇子忍熊王の武内宿稱と逢坂山に戰ひ敗軍して茲に來り入水し玉ひし事あり壽永二年源範頼の木曾義仲を攻むるとき稻毛重成、榛谷重朝等先登となり供御の瀨（栗太郡下田上村大字黑津より南郷に渡る所を云ふ往古茲に網代を設けて水魚を捕へ之を朝庭に献進したるを以て此名あり）を渡り石山に攻め登りし事源平盛衰記に見ゆ其他承久三年北條義時の京師を攻むる時又天正元年織田信長の足利義昭を石山城に攻むる時何れも供御の瀨を渡りしこと史上に見ゆ其他沿岸各地は往古幾多の戰場となり曩に當川淩渫の際にも河底より古兜廢刀等を出せしことあり

● 瀨田橋

栗太郡瀨田村大字橋本より滋賀郡石山村大字鳥居川に架す大小二橋ありて中央を中島と云ふ橋上の眺望絕佳にして所謂瀨田夕照と稱して八景の一たり

當橋は東方より京師に入る唯一要衝に當るを以て古來京師に戰亂ある每に攻守茲に挑み爲めに燒落せられしこと甚多し其最なる者を壬申亂、木曾義仲叛、承久亂、惠美押勝亂、明智光秀の亂等とす而して當橋上古はお〳〵して唯竹木を編みて筏とおし之を渡せるを以て之を搦み橋と稱し、を後轉化してから橋と稱するに至れりと或は云ふから橋と云は昔し雲照律師と云へる僧の唐製に摸倣して造らしめたるに因ると此說信に近きが如し

槇の板も苔むすばかりありにけり　匡房
幾世へぬらん勢多の長橋
貢物つねに備ふる東路の　兼盛
勢多の長はし音もとゞろに

輕興風雨玉函關。短棹波濤荒中灣。屈指歸途已過午。　菅茶山

瀨田橋上看湖山。

● 藤原秀郷の故事

承平の頃藤原秀郷と云へる人田原郷（大石村邊）にありしが一日勢多の橋を過ぎしに橋上に大蛇の横はれるありされゝ秀郷毫も驚かゝ平然として之を跨げて過ぎ行くこと幾許ならゝして一人の男忽然として顯はれ秀郷に謂て曰く我れこの橋下に捿むこと二千餘年貴賤往來の人を量り見るに未た君の如き膽勇ある人を見ゝ我に一の勁敵あり動もすれば彼の爲めに腦まされんとす君願はくは之を討滅し給はゝやと秀郷之を承諾す彼の男大に喜び乃ち秀郷を嚮導して勢多橋下より湖水を分けて入ること五十餘町にして一の樓門に達しぬ仰き見れば金殿玉樓夢を並べ美麗宏壯未た嘗て見ざる所あるより秀郷忙然たる時彼の男秀郷を内に導き之を客位に請じ美酒佳肴を並べて盛宴を張る既にして夜半に至る寅天地俄に鳴動し風雨沛然として至る衆皆曰く敵來れりと秀郷窓より之を見れば遙か比良山方より炬火數千二行に並びて此方を指して來れるあり秀郷思へらく之れ百足の化現ならんと乃ち携へ來れる弓矢を取出し狙を定めて之を射るに平然たり再び射るも尙自若たり因て三度射んとする時矢先に唾液を塗りて之を射ければ數千の炬火一時に消え一物の倒るゝ音大地に響けり近き之を見れば果して一疋の大百足ありき龍神喜ぶこと限りなく厚く秀郷を饗應し還るに及びて十種の寶を送る秀郷其内梵鐘を三井寺に寄附せり今あるもの乃ち是なりと世に田原藤太が勢多橋より三上山の百足を退治せるの傳說あるは即ち之なり

野洲郡

東は滋賀郡南は甲賀及栗太郡に境し西北は湖に濱す東西三里七町南北二里二十六町面積六方里二〇にして郡内を分ちて一町十二ヶ村七十九大字とし戸數七千八百二、人口四万三千九十あり

● 守山町

往古は森山と稱する一小岳ありしが延曆年間傳教大師東門院を開基する時七八の家臣を伴ひ來り此處に茶店を開かしめ往

來の人に助力を乞ひ以て寺の修補に充てしむ故に此地を稱して七家在家と云ふ是より漸次人家增殖し今は郡内第一の都會として人家櫛比商業繁盛なる所となれり

白露も時雨もいたく森山は　下葉のこらぜ色づきにけり　貫之

時雨のみ森山かけの下葉かは　もの思ふ袖も色はのこらぜ　順德院

東門院

守山町にあり延暦四年傳敎大師比叡山に延暦寺を開基し其四境に門を建つ當院は即ち其東門たり後桓武天皇當院に行幸あり我山（比叡山）を守護するの意を取りて守山寺東門院と號し玉ふ延暦十四年田村麻呂東夷征討に赴むく途次當院に詣して冥助を祈り後凱旋歸洛の時伽藍を建立し千手觀音を安置す又往時門前に青柳の瀧ありて源頼朝馬に飲ふ舊蹟ありしも今はなし

醴泉池址

守山町大光寺の南にあり持統天皇七年十一月益須郡都賀山に醴泉涌出し諸病人益須寺に宿して療養する者多かりし由日本書記に見えたり是を以て見れば甘味を帶べる温泉ありしならんか因に都賀山と云へるは今の野洲村大字市三宅の東部より守山邊まで蜿々たる丘陵なりしなり

聖德太子舊蹟

守山町大字岡と云へるは上古聖德太子と物部守屋との交戰地にして敏達天皇二十一年太子再びこゝに來り疊日歿者の爲に岩窟に入りて一石に一字の經文を書寫し之を埋みて岡塚と稱し又一寺を建立して西隆寺と稱せらる而して其寫經の水を汲み給ひし所を硯の池と云ひ今尙寺西に舊跡あり

源内眞弘墓

守山町慈眼寺にあり平治の亂源頼朝京師に敗軍し義朝と共に東走する途次森山宿に於て源内眞弘を斬りて安の川原に去れること平治物語に詳記しあり墓は即ち土人の其屍を埋葬したる所あり

守山仇討

往古信州松本に望月甚兵衛秋長と云へる者あり或時同僚松田庄司友治と云へる者と爭論あし遂に之を討果しゝより友治の妻は尙秋長の已を讐せん事を恐れ一子花若の手を携へ故郷と出奔し江州森山宿に已が舊臣小澤友治の旅店甲屋と云へるを開業しつゝあると聞き此處に來りて寄食することゝせり茲に望月秋長は友治を斬殺せる罪により京師に流罪とありしが居ること十餘年にして漸く赦免せられしかば大に喜び之より故郷信州に歸らばやと單身京師を出發し其日は森山宿迄來りて旅店甲屋に投じぬ嗚呼天ある哉この甲屋は前記の如く安田の舊臣にしてさあきだに安田妻子の寄留しつゝありしあれば今宵秋長の投宿せると聞き大に驚喜し其夜安田の妻は自ら酌女に扮して我子花若に伴はれて秋長の座敷に來り連々に酒を侑め又歌を謠ひつゝ興を添へければ秋長は覺へず酒量を過して身体泥の如くなりぬ自分はよしと安田の妻はハッと眼を見開ちき這は珍らしや望月秋長爰は汝の爲めに信州に於て斬殺せられたる安田友治の妻子なるぞと名乘かけ隱し持つたる白刃

を閃めかし花若諸共切てかゝれり秋長聞くより大に驚き之を避けんと欲するも泥酔して身体意の如くあらぜ遂に安田妻子の爲に討果されけると云ふ

右は謠曲「望月」より出てたる說にして信ずべからぜとする者あり編者も二三書中に之を散見したりしも何れも其主要なる年月の記載あるを以て見れば或は假作なるやも知る可らぜ

立入

野洲川の西岸にあり往古は村名なく唯白菊の里と稱する名所なりしが仁安年中後白河法皇此處に立入らせ給ひてより立入と名づくと今同村に東福寺と云へるあり是れ法皇行宮の舊跡にして又白菊を叡覽ありし所なりと云ふ

うつろはで立入の村の白菊は　さていく秋の露霜かへん　俊光

足利義昭舊跡

玉津村大字矢島にあり義昭は足利十五代の將軍なり初め僧となり南都一乘院に入りて覺慶と稱せしが永錄八年三好、松永の賊徒將軍義輝を弑し尙覺慶を捕へんとしたるより細川藤孝と共に夜春日山を踰えて甲賀郡和田に來り暫らく其處に滯在し後茲に移り還俗して義秋と名のる（後又昭に字に改む）八月十五日若狹に到らんとし栗田郡山田浦より乘船す時に藤孝一首の和歌を詠めり

よるべなき身とはりぬれば鹽なれぬ　海の面にもうきめ見るかな

義昭亦詩あり

落魄江湖暗結愁。孤舟一夜思悠々。天公亦憐吾生否。月白蘆花淺水秋。

既にして若狹に到り後越前に赴むき又美濃に入り織田信長に依りて京師の賊を討滅し遂に征夷大將軍を拜命せり

田中奇蓮

河西村大字田中にあり白雉四年定惠上人支那に渡り歸朝の時此種子を齎らし之を田中に下せるものにして昔し南天竺達磨大師の梁武帝に献上せしものありと云ふ此蓮なる一莖に二花乃至十二花を着け其花凋委するも花瓣尊に結着して散落することなく又根實蓮糸あることなし又一奇蓮と云ふべし

一莖に花かぜさきて福田の　根ざしもしるき池のはちすば　澄覺

咲く花も法のえにしに近江じや　田中の村の池のはちすば　尙資

兵主神社

兵主村大字五條に鎭座す祭神大巳貴尊にして養老二年の創立延喜式内の一社たり平治元年源義朝、頼朝等京師に敗軍し東奔する途次篠原村不歸池（一名蛙不鳴池）邊に到る時乘馬進ぜ土人曰く此池中には毎日三度づゝ兵主大神の影向あり今は眞時あらんと頼朝乃ち馬より下り西方遙に兵主神社を拜禮し武運長久を祈りけり是を以て後年頼朝天下を一統するに及で兵主惣神殿及末社等に至るまで悉く造營し神領三千餘貫を奉る今の兵主郷即ち是なり又文永年中社殿兵燹に罹りて燒失せるより先例により足利尊氏之を再建す其後織田信長六角氏退治の時盡く神田を沒收してより社運大に衰微し又舊觀を呈せ

ざるに至れり

錦織寺

中里村大字木部に在り眞宗木邊派本山なり當寺は天安二年慈覺大師の創立にして大師自作の毘沙門天を安置し天安堂と稱せしが嘉禎元年親鸞上人常陸國霞ケ浦にて得たる一尺八寸の阿彌陀佛像を負ふて歸京の途次美濃國今須の宿に於て夢に毘沙門天の招請に遇ひ木部を尋ぬて來る時に天安堂の前に一株の松あり上人之に笈をかけ其下に露宿せるに其夜夢に毘沙門天再び現はれ上人に告げて曰く此地に佛像を安置せば我よく之を守護すべしと又此地の長に石畠民部大輔と云へる人あり其夜靈夢に感じ天安堂に來り上人を見て瑞夢の客僧是ならんと强て上人を留めけるより上人遂に佛像を茲に安置して念佛道場とせしたり其后曆仁元年七月六日夜天女二人來り紫香錦を織り（横三尺縱一丈五尺）之を佛前に供ふ住僧之を寄瑞とし乃ち四條天皇に奉進しければ帝叡感の餘り同年八月五日權中納言藤原頼資を勅使として天神護法錦織之寺と八字の勅額を賜ひ勅願所とおし玉ふ是より錦織寺と號す然るに元錄七年五月五日夜火災起り堂宇烏有に歸したるより同十四年將軍家の寄附により再び本堂を建立せり

長澤池

中里村大字比江長澤神社の傍にあり古來菖蒲を以て有名なる池なり文治三年五月源頼朝鎌倉より上洛する時茲に立より菖蒲を賞觀し且つ之が伐採を禁制したり

長澤の池のあやめを尋ねてぞ
千代のためしに引くべかりける　　俊成

君か代の長きためしに長澤の
池のあやめは今日ぞひかるゝ　　俊光

平宗盛墓

篠原村大字大篠原にあり宗盛は清盛の子なり壽永三年源義經を長州壇之浦に戰ひ軍敗るゝに及で子清宗と共に源軍に生擒せられ鎌倉へ護送せられしも頼朝之を刑するに忍びずとて再び京師に送還せしむる途次橋右馬允公長命に依て此處に於て斬首す時に元曆二年六月二十一日宗盛年三十九清宗十七なり同所に蛙不鳴池と云へるあり是宗盛父子斬首前首を洗ふ所なりと云ふ

妓王川

源を野洲川に發し三上、野洲村を經て祇王村大字富波に來り茲にて二分し一は永原、中北、北に入り一は童子川となりて湖に入る

往時近衛天皇の代江部莊（永原、中北、北を云ふ）司橘時長の女に妓王と云へる者あり此地の水利に乏しく村民旱天に困難するを憫れみ如何にもして之を救助して五穀豊穰の基を開かんものと仁安三年年十六才の時京師に上りて平相國清盛に仕ふ清盛其容色を愛して寵遇甚優れり一日清盛妓王に向ひて其望む所を問ふ妓王乃ち故郷江莊地の田養水乏しくして百姓困難せるより爰地に水路を通ぜられんことを乞ふ清盛之を諾しのち妹尾兼康を奉行に命ず兼康此地に來り水路を開鑿せんとするに那邊より着手して佳なるや之を知るべきなし時に奇童一人忽然として顯はれ奉行に謂て曰く汝等水路の便宜を知ること難し我れ之を教えん我引く繩に從つて水路を通すべし

と暫時に野洲川より野田浦に至る迄繩しるしを付け其儘影を沒せり奉行里人大に驚き且つ敬ひ乃ち之を開鑿するに承安三年三月十五日一日一夜に成就せり故に上流を妓王川と云ひ下流を童子川と稱するなりと

妓王は本來の大願成就しければ乃ち暇を清盛に乞ふも許されず後加賀國より佛と云へる女來りて寵を專らにするや妓王悲に不堪承安三年八月十三日の夜自から黑髮を切り之に

もえ出るも枯るゝも同じ野邊の草
いづれか秋に遇はでは つべき

との一首の和歌を結びつけ夜密に殿中を出でゝ嵯峨往生院に入り遂に建久元年七月十五日逝く年三十八

野洲川

甲賀郡より來る即ち横田川の下流にして川田にて二分し一は吉川一は今濱、木濱間より湖に入る湖東有數の大川にして壬申の亂及元龜元年織田信長と六角承禎との古戰場なり

旅人もみなもろともに朝たちて　　阿佛尼
駒うち渡す野洲の川霧

早苗とる野洲の渡りのかたわらし　　慈園
こぞのかりたは淋しかりけり

朝鮮人街道

野洲村大字行畑より中仙道と分岐し坂田郡鳥居本に至りて中仙道と合す昔し織田信長安土城に在る時朝鮮人の來聘したる道なり

圓光院

野洲村大字久野部にあり延曆九年傳教大師の開基にして後深草天皇の勅願所として昔時は著名なる一大寺なりしも元龜の亂兵火に罹りてより大に衰頽し今僅に一小堂を存するのみ、昔し當村に久野七郎と云ふ人あり或時畠に豆を植え置きしに時經て一種異樣の豆木生じたり七郎不思議に思ひ之れ善兆に非らざれば惡事來るなからんと夫より毎日當寺の觀世音に參詣し何卒災轉じて善事ならしめ給へと一心不亂に祈念しければ不思議なる哉彼の豆の木驚くべき巨木となり收時に至り豆實三石六斗を得たり七郎喜ぶこと限りなく是れ全く觀世音の妙智力なりとて其豆木を以て太鼓を製し是を當寺に奉納せり此の太鼓廻り一丈長三尺二寸今尚本堂に揚げあり

三上山

郡の南方に聳立す其形富士に似たるを以て近江富士とも稱し又藤原秀郷百足を射殺せる俗說により百足山とも云ふ直立一千二百尺餘郡中第一の高山なり山腹に妙見宮あり茲に登臨すれば風光頗る宜し又山中多く松茸を產し三上松茸の名夙に著る

千早ふる三上の山の榊葉は　　能宜
さかへぞまさる末の代までも

三上山岩根に生ふる榊葉の　　匡房
葉かへもせずと萬代やへん

御上神社

三上村大字三上に鎮座す孝靈天皇六年天御影神三上山上に降臨あり乃ち祠を山上に建てゝ之を祭りたりしが養老元年今の地に遷座したり而して當社延喜式内の舊社にして又圓融天皇の勅願所なり壽永三年木曾義仲西上する時神馬を奉獻し建久

元年源頼朝神領三千貫を奉り建武二年足利尊氏神田百町を付したりと云ふ文明八年兵燹に罹り本社樓門を除くの外悉く烏有に歸したりしが天文年間六角氏之を再建して舊觀に復さしめたり

● 三上陣屋舊跡

三上村大字三上にあり元錄十一年美濃八幡城主遠藤常久の嗣子胤親始て三上に封せられ祿一万二千石を食む以來子孫世襲し八世胤城に至りて藩籍を奉還せり

● 三上騒動

天保十三年十月幕吏市野茂三郎と云へる者野洲郡に來りて開墾田を檢査せるに丈量頗る嚴刻なりしより三上村庄屋土川平兵衛大に憤慨し甲賀郡宇田村庄屋宗兵衛等と相謀り願書を提出して哀訴する所あらんとし同志一万餘人と共に市野が宿所三上村に迫らんとす遠藤侯の家老某之を聞き大に驚き出でゝ之を制止すれども肯かゞ既にして同志等遂に市野の宿所に到れり然るに白昼尚門を閉せり同志乃ち之を破壞して入り帳簿器物等を破毀して出づ之より先き市野は同志等の來襲すると聞き逃れて三上山中にありしが是に於て虎口を脱して京師に歸へれり後幕吏來り暴徒の首魁と覺しき者一百餘人を捕へ之を大津に送りて糺彈す拷問頗る嚴酷にして死する者甚多し而して平兵衛、宗兵衛等服罪せざる者は之を江戸に送致せしが未決の間天保十五年遂に獄中に歿せり是に於て官其公儀を憚らざるを罪し死屍を大塚原に梟す然るに明治二年大赦の令下りしを以て野洲、甲賀の有志者相謀り碑を兩郡内に建立し題して天保義民と稱し永く其靈魂を慰む

● 甲賀郡

東は伊勢國南は伊賀山城二國に境し西は栗太北は野洲浦生二郡に接す東西十里十二町、南北七里十町、面積三十四方里八五、而して一町二十四ヶ村百二十一大字ありて戸數一萬三千五百三十九、人口七萬六千二十四あり

● 石部町

古くは平野村と稱す後石部と改め東海道の宿驛となる今は郡中第二の都會として戸數六百餘人口三千餘を有し商業稍々繁盛なる地あり

● 長壽寺

石部町大字東寺にあり俗に東寺とも云ふ天平年間良辨僧都の開基にして行基自作の地藏尊像を安置し聖武天皇勅願所となり紫香樂宮都の時其鬼門の守護所たりき而して上古は七堂伽藍の巨刹なりしも元龜年間兵火に罹りて燒失し今僅に數堂を餘すのみ而して是等諸堂は何れも畫棟彫梁頗る美麗を盡す又毎年正月十五日土人赤黑二鬼の假面を被り踊舞しつゝ堂の前后を相驅逐す之を鬼走と云ふ蓋し追儺の遺事なるべし又寺寶數点あり中に阿彌陀佛像一躰あり這は染殿皇后の亡母追福の爲に當寺に寄附し玉ひしものなりと

● 常樂寺

俗に西寺と云ふ石部町大字西寺にあり元明天皇の代僧良辨の開基にして觀世音を本尊とす當寺も亦東寺と並びて有名なる巨刹なりしも今は衰頽して僅に舊時の面影を存するのみ又鬼

面を藏し鬼走りの式を行ふこと東寺と同じ境内に三重塔あり今特別保護建造物たり又往古山門ありしも慶長年中之を大津三井寺に移す今の仁王門即ち之なり

● 藤原藤房舊蹟

三雲村大字妙感寺にあり藤房は權大納言宣房の子にして後醍醐天皇に奉仕し左大辨より累進して左兵衛督兼檢非違使別當となる或時鹽谷高貞と云へる人千里の馬を奉進せんとしければ帝之を納れ奇瑞となし喜ばせ玉ふ事限りなし然るに藤房之を不祥となし諫止し奉る帝聽かせ玉はゞされど藤房尚諫奏屢々なりしも帝遂に御許容あかりけり是に於て藤房以爲らく臣たるの道我に於て既に盡せり今は屑よく桂冠せんにしかゞと建武元年三月某夜窃に宮闕を逃れて北岩倉に到り不二坊法一に就て落飾し名を寂照と號す此事叡聞に達しければ帝大に驚かせ玉ひ急に父宣房に勅して之を索めしめ玉ふ宣房乃ち車を飛して北岩倉に到れば藤房既に去て影なく唯一首の和歌の破障に殘せるのみ

住みすつる山を浮世の人とはゞ
　嵐や庭の松にこたへん

宣房之を見るや潸然落涙して泣く〳〵「京へ還へられける」爰に藤房は北岩倉を出てゝ丹州吉峰に隱れ後大和國吉野に赴むかれしも爰も俗人往來して出家遁世に妨ありとて又其處を出る時

こゝもまた浮世の人の問ひくれば
　遠山ふかく宿もとめてん

との一首を殘し遂に近江は甲賀郡三雲の鄕に入り妙感寺を中興して茲に居住せらる時に年四十二地は山間溪谷なれは其幽靜閑雅意に叶ひけん一首の述懷あり

世のうさをよそに三雲のくも深く
　てる月影や山をみの友

此歌意に因て寺號を雲照山と號す然るに此事京師に聞えければ宮中より井上主計と云へる者を遣はして寂照の侍臣となし給ふかくて寂照茲に幽棲する事四十餘年許り遂に康暦二年三月二十八日を以て薨去せられぬ享年八十五明治九年九月　聖駕東幸の日石山右兵衛督を勅使として金若干を下賜し給へり今妙感寺村に井上姓を名のる者あるは之れ皆侍臣井上主計の後裔なりとかや又以上掲記せし三首の和歌は藤房三所の和歌と稱し障子にかきたる眞筆ありて當寺第一の什物たりしもいつしか亡失して今に存する者は唯寂照生前の愛杖及び拂子のみあり

● 善水寺

岩根村大字岩根にあり元明天皇和銅年間の草創にて初め和銅寺と名づけ國家鎮護の道場なりしが傳敎大師當寺に在る時桓武天皇不豫あり大師乃ち醫王善逝の法を修し當時の清水を献じ奉りしに御病忽ち平癒あり帝大に喜ばせ玉ひ勅して善水寺と號し玉ふ後大師比叡山に延暦寺を草創する時當寺を以て最初の別院となし爾來歷代の勅願所となり又源頼朝以來代々將軍家の祈願所となりて有名なる巨刹なりしも元龜の亂織田氏の兵燹に罹り山上の諸坊は悉皆燒失されしも本堂其他二三堂宇は山間にありしを以て幸ひ無事なることを得たり寺寶亦多く中、國寶となりしもの數点あり

水口町

郡中第一の都會にして又諸官衙の所在地あり戸數一千數百、人口八千餘を有し商業殷盛あり此地往古は美濃部村と稱せしが東海道の驛次となりて水口と改稱す加藤氏二萬五千石の舊城市あり

水口城址

寛永十年小堀遠江守德川氏の命を受け築城する所にして天和二年加藤内藏助朋友始めて城主となり祿二萬五千石を食む元錄八年加藤氏下野國壬生に移封せられ鳥居忠救城主となる正德二年加藤氏亦當城に復封し爾來世襲して王政維新に至る因に加藤氏は三河の人にして彼の賤嶽七本鎗を以て有名なる左馬介嘉明は實に藩祖朋友の祖父なり

又其東岡山に古城址あり天正十三年中村一氏之を築き十八年堀田長盛封せらる文錄四年長東政家城主となり慶長五年關が原役池田輝政に包圍せられ政家支えき滿生郡櫻谷に逃れ遂に廢城となる

土山

往古は推山とも書き東海道の驛次にして又製茶の產地として有名なり明治元年九月二十二日　聖駕東幸の日行在所を此地に命せられ驛の本陣土山某邸を以て之に充てさせらる而して此日恰も　聖誕の佳辰に當りしかば奉祝の大典を擧行し玉ひ沿道の孝子節婦等に賞典ありしと之れを天長節の起源とす

御代參街道

土山驛に於て東海道と分岐し滿生郡を過き神崎郡に入り北五個莊村大字小幡に至る昔し奉幣使を伊勢大神宮に差遣せらるゝ時多賀神社に代參を立てられし道あり故に名づく

田村神社

土山村大字土山にあり垂仁天皇四十五年甲可の翁と云へる人あり倭姫命を崇敬し今の宮地に神離を建て其生靈を祭り名づけて鈴鹿社と云ふ弘仁元年藤原仲成亂を起して鈴鹿に據るや田村麻呂勅を受けて之を討滅す（世に鈴鹿の鬼神と云は之れなり）時に疫癘天下に流行し殊に鈴鹿以西の諸國に多く万民死する者甚多し是れ或は賊徒仲成の執心ならんとて是に於て祠を二子山上に建て田村麻呂の神靈を祭り除厄の神事を行ひしかば疫癘忽ち屏息し万民始めて安堵の思あり其後神異屢々ありしを以て弘仁十三年今の地に遷宮し鈴鹿社と合祀し神號を正一位高座大明神と稱し嵯峨天皇勅願所となる以後毎年舊曆正月十八日を以て除厄の神祭を行ふ此日は男女厄年に當るもの遠近より賽して境内頗る繁盛あり又古來伊勢參宮して此地を通過する者必らず當社に詣して除災を祈るを例とす

蟹坂

土山の東にあり登路五町餘傳へ云ふ昔の此地に大なる蟹あり往來の旅人を惱ます一僧あり偈を示して成佛せしむと路傍に蟹が墓と稱する者あり又此地の人地黃煎を平圓なる形に作り之を竹の皮に附着せしものを賣る世に蟹か坂「じようせん」と稱し往來の旅人之を求めて土產となす又此地の一名物なり

源爲朝舊跡

油日村大字和田の山中風呂屋ヶ谷と稱する所是あり保元々年源爲朝崇德上皇に從ひ兄義朝等と京師に戰ひ遂に敗軍しけるより山谷を跋涉して此地に來り湯屋を設けて窃に負傷を治療しつゝありしを平氏の士佐渡兵衛重貞の發見する所となり數護十騎を率ゐて來り圍む時に爲朝沐浴中なりしかば裸体を以て防戰に勉めたりと雖も衆寡敵せず遂に捕縛せられて京師に送せられ後伊豆大島に流罪せられたり

鹽野及宮野温泉

關西鐵道深川驛を距る南數町南柚村大字鹽野及杉谷にありて岩石の間より湧出する冷鑛泉あり近時旅館を建て浴場を設けて來客に便せり

信樂

上古は紫香樂に作り後信樂莊と云ふ即ち雲井、長野、小原、朝宮、多羅尾の諸村あり而して是等諸村の周圍は皆高山峻嶺にして南は伊賀、山城に境し西は栗太郡に隣り東北は三雲、北柚村に接し殆ど別天地の觀あり而して此地古來陶器及び製茶を產出す世に信樂燒又は信樂茶として有名なり

里人は衣うつあり信樂の　　頓阿
外山の秋や夜さむあるらん
信樂の外山の奥に聲すあり　　家隆
埋もれかゝる槇の雪をれ

紫香樂宮址

甲賀郡雲井村大字黃瀨に内裏野と稱し稚松叢生せる方數町の廣丘あり之れ即ち聖武天皇紫香樂宮址にして又奈良大佛鑄造の舊跡あり天皇天平十五年七月恭仁宮（山城國相樂郡にあり）より此地に行幸し山地を削りて堂宇を搆へ十月十五日を以て廬舍那佛像を創造し玉ふ是に於て行基法師弟子を率ゐて普く衆庶を勸進し東海、東山、北陸三道の調庸亦紫香樂宮に貢せしむ然るに十六年四月以來地震山火等の災害に罹りて佛像は爛壞し改鑄すること數回同年十一月甲賀寺落成し佛像亦鑄造せらる是に於て天皇親臨し手づから其綱繩を引きて之を奈良に遷し玉へり

甲賀寺即ち紫香樂宮は佛像移轉后宮中人無く盜賊横行し地震山火亦屢々起りしを以て遂に頹破朽腐して後世に傳はらざるに至れりされど今尙内裏野には往古の大石礎存し茲を發掘するもの往々布目瓦の破片を發見することありと云ふ

因に記す大佛鑄造に要したる原料は熟銅七十三万九千五百六十斤、白錫一万二千六百三十八斤、練金一万四百三十六両、銅五万八千六百二十両にして又像長五丈三尺五寸、面長一丈六尺、廣九尺五寸、目長三尺九寸、口長三尺七寸、耳長八尺五寸ありと但本像は治承以後屢々兵火に罹りしより銅体の大部及臺座蓮片中の十數枚を除くの外は皆其后の改鑄にかゝる者ありと本像は今國寶なり

保良宮址

雲井村大字勅旨にあり天平寶字五年淳仁天皇都を奈良より此地に遷して保良宮と稱せらる時に太皇（孝謙女帝）僧道鏡及惠美押勝等を寵幸し玉ふより天皇之を諫言し玉ふ太皇悅はゝ之より太皇、新帝の間不和を生ずるに至る後年惠美押勝叛逆を謀るや天皇も亦其事に關與し玉へるとなし遂に位を下して之を淡路に配流し玉ふ天皇愛に在はする時椿の葉に和歌を書して之を信樂川に流し玉ふと其御製に曰く

信樂や外山の奥にすまいして
我れこのほらに在りとしるべし

蒲生郡

東は伊勢國に接し南は甲賀郡北は神崎郡に境し西北は湖に臨む東西九里十六町南北三里二十町面積二十四方里一六あり又郡を分ちて二町二十四ヶ村二百七十二大字とし戸數一萬八千三百八十九、人口八萬八千百二ありて戸口數の多きは國中第一位とす

八幡町

郡の西方に偏位し縣下屈指の都會にして町數六十六、戸數一千五百、人口七千餘を有し街衢整然商業繁盛あり當町古くは馬場村と稱せしが天正十三年豊臣秀次安土城を八幡山上に移築する時其城下を茲に移したる者にして其八幡と名づけしは八幡神社ありしに因る

八幡神社

鄉社八幡神社は八幡山麓にあり元正天皇の代聯原不比の創立にして祭神譽田別尊、比賣神三柱、息長足姫尊とす而してもと山上に鎮座し日祥社と稱せしが後更に山下に一社を建て、之を下社とあす佐々木氏當國の守護とあるや其家祖敦實親王の靈を本社に配祀し崇敬殊に深かゝりしと云ふ文治三年源頼朝佐々木氏に命じて拜殿を造立せしめ神田三十餘町を寄附せり然るに天正十八年豊臣秀次城を山上に築くに當り本社を他へ遷移すべき命あり依て上社を下社と合祀し八幡神社と改稱す慶長五年德川家康關ヶ原大捷後西上の途次當社に參拜して神領五十四石餘を寄附せり而して祭禮は毎年三月十五日に行ふ此日は町民各松明を昇ぎて市中を練り廻り後社前に到りて奉火す世に左義長祭と稱して有名あり

西村太郎右衛門の事

昔し八幡神社氏子に西村太郎右衛門と云へる人あり元和元年商業の爲め貨物を積載して九州へ赴むかんと欲し航海中颶風に遇ひ舟覆へらんとす西村等は運を天に任かせ一心に氏神八幡神社の冥助を祈りければ漸くにして風波治まり舟は一の港口に着きけり西村等は大に喜び直に上陸せんとしければ這はそも如何に此地は今や交戰の最中にして喊喊擊劍の音頻あるより西村等は大に畏怖し如何はせんと躊躇したるもかくてあるべきにあらざれば兼て海賊防禦の爲め船中に備へ置きたる甲冑武具を着用し遙かに故鄉八幡神社を禮拜して奮然甲軍に投じければ乙軍援軍來れりとや思ひけん忽ち潰亂敗走せり甲將甚く西村等の武勇に感じ之より大將軍と崇め遂に一城主とあしたり而して此時始めて此地の安南國あることを知れりかくて西村等はこゝにあること多年一度歸國せんと思ひしも當國の制度として一度外國人とある以上は再び歸國を許さるを以て止むを得ず額一面を作りて之を八幡神社に奉納せばやと他人に依托して之を長崎に送致せしに奉行之を撿し其額は奉行所に留置し其模寫したる額を本社に送納せりこの額國寶とありて今尚神庫中にあり

八幡山城址

天正十三年豊臣秀次、織田信長の安土廢城を愛に移して城居し近江中納言と稱す後秀吉に嗣ぎて關白職とあり京師に歸り遂に廢城す其舊跡今尚ほ山上にあり

西光寺

宇津呂村大字中にあり天正七年能登典光寺の僧貞安と云へる者安土城下に來り淨嚴院に於て日蓮法華兩宗徒と法論をあし之に勝利を得しより織田信長甚く貞安に歸依し遂に當寺を建立して貞安を開基とあさしむ十三年正親町天皇の勅願所とあり十四年安土城市を八幡山下に移さるゝ時當寺も亦茲に移されたり十八年後陽成天皇の勅願所とあり十九年大雲院の勅額を下賜し玉ふ之より龍龜山大雲院西光寺と稱す

岡山

岡山村大字牧の西方湖中にありて其狀恰も龜の浮ふが如し古來水莖の岡と稱し和歌の名所とあれるは之あり又山上に城趾あり永正五年將軍足利義澄京師の亂を避けて此地に來り舘を建てゝ幽棲し永正八年八月十四日薨ぜ年三十二法住院と號し大政太臣を贈る

鴈がねのさむくあさより水莖の　　人丸
岡のくすの葉色づきにけり
水莖の岡のあさぢのきりぎりす　　順德院
霜のふりはや夜寒あるらん

奥島

宇津呂村の西北にあり湖中第一の大島にして渡會橋によりて北之庄に連る島中を島村と云ひ數大字あり又長命寺山、施行山等連續聳立し其北端を伊崎と云ふこゝに不動堂あり毎年八月土人掉飛の術をあし參詣する者甚多し

傳へ云ふ昔し天武天皇當島に臨幸し給ふ時に土人郁子(むべ)三個を奉りしとあり以來例とあり毎年十一月之を禁中に奉獻すれば宮中より鳥目一貫文を賜はりたり其後亂世の爲め久しく中絶せしが文安二年に至り再ひ貢進の御沙汰あり其後德川氏に至り井伊氏より郁子田料として米一石五斗を賜はりしと云ふ

長命寺

長命寺山腹にあり伊崎耶山と號し西國三十三所の一あり昔し聖德太子此山に來給ひしに一株の古木より輝々として光明を放てり近つき見れば觀音菩薩の種子備はり其下に壽明長遠所願成就の文字あり太子見て大に喜び是れ佛法興隆大願成就の瑞祥ありとし乃ちこの靈木を以て觀音佛像を刻し一梵刹を建立して之を安置し長命寺と名づけ給ふ其后天智天皇志賀在都の砌り當寺に臨幸あり一枝の楊柳を手折りて本堂の傍にさゝせ給ひ若し宿願成就するならばこの柳枝に奇瑞を顯はし玉へと祈念を凝し玉へは一夜の中に魏々たる大木とあれり天皇深く感喜し之より勅願所とあし給ふ元暦元年源頼朝其臣佐々木秀義の冥福を祈らんが爲め其子定綱に命じて當寺を再興せしめ僧尊海を中興開山とあさしむ其后天正元年兵火に罹りて堂宇延燒せしも同十年之を再興す境内に天智天皇鞠場、織田信長獵場等の舊跡あり又山麓西端に松か崎あり湖上の眺望頗る宜しく古歌に詠せらるゝ名所あり

沖の島

奥の島の北方にあり東西三町南北十五町あゞて戸數數十戸全島皆漁業に從事す古歌に奥津島と詠めるは即ち之あり

ふる雪はそらとも見えぬさゝなみや　知家
よせてかへらぬ沖つ島山
與津島まもりの神やゐますらん　紫式部
浪もさわがぬわらはべのうら

淨嚴院

安土村大字慈恩寺にありもと威德院慈恩寺と號す聖德太子の開基にして本尊釋伽如來は天竺毘首羯摩の作あり文和年中佐々木、六角の二氏之を奉信して代々の香華院とす後年兵火に罹り一時衰頽せる時淨嚴房隆堯と云へる僧あり栗太郡金勝谷より此地に移住し當寺を中興し改て金勝山淨嚴院と號し從來天台宗ありしを此時淨土宗に改む後年後年織田信長安土に城居するや當寺を奉信し遂に伊賀、近江両國の大本山とあし末寺八百八ヶ寺を有せしむるに至る後德川氏の代に至り末寺四百餘寺とあり今は京都知恩院に屬す又今の本堂は天正三年宇津呂村大字北之庄興隆寺を移築せる者にして今特別保護建造物たり

文安三年正月三日佐々木滿綱兵を率ゐて觀音寺城を攻む（這は嘗て家臣の巳を放逐せしによる）軍敗れて當寺に入り從士百餘人と共に割腹して死す後年其紀念として血痕附着せる板を以て當寺書院の天井に造り血天井と稱して有名ありしが惜哉明治八年十二月祝融の災に罹りて烏有に歸したり

安土宗論

天正七年五月能登西光寺の住僧貞安と云へるもの安土城下に來り淨土宗旨を說法しける中に日蓮宗旨を誹謗せることありとし聽者日蓮宗徒鹽谷傳內（或大脇傳內とも云ふ）大に憤怒し乃ち之を頂妙寺日淡に告げければ日珙乃ち雌雄を決せんが爲め貞安と宗論を開かんとし訴狀を寺社奉行に提出せり是に於て織田信長其請を納れ五月二十七日淨嚴院に於て淨土日蓮両宗徒をして大法論を開かしむ然るに淨土宗貞安の說や勝りけん日蓮宗僧辭屈する時判者因果大居士法席に出で淨土宗の勝利を告げければ普傳房（日蓮宗僧）傳內の兩人大に怒り傍にありし香爐を取るより早く之を貞安に投付けゝり信長之を見るや大に其無禮を怒り直に從士に命じて之を捕縛せしめ後之を斬罪に處し餘怒尙日蓮宗寺を悉く破却して淨土宗に改宗せしめんとせしも日珙及立會奉行等百方陳謝せる以て漸く免さるゝことを得たりと之を有名ある安土宗論と云ふ

沙々貴神社

安土村大字常樂寺に鎭座す祭神は大彦命、少彦名命、仁德天皇、宇多天皇、敦實親王とす而して其創立年代詳あらざと雖も延喜式內の舊社にして佐々木氏累代の氏神として崇敬殊に篤く其社司の如きも佐々木經方次男行定始て神主とありしより以來累代之を襲職して以て今日に至る而して往古は社領八百石餘を有し末社亦拾有七ありしも永錄天正以來佐々木亡滅後悉く神領を收められしより以來荒廢に歸せしを天明年間京極丸龜城主每歲玄米百俵を寄附し且つ弘化年間金貳萬両を以て社殿を改築せらる今の社殿即ち之あり其他源朝賴自筆の額を寄附し德川家康又錫口を寄附せられしこと等ありて古來縣下著名の一社祠あり

安土城址

安土山上に今尙殘礎石垣等嚴然として殘れり天正四年正月織田信長岐阜居城を子信忠に讓り近江に來りて目賀田山を改め安土と名づけ茲に築城して七層の天守を建つ樓は東西十七間南北二十間高十六間半臺跌十二間ありて規模高大我國天主樓の嚆矢たり然るに天正十年明智の亂當城にては其守防の難からんを慮り蒲生氏鄉來城して信長の夫人及び從士等を拉して日野城に逃る六月四日光春來りて城中に入りしが光秀山崎に敗死せると聞き遂に城を燒棄して坂本に逃れ以后廢城とある又山下は當時繁盛ある城市ありしを後之を八幡山下に移す今の八幡町即ち之れあり

安土壚高雲裡攀。斫蹤化作老禪閣。晚霞如火人回首。
一點青螺認叡山。　賴三樹

總見寺

安土山にあり遠見山と號す、織田信長の創立にして座元禪師（信長の從弟）の開基あり以后織田氏の氏族代々住職たり而して本尊は藥師佛にして佛殿には信長及信忠の繪像を揭ぐ京都妙心寺の末派あり

桑實寺

安土村大字上豊浦村にあり世に桑の峯の藥師と云ふ本尊は天智天皇の代湖中より出現し給へる靈佛にして白鳳六年十一月定惠上人當寺を建立して之を安置す其后元明天皇當寺に行幸あり一首の御製を殘し玉へると其他詳細ある緣起あれとも荒唐不稽甚しきを以て之を除く

觀音正寺

觀音寺山にあり西國三十三所の一にして又江州十二大寺の隨一あり昔し聖德太子日暮れ此村を過ぎ給ふ時に蘆中に人面魚体の者あり太子を見て謂て曰く我前生に殺生を好み之を渡世とあしゝより遂にかゝる身を以て生れ來れり聖者若し憐れと思ひ給はゝ乞ふ之を救くひ給へと太子曰く我何を以か汝を度せんと人魚曰く此地に伽藍を建立し千手を安置し給はゝ我れ苦道を出でゝ天上に到らんと太子乃ちこゝに本堂を建て千手の觀音を安置し且つ七日の間念佛稱名して彼が菩提を弔ひ給へば其滿願の日に至り天人降下して太子を拜し我生天中受勝妙樂と唱へ我れ聖者の慈力を以て今は忉利天に生せしかは拜謝し奉ると其まゝ昇天し去れりと而して當寺もと山下に在りしを觀音寺落城後山上に移したる者あり

觀音寺城址

觀音寺山腹にあり之れ佐々木氏累代の居城趾にして佐々木季定より承禎に至る十八代四百餘年間の居城ありしが永錄十一年八月織田信長の爲めに攻陷せられ遂に廢墟とあれり

佐々木氏は宇多天皇の皇子敦實親王より出づ親王の御子雅信始めて源姓を賜ふ而して雅信の二男扶義始めて近江國沙々貴莊に移り氏を佐々木と改む治承年間源賴朝伊豆より起りて諸所に轉戰するや秀義の子定綱兄弟之に從ひ屢々殊功を建つ依て後年賴朝天下を平定し幕府を鎌倉に開くや定綱をして近江守護職とあす是に於て城を觀音寺山に築きて居住す以來子孫累代襲職し信綱の子泰綱に至りて六角、京極の二家に分れ國中を二分して國務を執りつゝありしが後年淺井、織田氏の興るに及びて遂に滅亡せられたり

蒲生野

武佐村の東南方より市邊村に至る間の荒野を云ふ當郡上古は蒲生野てふ一大曠野にして住民少く土地開拓せられざるを以て天智天皇の代百濟國人男女七百餘人を歸化せしめんこと日本書記に見ゆ又文武天皇の代美濃多伎郡民七百餘人移住し來りしことあり以來漸次殖民開拓せられて今日に至りし者にして今村名に野を付する所多きは即ち其開拓せられし證と見るべし而して當蒲生野は上古原野の一部の未開のまゝ殘れるものにして古名六本野、蓁邇野、荊萩野等と稱したり

尋ねても昔しとはゝや蒲生野の　　爲相
鶴はむかしの宿にすむらん
蒲生野の若むらさきの藤ばかま　　匡房
千代の秋まで匂へとぞ思ふ

● 貌長者舊跡

貌長者は嵯峨天皇時代の人あり今蒲生野に其屋敷跡と稱する所あり又鏡山村善光寺川堤下に其石臼と稱するものあり（今埋沒して見えぎ）而して長者とは古來富者の別號とおりあれども一說によれば唯に別稱のみおらぎ一方に於ては宿驛の長たりしが如し其證は古書に美濃青葉の長者遠州池田の長者等ありて往古宿驛たりし所大底長者と名づくる者あるを以ておりされば右貌長者と稱する者も或は武佐驛長おりしやも知る可らぎ

● 老蘇森

東西老蘇間にあり之れ往古一大森林ありし其一部の今尙殘存せるものおり太平記に「老蘇の森の下草に駒をとゝめて顧る古鄕を雲やへたつらん」云々とありて古來有名おる森おり

世やはうき霜よりしもに結びおく　　定家
老蘇のもりの本の朽葉は
露はおのが涙かおく蟬の　　慈鎭
聲も老蘇の森の下草

● 長光寺

武佐村大字長光寺にあり昔聖德太子老蘇森に御座する時妃產氣つきてより十餘日の間苦悶し給ひければ太子妃に語りて曰く汝專ら神道を信じて未だ佛法の尊を知らぎ今苦し佛力を憑まば自ら平產すべしと妃曰く我今佛力を賴み若し平產おらば君と共に伽藍を建立して衆生を濟度すべし但し佛法眞おらば乞ふ威力を示し給へと言終らざるに西南方より一道の光明來りて妃の口中に入るよと見えしが王子忽ち平產あり妃其瑞相に驚き直に武川綱に命じて光源を探索せしめ玉ひければ山麓に方三尺の寶石及白檀ありき妃乃ち其白檀を以て佛を作り彼寶石上に安置し堂宇を建立し武の作れる寺おるを以て之を武作寺と號せられける後年太子再ひ妃と共に此地に來り玉ひ伽藍を建立し佛像を作りて安置し武作等を改め長光寺と號せらるゝ之れ光明遠きより來て妃の口中に入りしを以て寺號とせられしおりと之れ當寺の略緣起おり

文和四年正月足利尊氏後光嚴院を奉じて當寺に來りしこと太平記に見えたり

● 市邊皇子墓

市邊村大字市邊にあり初め安康天皇は履中天皇の御子市邊押磐皇子を愛して之に天位を讓らんとの思召ありを帝の母弟大泊瀨皇子聞かせ給ひ帝の崩後市邊皇子及舍人佐伯部賣輪を遊

獵に托して來田綿蚊屋野に誘ひ野猪を射るに擬して皇子を射殺せらる賣輪之を見るや大に驚き走りて皇子の遺骸に縋り慟哭しつゝありしかば亦射殺せらる而して後大泊瀨皇子即位し玉ふ之を雄略天皇と申す時に市邊皇子の御子弘計と申する人難を避けて播磨にありしが後年即位（顯宗帝おり）せらるゝに及び普く天下に詔して父王の葬所を求め玉ふ時に當郡村井（今の日野）に當目と云ふ老媼あり其葬所を知れりと奏上す帝大に喜び乃ち皇太子と共に來田綿蚊屋野に行幸し地を發掘して見玉ふに果して老媼の言の如し帝是に於て之を改葬せんとし玉ふに皇子の骨と賣輪の骨と混亂して何れが父王おるやと識別しかたし時に市邊皇子の乳母あり之を見て上齒落ちたる者即ち賣輪おりと奏しぬ帝是に於て髑髏を別ち雙塚を建てゝ篤く葬儀を行はせ給ふ

來田綿蚊屋野とは郡の東南綿向山麓に御幸野と稱する所即ち往古の蚊屋野にして西大路村大字北畑は當時の來田綿おりしと又同村大字音羽に古來皇子の墓と稱するものあり又一說に蚊屋野とは愛知郡泰川村邊一帶の總稱おりとも云ふ（此地は往古蚊野鄕と云ふ）又神崎郡御園村邊おりとも云ふ（當地は往古高屋鄕と云ひ大字妙法寺に皇子の墓と稱する者あり）されど皇子の墓は明治八年此地に確定せられたり但し當墓は顯宗帝の改葬し玉ひし處にして其以前に於ては前記の音羽か或は妙法寺にありしやも知るべからぎ

● 阿賀神社

俗に太郎坊と云ふ太郎坊山腹にあり一小祠にして緣起は未だ詳にせぎと雖も毎月二十三、四祭日には遠近より茲に賽するも頗る多く近郡著名の一社祠たり而して當山は巨巖大石累々として屹立し恰も庭前の築山の如し傳ふ元龜元年織田信長京師より間道を經て尾張に歸へらんとし此地を過るや六角氏の遺臣杉谷善住房當山より銃を以て狙擊を試みたりと

● 石塔寺

櫻川村大字石塔にあり傳へ云ふ昔し寂照法師（俗名大江定基）と云へる僧あり長保五年八月入唐して淸涼山に登り淸涼池に至るに寺僧毎朝池を廻りて禮拜するあり寂照怪しみ故を尋ぬれば昔し佛生國に阿育王と云へる人あり故ありて八萬四千の人を殺しゝより其罪を滅さんが爲め八万四千基の石塔を作り鬼神に托して之を十方へ散置せしめしに日本國蒲生郡に一基留まれり而して此の石塔逆に建つるより朝日扶桑國に出づれば石塔遙に影を此池に印す故に彼の寶塔を拜せんが爲め此の池を廻るおりとぞ答へける寂照聞て奇異の思をおし直にこの由委細に記して日本國に送る一條天皇之を叡覽あり乃ち寛弘三年二月鎭守府將軍源成賴公を勅使として蒲生野に來りて是を求めしめ給ふ時に佐倉小脇の領主野矢光盛獵犬を率ゐて之に從ひしが其犬山中に入り一塚を廻りて吠ゆること頻おり光盛怪しみ乃ち之を發掘するに一基の石塔（高三丈六尺四角三重）巍然として出現せり一同大に喜び即ち之を安置して石塔寺と稱す之れ本朝古來五奇異の一おりと而して境內には今尙光盛及獵犬の墳あり又朝日野村大字に蒲生堂と云へるは之れ石塔搜索の勅使來りし時其旅館を建てたる所にして今村名に殘る又市子に車坂と云へるは同勅使の下車せられし所おりと云ふ

鬼室集斯墓

東櫻谷村大字小野にあり鬼は百濟國人あり天智天皇二年男女數百人と共に我國に歸化し蒲生郡に居住す四年小錦下に叙せられ十年小錦上を授けらる後年天智帝の大學を興し玉ふや學職頭に任せらる後掛冠して此地に幽棲し朱鳥三年十一月八日卒す之れ實に歸化の年より二十六年目あり而してこの名士の墓碑も歳月を經るに隨ひ苔苔に埋沒せられ人の之を知るものの絶てあらざりしを文化二年西大路藩醫西生懷忠の發見する所とあり之を館に移して苔を拂ひ水を洒きしかば正面に鬼室集斯墓左面に朱鳥三年戊子十一月八日涓右面に庶孫美成造との文字歴々顯はれしよりこゝに初めて有名なる學士の墳墓なること判明するに至りしあり

長束政家墓

東櫻谷村大字中之郷にあり政家は栗太郡常盤村大字長束の人にして幼名利兵衛と云ふ性計算を能くし理財の道に長ぜるを以て羽柴秀吉之を聞き召して祿一萬石を與へ從五位下大藏大輔に任ぜ文錄元年征韓の役功勳により四年水口城主に任せられ錄五萬石を賜ひ五奉行の一に列せらる秀吉薨後德川家康に事へしも志操定まらぜ窃に石田三成に通ぜ慶長五年關が原役に敗軍して水口城に歸る時に池田輝政來り圍む政家又敗れ窃に城を出でゝ此地に來り百姓孫兵衛宅に匿れしも輝政の兵亦追跡し來りしを以て遂に子伊賀守と共に自刃して死す

西大路陣屋舊址

西大路村大字西大路にあり元和六年市橋長政越後國三條より此地に移封せられ祿二万石を賜ひ伊豆守に任せらる爾來子孫世襲して王政維新とあり版籍を奉還す

中野城址

西大路の山中にあり一に日野城と云ひ蒲生氏歴代の居城址あり蒲生氏は其先藤原秀郷に出つ其后胤小山判官朝氏の子秀朝始て當郡に移住して蒲生氏と稱す以來連綿として在住し蒲生定秀に至りて六角氏に仕ふ永錄十一年織田信長兵を遣して當城を圍ましむるや時に定秀の子賢秀能く死守して容易に降らぜ信長乃ち賢秀の妹夫神戸盛友を遣はして降服を勸めしむ賢秀是に於て遂に降伏開城せり時に賢秀の子に忠三郎氏郷と云へるものあり信長之を愛し召して侍臣とす氏郷長じて信長に從ひ處々に轉戰して殊功を建つ信長之を賞し遂に巳が女を以て之に配す天正十年信長京師本能寺に弑せらるゝや氏郷直に安土城に到り信長の室及幼君等を迎へて當城に入る後羽柴秀吉之を賞して五千石を賜ふ氏郷之より秀吉に從ひ所々に出征して殊功少あがらぜ遂に伊勢龜山に封せられ後累進して會津百万石とある氏郷歿后子孫所々に轉封し忠知に至り日野城二十四万石を領せしも忠知歿后遂に家名斷絶せり

日野町

日野はもと遠江野と云ふ蒲生野の一部にして天智天皇の代縣下に多く牧場を設置せられし其一あり其後檜物庄と名づけ後又ひものゝもの字を脱略して日野とある蒲生氏此地に在城するに及で城市とあり繁盛なる地とありたり今や戸數一千五百人口七千餘を有し郡中第二の都會として賣藥の製出盛んなる地あり

綿向神社

日野町大字村井に鎮座す祭神天穗日命にして欽明天皇六年綿向山上に鎮座し后今の地に遷したり康永年間火災に罹りて燒失し大永三年再び燒失す天文十一年中野城主蒲生定秀社殿を造營し社領十石を寄附せられしも后年蒲生氏斷絶後絶えたり後德川氏に至り社領亦十石を付せらる祭禮は毎年四月に行ふ神輿、山鉾等を出して甚だ盛あり

村井御前社は境内にあり置目を祭祀する所あり置目とは狹々貴山韓袋宿稱の妹にして顯宗天皇の代市邊押磐皇子の葬所を奏上したる功により宮中に奉仕し後衰老により暇を乞ひ此地に退老す土人之より置目を尊稱して村井御前と云ひ歿後社を建てゝ之を祭る

照光寺

北比都佐村大字内池にあり昔し北條時頼剃髪して最明寺と稱し微行して諸國を偏歴する時當寺に宿し左の和歌を詠じ所持の扇子を殘し置けりこの扇子今什寶として存す

近江あるひものゝ里のふしぎくら
散らぬはかばのふしぎなりけり

苗村神社

苗村大字綾戸にあり傳へ云ふ安和二年雪野寺の佛新卷嚴馬寺の本尊當地の古老綾尼の許に來りて曰く我窮貧無福の者に財寶を授けんが爲此地に來るも未だ身を休むべき社祠なし願宜しく計り給へと尼答へて曰く我此地に田若干をもてり此内八反を君に讓るべしされと此地にましまさんとならば一の靈異を現はし給へと佛曰く然らば卿の爲に苗を植え置くべしとて之を栽ゆ夜明て之を見れば前日の稚苗悉く成長して大なる杉村とあり丈大に驚き乃ち出現の林地を拓きて社壇を設け之を祭り名づけて苗村大明神と稱す三十三年毎に大祭を行ふ此年に當れば五穀豊穣ありとて鄕内歡び祝すると云ふ

龍王寺

苗村大字川守鐘が嶽にあり古來野寺と稱して有名なるは是あり當寺は持統天皇の代行基の開基にしてもと安吉山雪野寺と稱す傳へ云ふ寶龜年間此地に小野時兼と云へる人あり一日美女忽然として來り時兼と夫婦にありしが居ること三年餘にして一日時兼に云て曰く妾は女にあらぜ實は平木澤に住む龍神あり今や歸へらんとすとて一個の玉手箱を殘し飄然として去る時兼戀慕の情に堪へぜ直に平木澤に至れば長十餘丈の大蛇となれり時兼大に驚き歸りて紀念の玉手箱を開けば一個の梵鐘あり乃ち之を當寺に寄附す一條天皇之を聞し召し龍壽鐘面の勅額を下賜し玉ふ之より龍王寺と改むと云ふ

暮れにきと告るぞまこと降りつもる　和泉式部
雪の野寺の入相の鐘
昨日みし花のわたりに夜はあけて　定家
野寺の鐘のこゑぞきこゆる

木村重成舊蹟

文錄元年七月木村常陸介重高の豊臣秀次の罪に座し攝津妙心寺に自殺するや其室愛女倶に死せんことを乞ひしも身懷姙なるを以て許るされぜ依て京師に出でゝ出産し後馬淵村に來り

佐々木義鄉に依る而して其子を重成と名づけ成長して豊臣秀頼に仕へ長門守と稱し大阪城中四天王の一人となる元和元年大阪夏の役重成東軍と戰ひ戰死するや其妻青柳又馬淵村に來り男子を出産し後剃髪して佛事せしが翌年重成一周忌の日持佛堂に入りて自殺す而して其子生長して馬淵源左衛門と稱し子孫連綿たりしと云ふ

住蓮坊墓

馬淵村大字千僧供にあり住蓮は伊勢次郎左衛門清原信國と云ひ後白河院の北面武士にして夙に武勇の名ありしが後出家して源空の弟子となり東山鹿が谷にあり時に後鳥羽上皇の寵姫に鈴虫（十七）松虫（十九）の二人あり常に佛道に歸依して道世の思ひ深かゝりしが建永元年の冬上皇紀州熊野に臨幸ありしかば両女乃ち鹿が谷に參詣し遂に剃髪染衣の身となり後紀州に到りて草庵を結びて念佛三昧に入りたりき上皇熊野より還御し玉ひ此由を聞かせ給ひて大に逆鱗あり如何に二女の願望切なりと雖も奏達をも遂げず密かに剃髪を免せしこと破戒妃儀の至りなりとて遂に其師源空、親鸞を流罪に處し住蓮坊を馬淵に送り佐々木九郎吉實に命じて斬首せしめ玉ふ坊時に年三十九元録二年土人石塔を建てゝ標とす

因に住蓮坊と同罪に處せられ六條河原に斬られたる安樂坊と云へるは在俗にて同じ北面の武士にして剃髪の後も一蓮託生の誓をなせしより死刑の後骸ありとも同穴に埋葬せられたしとの遺言により刑後望の如くこれを馬淵に送りて同所に葬むりたりと云ふ

源義經舊跡

鏡山村大字鏡西方入口に一小池あり之れ源義經元服の舊跡なりと又村中民家に其際義經の用ひたりと傳ふる盥の一片を秘藏せり義經幼時洛北鞍馬寺にありて遮那王と云ふ一日諸家の系圖を繙き源氏再興の志を起し、より日夜武藝を練磨しつゝありしが偶々奥州の金賈橘次と云へる者京師に上り鞍馬に詣するに遇ひ之に情を明し倶に奥州に到りて藤原秀衡に依らんことを乞ふ橘次之を諾す遮那王乃ち夜窃に山を遁れ橘次と共に東下の途次この宿に於て自ら元服を加へ名を源九郎義經と改む時に承安四年三月三日義經年十六なり

鏡山

野洲郡にあり其狀鏡に似たるを以て名づくと或は云ふ昔壬申の亂近江の軍將鏡大君戰死し此山に葬りしを以て名ありと山上に龍王社ありこれ鏡大君の靈を祭る所なり又この山古來詩歌に吟詠せられて甚だ有名なり

鏡山いざ立よりて見てゆかん　　黒主
年へぬる身は老やしぬると
鏡山やまかきくもり時雨るれど　　素性法師
紅葉あかくぞ秋は見えける

神崎郡

東は伊勢國に境し北は愛知郡南は蒲生郡に接し西北は湖に濱す東西八里二十四町、南北一里三十五町、面積七方里五五、又郡内を分ちて一町十二ヶ村七十八大字とし戸數九千七百五十四、人口五万二千五百五十五あり

山上陣屋舊址

山上村大字山上にあり貞享二年德川氏の臣稲垣長茂の三男重定始て茲に封せられ祿一万三千石を食む爾來子孫世襲し九世太良に至りて王政維新となり藩籍を奉還せり

柿御園

今の御園村より伊勢國界に至るまでの二十餘ヶ村を昔は柿御園莊と呼べり這は惟喬親王愛知郡君が畑に幽棲せられし時此邊一帶を園地とおし多く柿樹を植栽し給ひし故に名づくと云ふ

若松森

御園村大字川合寺なる若松社邊を云ふ

二葉なる若松のもり年をへて　　匡房
神さびんまで君はましませ
きゝにさへ涼しくありぬ若松の　　顯仲
もりの梢の風のしらべに

八日市

郡の中央にあり古來毎月八の百商賣相集り百貨の市を開きしを以て名づく今は郡内第一の都會として人家櫛比商業頗る繁盛なり

瓦屋寺

建部村大字瓦屋寺にあり傳へ云ふ用明帝二年聖德太子大阪四天王寺を建立せらるゝ時此地の土を以て瓦を製し一寺を開基して瓦屋寺と稱せらる而して其土を取られし跡を濱野澤と云ふと、

石馬寺

南五箇莊村大字石馬寺にあり推古天皇二年聖德太子の開基にして御都繖山と號しもと七堂伽藍の大寺なりしが永錄十一年織田、佐々木の兵火に罹り全寺烏有に歸し一時衰頽したりしを正保元年雲居禪師入寺之を再興せり以來豊臣、佐々木、德川氏の歸依厚く寺領一千石を賜はりたり而して今の方丈は三代將軍家光公の御茶屋御殿を寺領百石を附して拜領せしものなりと云ふ境内に駒繋の舊松あり傳へ云ふ太子當山に登られし時其乘馬池中に沒して化石す是れ寺名の起因なりと

善勝寺

五箇村大字佐野にあり天台宗にして聖德太子の開基なり釋善寺と稱したるが田村麻呂東夷征討后之を再興し東夷に勝ち得たる由緣により繖山善勝寺と改名し寺領千石を附せらる而して昔時は大伽藍にして坊舍七十餘ありしも元龜の兵火に罹り全寺烏有に歸したり

轟橋舊跡

北五箇莊村大字小幡にあり古歌の名所なり

旅人もたつ川霧に音ばかり　　覺盛
きゝ渡るかなとゞきのはし
わきもこに近江ありせばさりと我　　兼昌
文もみてまじとゞきの橋

野島崎

栗見村大字福堂の湖邊を云ふ其南に乙女濱あり共に古歌の名所

乙女子が衣のすそやしぼるらん　　順德院
野島が崎のあきの夕露

近江とや野島が崎のはま風に
妹が結びしひもふきかへす　　八九

波にわふからにしきとも見ゆるかな　　俊成
野島がさきのわきはぎの花

伊庭御殿跡

伊庭村にあり昔し德川家康及秀忠上洛の時茲に館したる所にして今尚石垣は存せり

愛知郡

東は伊勢國に接し北は犬上郡南は神崎郡に境し西北の一部は湖に臨む東西七里二十六町、南北三里二町、面積十四方里九六、而して郡を分ちて十五ヶ村百二十八大字とし戸數九千七百五十四、人口五万二千五百五十五を有せり

君が畑

郡の東極山間に在る一大字あり傳へ云ふ昔し文德天皇の皇子維喬親王出家して此地に來りて幽棲し給ふ故に地を君が畑と名づけ其居を高松御所と云ふ親王此に在はする時自ら木を挽きて器物を製作し之を土人に敎授し給ふ之を日本木挽の元祖とす親王貞觀元年此地に來り給ひてより在住十九年に薨去し給ふ土人祠を建てゝ其靈を祭り木挽職の祖神と仰ぐ親王此地に於て御詠あり曰く

深山べの池の汀に松たてゝ
都にもにぬ住居とぞ思ふ
世をいとふ愛知の深山の呼子鳥
ふかき心を誰かしるらん

又大政大臣實秀親王に隨伴して此地に來り小倉に住す故に世に小倉の大臣と云ふ歌あり

東路の深山の奥の君が畑
はこぶあゆみは今日の宮人

大納言雅仲

今はとて妻木こるべき宿の松
千代を見んとぞおぼいのるかな

一說に曰く親王は貞觀四年出家して比叡山麓小野に幽棲し給ふ故に小野の宮と稱し後年同所に於て薨去せらる今現に其墓ありとされば親王の此地に隱遁せられし事疑問にして或は親王の男兼覽王の母と共に此地に在せしことあればそを混同しての說あるべく其君が畑と稱するも親王の領地のみにして其幽棲の塲所に非らざる可しと云ふ

百濟寺

角井村大字百濟寺にあり釋伽山と號す推古天皇十五年聖德太子の開基にして其百濟と號するは百濟國の僧惠聽、道欣、觀勒等の太子の命により當寺に住居したるに因る而して往時は七堂伽藍支院三百餘坊ありて歷世皇室の勅願所として有名なる巨刹ありしも明應七年火災に罹りて燒失し其後再び建立せしも天正五年織田信長の兵燹に罹り悉皆烏有に歸し寺領亦沒收せられたり以來衰微しつゝありしが寛永十四年明正天皇の勅命により慶安三年本堂を再建せり

壽三永年七月木曾義仲平氏を追ふて西上する途次蒲生野に陣し滯留日を重ねて糧食盡んとせるより使を百濟寺に遣はして救助を乞ふ住僧乃ち米五百石を送りければ義仲其篤志に感じ

當寺の御油料として押立五鄕の地を寄進したること源平盛衰記に見えたり

金剛輪寺

秦川村大字松尾寺にあり松峰山と號し一に松尾寺とも云ふ天平十三年僧行基の開基にして十一面觀音像を安置し聖武天皇勅願所として往古は隆盛なる大伽藍ありしも屢々兵燹に遇ひて今殘れるもの大悲閣、文殊堂、三重塔等外數坊に過ぎず而して是等諸建物は何れも兵燹破毀を免れたる一千有餘年の古伽藍にして近年特別保護建造物に編入せられたり

永源寺

愛知川の上流高野村にあり臨濟派本山にして初め飯盛山と號す之れ堂前の山飯を盛りたる如きを以てなり康安元年圓應國師入寺之を再興す師は小野宮大臣實頼七世の孫にして元應元年渡唐し求法の後歸朝し一年當國に來る佐々木氏頼之を崇信し此地に伽藍を建て龍原を寺領に充つ時に毎夜東峰に方りて光輝を發するものあり怪みて之を見れば一巨石の上に觀音像あり師大に喜び乃ち之を寺中に安置し山號を瑞石山と改む之より靈驗四方に聞え皇室武家の崇信せらるゝこと篤く明應四年後土御門天皇黃衣の永宣旨を授け鎌倉圓覺寺の上に列せしめられ後奈良天皇亦紫衣の永宣旨を賜ひ嵯峨天龍寺に準せしめらる然るに永祿以後屢々兵火に罹りて堂宇燒失し一時衰頽したるを寛永二十年後水尾天皇の勅命により佛頂國師入寺再興し東福門院伽藍を再建し給ふ後皇女二宮の剃髮せらるゝ時左記和歌と共に御硯を當寺に納められたり

海はあれど君が御影のみる目おき
硯の水のあはれかおしき

寺は山腹にありて滿山楓樹あれば秋季降霜の候に至れば江雲錦繡中に隱見し風光絕勝あり近時遠近より杖を曳くもの頗る多し

愛知川

源を東部の山間に發し神崎郡境を西に流れて湖に疏ぐ縣下著名の大川あり其北岸に愛知川村あり、もと神崎郡に屬せしも近時之を當郡に編入せらる郡内第一の都會にして又中仙道の驛次あり

愛知川に岩こす棹の取もあへず
下す筏のいちはやき世や　　後頼

鯰江城址

西小椋村大字鯰江にあり往時六角義賢の築城にして其子義弼之を守りしが天正元年柴田勝家攻めて之を陷れ以來廢城となる

犬上郡

東は美濃伊勢兩國に境し北は阪田郡、南は愛知郡西北は湖に面す、東西三里十五町、南北三里二十八町面積二十二方里八九あり又郡を分ちて一町十九ヶ村百九十九大字とし戸數一万二千六百三十四、人口七万一千三十七あり

彦根町

郡の西北湖畔にあり井伊氏三十五万石の舊城市にして町數九

十二、戸數三千、人口二万餘を有し東海道鐵道の一驛近江鐵道の起点地として商業繁盛縣下第二の都會あり因に彦根と稱するは、もと金龜山上に大土縣主の祖天津彦根命を祭祀せるを以てあり又金龜と稱するは金龜寺ありしが故ありされど金龜寺は山上に築城の際これを西麓松原口へ移したり

● 彦根城

金龜山上にあり慶長七年藩祖井伊直政關が原の軍功により石田三成の佐和山城を賜て居る後之を金龜山上に移築せんと欲し果さゞして歿す依て長子直勝遺業を繼き慶長八年工を初む徳川氏乃ち伊賀、伊勢、尾張、美濃、飛彈、若狹、越前の七箇國十二大名に役夫を賦課して之を助けしめ十餘年を經て竣工せり而して天守閣は慶長十一年京極高次の大津城より又西城三層樓は淺井氏の小谷城より又天秤樓門は羽柴秀吉の長濱城より皆移轉改築せる者にして實に井伊氏十五世二百五十餘年間の居城ありしが王政維新となり廢城となりしより諸建築も亦漸次撤去せられ殆んど其形跡を留めざらんとするに至りしが明治十一年　聖駕近畿御巡幸の砌り這を叡覽あり可惜名城の荒廢するを慨かせ玉ひ皇宮附屬地として保存の御沙汰ありしが明治二十七年五月に至り再び之を井伊氏に下賜せられ以來公園地となし諸人の出入自在となれり而して天守閣は三層にして今尚嚴然として半空にあり茲に登臨すれば彦根全市は更なり琵琶の太湖を眼下に眺め風光絶勝心氣爽快ならしむ實に湖東の一偉觀なり

樂々園は城北三丸湖岸にあり井伊氏の別邸にして舊槻御殿と稱したる者園中に近江八景を摸せる八景亭ありて有名なり

● 大洞辨天堂

大洞山（又黒根山とも云ふ）にあり元祿九年井伊氏の創立にして石塔一基あり下に西國三十三靈地の土を埋むと云ふ又山下に天寧寺あり境内に井伊直弼の遺髮の墳墓あり

● 木村重成首塚

彦根町宗安寺にあり重成は重茲の子なり文錄四年父罪ありて自殺するや重成母に抱かれ蒲生郡馬淵に隱れ生長の后豊臣秀頼に仕ふ慶長十九年大阪冬の役重成善く戰ひ大に東軍を惱ます見る人皆其勇壯を嘆賞せざる者なし而して元和元年大阪夏の役重成亦挺身奮戰し遂に井伊直孝の軍に衝りて戰死す時に年二十一直孝其勇武を賞し首級を携へ歸へりて之を宗安寺に葬り首塚を建て諡號を智覺院殿忠翁英勇大居士と稱す而して位牌は今尚同町大信寺に現存せり又重成の戰死所なる河内國若江堤にありし血染の薄も又彦根城内に移植せられしが明治の初年再び之を佐和山神社境内に移植したり

● 佐和山城趾

彦根町の東北佐和山にあり天正年間京極氏の臣磯野員正茲に城を築き屢々六角氏と應戰せり後年織田信長近江を平定するに及で丹羽長秀を茲に封ぜ天正十八年羽柴秀吉石田三成を茲に封じて祿十八萬石を與ふ慶長五年關ヶ原の役徳川家康、井伊直政、小早川秀秋の二將に命じて之を攻陷せしめたり翌六年井伊直政當城に封せられ十五萬石を賜ひしが翌年直政卒后嫡男直勝嗣ぎ遺命により當城を破却し新に金龜山に築城して同九年移轉せり

本丸の遺跡は山嶺にあり又鳥居本方面の通路に字大門口と稱する所は即舊大門のありし所にして今尚殘礎を存す其他殿町と云へるは武家の所在地にして佐和山周圍に存する數多の石地藏佛は三成歿後土民の其餘德を追慕しそが菩提の爲め建立したる者なりと云ふ山下に清凉寺あり愚明和尚の開基井伊氏の菩提所にして慶長七年直政卒し當寺に葬り諡號を祥壽院清凉泰安大居士と稱す因て諡號を取り祥壽山清凉寺と稱す

● 鳥籠山

千本村大字正法寺にあり古名床の山とも云ふ壬申の亂近江の軍將秦友足の戰死せし所にして又慶長五年佐和山攻めの時徳川家康の陣したる舊跡あり近年山中より古墳を發見せり蓋し壬申戰死者の埋所なるべし又山麓に鳥籠池あり共に古歌に詠せられて有名なり

あだに散る露の枕にふしわびて　　俊成女
　　鶏なくなり床の山風
あれはてぬ拂はぬ袖のうきにのみ　　定家
　　あはれ幾世の床の浦風

● 多賀神社

多賀村赤土山麓にあり官幣中社にして本殿二座神祖伊奘諾尊妹伊奘冉尊を祭祀す傳へ云ふ太古諾尊神勅を奉して天下を修理し後天に昇りて復命し又降りて此地を日の少宮となして長へに留まり玉へりと故に世に壽命神と稱し古來皇室武家の崇敬特に深く彼の豊太閤大政所の如き延命長壽の祈願ありて其靈驗殊に顯著なりきと傳へられ又俊乘坊重源、南都東大寺を再建する時又延命法を祈願して其功を畢へたりと而して其際座して祈願したりし石を壽命石と稱し今尚當社にあり而して特に靈異あるは双鳥當に域内にありて供饌の先食をなすこと今に絶えゞと云ふ大祭は四月二十二日に行ふ此日は古例により郡内有徳の長者を選出し之を頭人と稱し武具兵器を帶して渡御し行裝美麗縣下祭禮中の一偉觀なり

● 唯念寺

豊郷村大字四十九院あり兜率山と號す天平三年僧行基縣下に四十九ヶ寺を建立し其最後に當るを以て四十九院と稱す正平七年足利義詮京師の亂を避け後光嚴院を奉して當寺に來り行在所とす而して同年二月より三月に至る迄御駐輦あらせられ四十九院及び春日明神の勅額を下賜し玉へり其後寺名を唯念寺と改稱し舊號は村名に殘るに至れり

● 犬上川

一に高宮川と云ふ源を伊勢國界三國嶽及び愛知郡界の山間に發し大瀧村大字一の瀬の北方にて合流し其より西流して磯田村大字八坂の北方より湖に注ぐ古名名取川又は不知也川と稱し多く萬葉歌集に入れるは之なり

犬上の床の山なるいさや川　　讀人不知
　　いさと答へて我名もらすな
名取川せゝの埋木あらはれは　　同
　　いかにせんとか逢みそめけん

● 多景島

磯田村大字八坂に屬し湖上を距ること一里餘東西三十間南北二丁三十間周圍五町餘の一小島にして往古は唯竹笹叢生せる

を以て竹島の名ありしも今は四方豁然湖上の風景多きを以て之を多景と改むと島中唯見塔寺の一あるのみ

坂田郡

東は美濃國に境し南は犬上郡北は東淺井郡に接し西方は湖に面す東西三里十七丁南北四里一丁面積十五方里一五あり而して郡を區畫して一町十八ヶ村、百八十大字とし戸數一万四千四百六十七、人口七万二千四百二十五を有せり

寢物語

柏原村大字長久寺を云ふ此地は近江と美濃との國界にして両國の人家相連なるを以て寢ながら對話することを得、故に此の名あり又一名長競（ナケクラベ）と云ふ両國の山嶽左右に並びて恰も長を競ふに似たるを以てあり

右ひだり見て行きゆけば近江美濃　兼良

ふたつの山ぞたけくらべする

柏原

中仙道の驛次にして美濃國界を距ること十九町あり傳へ云ふ往古此地より毎年正月御薗固と稱し長二寸幅一寸八分の餅を柏の葉に盛りて獻進する例あり因て村名とある

清瀧寺

柏原村大字清瀧山中にあり靈通山德源院と號す永仁三年京極氏の祖佐々木氏信卒して當寺に埋葬し清瀧寺殿と謚す爾來十八世高吉に至る迄の墳塋ありて即ち京極家の菩提所たり

源具行墓

柏原にあり俗に法華塔と云ふ中納言具行は師行の子なり後醍醐天皇に奉仕し逆賊北條高時を誅滅せんが爲め屢々兵を徴發せること露顯し笠置落城後帝を奉じて南都に逃るゝ途次北條氏の爲に捕はれ元弘二年六月十九日佐々木道譽附添ひ鎌倉へ下向の途次田兒六左衛門尉命に依つて此地に斬首す具行死に臨み辭世の頌あり

逍遙生死、四十二年、山河一帶、天地洞然、

後年清瀧寺の僧、具行追善の爲め一石に一字の法華經を書寫し之を土中に埋む故に此名あり

成菩提院

柏原にあり天台宗に屬し寂照山圓通寺と號す往古傳敎大師の開基にしてもと七堂伽藍の大寺なりしも嘉暦元年越前平泉寺僧徒の爲め堂宇悉く破却され以來大に衰頽を極めたりしを應永年中叡山西塔の僧眞舜之を再興せり永錄十一年織田信長當寺に止宿す時に御臺所平産あり其夜護魔堂より出火し全寺烏有とある慶長六年本堂を建立し關ヶ原の役後德川家康陣中の殘糧二百石を寄附す而して當時武家の崇信深く織田信長、羽柴秀吉を初め丹羽長秀、小早川秀秋等の禁制札あり

藤川

北國脇往還の驛次にして美濃國界に近く關ヶ原役德川家康の陣營を移したる所なり又村中に歌人藤原定家の寓趾あり定家爰に三年寓居して藤川百首の作ありと

伊吹山

一に膽吹とも書く近江と美濃との國界に聳立し直立四千五百尺餘登路一里二十町實に縣下第一の峻嶺にして晴天山巔より回顧すれば十有餘州の山川都邑盡く双眸に映して壯快言ん方なし而して山中佛閣數多ありしを以て往古は女人禁制の山たりしと云ふ又織田信長耶蘇敎師を葡萄牙より迎へし時當山に方五十餘町の地を與へ其本國の奇草珍木を移植せしめたり今尚藥草等の多く生ずるは即ち之に因由するなり

たまがつく伊吹の山の秋のつゆ　順德院

誰がおもかげの松虫のこゑ

冬ふかく野はありにけり近江なる　好忠

伊吹の外山ゆきふりぬらし

日本武尊故事

景行天皇四十年日本武尊東夷を征討し歸途伊吹山に妖神ありと聞かせ玉ひ之を退治せんと欲し單身登山し給ふ時に山神大蛇となりて道に横はる尊乃ち之を跨ぎて過ぎ拾へば雲霧忽ち生じ須臾に晦冥咫尺を辨せざるに至れりされど尊屈せず尚進み給ふ時に精神昏々として醉へるが如し因て山下に出で清泉を掬びて醒まさせ玉ふ尊之より身に微痛あるを覺えられしより杖によりて尾張に到り後伊勢に移り給ひしが終に鈴鹿郡能褒野に到りて薨じ玉ふ御年三十

伊吹四大寺

伊吹山麓に散在す即ち觀音寺、彌高寺、長尾寺、太平寺是なり何れも三修沙門（安祥上人）の光仁天皇の勅を奉じて寶龜年間開基する所にして往古は七堂伽藍髮を並べ坊舍數多〳〵淺井氏の崇敬篤かりしに元龜元年織田信長の兵燹に罹りて全寺烏有に歸し今何れも數坊を餘せるのみ

太平寺城趾

伊吹村大字太平寺にあり之れ京極氏初期の居城にして十一代高清に至り永正六年上平城（泰照村大字上平寺に其舊趾あり）を築きて之に移り太平寺城是より廢せり

京極氏は佐々木信綱の第四子氏信より出づ父信綱封土近江を二分し江南六郡を三子泰綱に讓り（之を六角氏の祖とす）江北六郡を氏信に與へて京極氏と稱せしむ（六角、京極と稱するは京邸の所在地に因て名づけしなり）是に於て文永二年氏信城を太平寺に築きて近江守護となる然るに十二世高峯に至り一度淺井氏の滅す所となりしも後年淺井氏亡ぶに及び十五世高次再び近江守となり以後子孫遂に斷絶す

廣姫皇后陵

大原村大字村居田にあり延喜式に所謂息長墓とは之なり皇后は息長眞手王の女なり敏達天皇四年入内して皇后となり押坂彦人大兄皇子（舒明天皇父）其他二皇女を生ませられ後年此地に崩御せらる之れ御父眞手王は當郡の人なれば父に隨ひ此地に在はせしならん

醒井

中仙道の一驛にして居寤泉あるを以て名づく傳へ言ふ昔し日本武尊伊吹山に登り山神の毒氣を受け苦腦甚しきより此清泉

を掬びて御腦を冷し玉へり是より醒ケ井又は居寤泉と稱して有名なるに至れり泉中に尊の腰掛石、軟懸石等あり而して此水流れて醒井川となる又天野川とある

醒井汀頭に不斷櫻あり舊花謝せば新蕾忽ち含みて四時絶ゆることなし明治十一年十一月　今上天皇陛下當地御通輦の砌り一枝を手折りて叡覽に供したりと云ふ

汲てしる人しもあらば醒が井の　宗良親王
清き心を哀とや見ん

夏の日も結べはうすき氷にて　兼良
あつさをもやかて醒が井の水

●西行水物語

仁安二年西行法師京師へ上洛する時醒井泉中に一小石あるを見之を拾ひ取りて茲の茶店に預け置きしに不思議なるかなこの石始終水滴りて止むことなければ主人怪しく思ひ之を打割りてみしに小蛇二疋出てけり其後西行關東へ赴くの日墓に預け置きたる石を求めしより主人ありし次第を物語りしかば西行いと殘り惜しげに彼は龍石とて水石なるより我武藏野に持行きて千田万畝を養ふ清水を出さしめんと思ひしものをとて

武藏野に思ひしことは夢醒井
波にくだけて石惜しぞ思ふ

と詠れけり而して此時茶店に容顏美麗なる娘あり一目西行を見るより戀慕の情起りて切なりければ西行出立の後其飲み殘しの茶の泡を飲みしに是より懷姙の身となり遂に一男子を産みけり翌年西行再び上洛する時この茶店に立寄りければ夫婦其子を抱き出でゝ右の譯を物語りしかば西行見て奇異の思をおし汝果して我子ならば元の泡に歸へれとて

水上は清き流れの醒井に
浮世の垢をすゝぎてや見ん

と詠吟ありければ其子忽ち消えて泡となりけり西行乃ち茲に五輪塔をたてゝ一煎一服一期終、即今端的雲脚泡、と書して立去られけると之より此處を兒醒が井町と云ひ往古の石塔今尚ありと云ふ

傳へきく夢の浮世や醒が井の　宗祇
水の泡子の消ゆるあらひを

●蓮華寺

息郷村大字番場にあり八葉山と號し時宗一向派の總本山にして推古帝二十三年憲崇律師の開基にして初め法隆寺と稱し日本三法隆寺の一なりしが建治二年六月雷災の爲に燒失し一時廢絶せるを弘仁七年夏時宗の俊聖遊歷の途次此地に來る時に當寺の住僧畜能、畜生、の二人深く上人に歸依して遂に其門に入り又鎌沙の城主土肥三郎元頼も深く上人の德を仰ぎ剃髮して道日と號し伽藍を再建して上人を開山となす而して周圍に八ッの峰あるを以て八葉山蓮華寺と號す而して十七世稱阿上人の時後柏原天皇より明道上人の號を賜ひ正親町天皇の代に其勅願所となる慶長十年關ヶ原の役德川家康當寺に陣し以後寺祿を付す又當寺に過去帳あり北條仲時以下四百餘人の法號を記す當時の住職稱阿の筆なりと云ふ

●北條仲時墓

蓮華寺境内に數百の墓石と共に並列しあり仲時は相摸守基時の子なり元弘元年五月足利尊氏と京師六波羅に戰ひ其敗軍するや光厳天皇、後伏見、花園の二上皇及び皇太子を奉じて東に奔らんと欲し此地に來る時に南朝の士守良親王兵を起して之を遮る仲時乃ち之と戰ひしも衆寡敵せず遂に敗軍し從士四百餘人と共に蓮華寺に入りて自殺す時に年二十八門前に細流あり土人血の川と云ふ死屍の鮮血流れて一時紅色になりしに因ると

●磨針峠

番場鳥居本間にあり傳へ云ふ昔し一青年あり京師に出でゝ修學し業半にして還る途次この嶺上を過ぎしに一老媼の斧を磨して針となしつゝあるを見て其勉勵不屈の精神に感奮し再び西上して學に就き遂に目的を達して還へり來れり之より磨針峠と名づくと云ふ此山坂路險峻古來中仙道中の最難所と稱せられ關が原役井伊直政、小早川秀秋等の石田三成を佐和山城に攻むる時陣したる所なり山頂に望湖堂あり眺望佳絶、維新前關西諸大名の江戸參勤の爲め此地を通過する時必らず休憩せし所なり

旅衣はころびぬれや磨針の　兼良
峠にきてもぬふ人のあき

路到磨針感忽生。馬頭遥水夕陽明。掃除天下兵塵了。　小原鐵心
與此湖光一碧平。

●鳥居本

中仙道の驛次又朝鮮人街道の分岐点にして往時多賀神社の鳥居（一説に日撫神社とも云ふ）ありしに因て此名ありと而して往古驛は鳥籠にありしも中世小野となり後又北に移りて鳥居本となり前の鳥籠、小野の驛家は廢絶せり

●法界坊舊蹟

法界坊は鳥居本上品寺の住僧にして道德堅固を以て聞ゆ一年法義修業の爲め江戸に出で偏く都下を托鉢す時に吉原某樓に花扇なる者あり才色を以て廓中第一と稱せらる一日法界坊の高名を聞き之を招請して授戒を乞ふ法界坊乃ち之を授く花扇大に喜び之が謝禮の爲め其墓む所を問ふ法界坊乃ち梵鐘の事を以てす花扇乃ち廓中を廻文して須臾に巨金を募り之を以て一梵鐘を鑄造せしめ之に花扇を初め施主の名を刻して布施す法界坊大に喜び乃ち之を車上に乘せ安永二年の春江戸を出立し東海道を西下して鳥居本に歸へれりと世に法界坊を墮落せるが如く記せるは誤謬の甚しき者にして其名餘り高かりし故種々附會して之を演劇に上せしなり

●小野

中仙道中古の驛次にして往古は小野莊と云ふ后鳥羽天皇和歌所の附屬地にして藤原俊成、定家、爲家の相傳領有せし所なり

忘れつゝこれも聲かと驚けば　雅經
なれぬ旅寢の小野の山風

●朝妻筑摩

入江村の一大字湖畔にあり此地往古は泊船の大湊にして傾城舞妓等多く住し頗る繁盛なる所なりしも慶長の頃南方米原に着船してより此地は漸次衰微せり而して德川氏の畫工英一蝶の畫きたる朝妻船（舟中に烏帽子を着けたる女の圖）は當時

此地遊女の風俗を寫せる者にして一時江戸市中に流行して甚有名なりしと云ふ

覺つかな伊吹おろしの風先に　西行
朝妻船はあらひやしぬらん
このねぬる朝妻船の淺からぬ　通勝
契りを誰にまたかはすらん

朝妻船歌

英一蝶

あだしあだ浪、よせてはかへる浪、朝妻船の淺ましや、あゝまたの日は、誰に契りをかはして、色を、枕恥かし、いつわりがちなる我床の山、よしそれとても世の中、浮寐つらさの、まつちの山の風、夕越えくれてさゝをぶね、あゝ定めなや床の浦波、友なき千鳥〳〵たへぬ思ひに月日を送るも、あだ人心、よしあふまで移り香、あだしあだなる身は浮枕、ならばぬ程の床の露、あゝ幾たびか、袖にあまれる涙の色を、あゝ袂との色を、嶺の紅葉は、獨りこがれて、枕の涙、あわれと人の問へかし、うきを語らん友さへなくて、なぐさめぬつわが心、うつゝなや、すぎしつたへの其水莖の、くろみし跡をみるにつらさの、いやます涙は誰かへぬるゝ、あわれと袖もとへかし、

右の歌は即ち英一蝶が前記通勝卿の和歌の短冊を得てより懷舊の情に堪へず此地に來り作りし者にて淺妻船の繪と共に一時非常に流行せりと云ふ

筑摩神社

入江村大字朝妻筑摩に鎮座す孝安天皇の代始て建立せる舊社にして初め大歲神のみ祭祀せしも後年此地を大膳職御厨所と定められしより御食津神稻倉御魂神及大歲神の三神を祭り嚴然たる一大祀社なりしも物換り星移るに隨ひ神祀頹破したるを以て遂に土民三神相殿に奉祭すること、せり上古神功皇后三韓を御征討し玉はんとて越前角鹿へ赴むかせらるゝ途次當社に參詣御祈願あらせらる又繼體天皇越前より御還幸の途次行宮に充てさせられ神殿瑞離御再興遊ばさる又承久元年后鳥羽上皇當郡名越へ御幸の際御ぬ拜あり銘劍一振を奉納ありたり而して古來每年四月八日（今は五月八日）八人の少女各鍋を被りて神幸に從ふ若し犯婬ある者あれば其鍋忽ち破裂すと又此地の婦女一度婚すれば鍋一個再婚あれば二個等其婚數に應じて鍋數を戴き神幸に列する古例ありしも今は唯祭日に八人の少女の紙製の鍋を戴き渡御に隨ふある而已古來筑摩の鍋祭と稱し歌人俳士に詠唱せられて有名なるは即ち之あり

近江なる筑摩の祭とくせなん　業平
つれなき人の鍋のかぢみん
おぼつかな筑摩の神の爲ならば　顯綱
いくつか鍋のかぢはいるべき

息長宿禰墓

日撫村大字顏戸にあり宿禰は大筒木眞若王三世孫にして葛城高額姫を妻とし中に氣長足姫生れさせ玉へりこの足姫尊とは後年三韓を征討して武名を海外に輝やかし玉へる神功皇后なり

因に息長宿禰墓舊記により顏戸にありと記し置けども一說に息長村大字能登瀨山津照神社境內にありとも云ふ或は此方信

あるべし又墓の此地にあるは息長氏の領地にして茲に居住薨死せられしなるべし

後鳥羽上皇舊蹟

西黑田村大字名越に在り上皇常に政權の武門に入りて朝威の衰替するを慨かせ玉ひ之を回復せんとの御志あり時に比叡山寶憧院に阿闍梨禪行と云ふ者あり學德兼備常に王風の式微を嘆し屢々宮庭に入りて上皇の密議に參與しつゝありしが後幕府の嫌疑を避けて名越村に來り名越寺に幽棲す正治元年三月四日上皇密に此地に御幸ありて禪行を召して之に寶刀一口及び菅丞相手寫法華經八軸を下賜せられ且つ勅して北條氏討滅の大秘法を修せしめ給ひ御親から玉體を御祓川に漱ぎて天地の神祇に祈誓し玉ふ此時に當り幕府の專横益々熾なり上皇逆鱗遂に討幕を決意し明年（承久元年）四月再び名越寺に御幸し禪行に密勅して勤王の士を募集せしめ玉ひ且つ刀鍛冶片山左近外七十五名を召されて之に刀劍を鑄さしめ玉ふ既にして幕吏其蹤跡を探るに及び遂に京師に還幸し玉へり而して承久三年遂に討幕の兵を擧げさせ玉ひしも不幸敗軍し後上皇父子共に隱岐に還幸し玉ふ之を承久の亂と云ふ禪行之を聞くや痛恨病を發し遂に逝去す後年北條氏亡ぶや朝廷禪行の誠忠を追賞して大和尙を贈られたり今上皇の此地に於ける御製二三首を掲くべし

近江なる筑摩の森の呼子鳥
君よびかへせ小夜ふけぬまに
筑摩江や磯のもはやし過ぎゆけは
名越の森や遠くなるらん

名超寺

惠光山常喜院と號す白鳳年間三修沙門の創立にして往時は七堂伽藍ありて廣大なる寺院なりしも元龜の亂織田氏の兵火に罹りて燒盡し今一小堂を存するのみ而して當寺は正治、承久年間後鳥羽上皇の屢々御幸ありし所にして其行在所を圓光院と云ふ後村上天皇正平六年勅願所となり後光嚴院より制禁の札を下付せらる堂前に溪流あり御祓川と云ふ之れ上皇の冠帶を解き玉體を漱ぎて以て天地に祈誓し給ひし舊跡あり

後鳥羽神社

名超寺の傍にあり後鳥羽上皇名超寺に御幸の砌り御親から玉體を刻して之を禪行に下賜し玉ふ應永二十四年後小松天皇勅して殿宇を建立し御像を安置して御鳥羽殿と稱し下坂七郷の地三千石を祀田となし玉ふ然るに元龜年間織田淺井氏の兵燹に罹りて堂宇燒失し其祀田をも沒收せられたりしも御像は幸ひ無事なりしを以て豊臣氏其靈跡の復舊を謀りて殿宇を建立したるも德川氏に至り再び沒收せられ爾來漸次衰頹しつゝありしが明治十一年　今上天皇陛下北陸近畿御巡幸の砌り大津行宮に於て御像を叡覽あり後鳥羽神社の號を賜はりしを以て新に社殿を建立して之を奉祀す明治二十三年　今上天皇陛下御宸筆の神額及び保存資金若干を下賜せられたり

德勝寺

六莊村大字平方にありもと東淺井郡山田村にありて興福山醫王寺と稱したるを永正中淺井亮政命じて之を小谷山下に移さしむ後年亮政歿するや遺骸を當寺に葬り德勝寺救外宗護大居

士と號す以來其諡號を採りて德勝寺と改む後年羽柴秀吉長濱に城居するに及び之に寺領三十石を賜ふ後小谷廢城后長濱城内に移せしむ后内藤信成命じて田町に移さしめ后井伊氏亦今の地に移したり

後鳥羽神社碑

凡事有害於一身而利於天下。敗於當日而成於後世者。匹夫冒難。爲天下後世建大計。功雖未成。百世廟食。況萬乘之尊。欲除權姦。播越流離。甘爲海島鬼。若 後鳥羽上皇。凡居王土爲王民者。孰不悲其志仰其靈乎。淡海阪田郡名超邨有 上皇駐蹕遺跡焉。其安 御像處曰名超寺。修法處曰御御祓川。泛船處曰天川。 手植樹木曰後鳥羽梅。曰後鳥羽杉。而新莊下阪諸神岡千々松原等處。並有 御製題詠。具載永錄三年日吉社司祝部希時所撰歌集。據土人所傳。昔者 上皇與 順德帝。同謀討鎌倉幕府。時比叡山寶憧院有阿闍梨禪行者。學德兼備。居常歎王風式微。屢召之內道場。託修法以參密議而禪行避嫌。寄跡名超寺。正治元年 上皇微行訪之。賜寶刀一口及菅丞相手寫法華經八軸。以祈 王室隆興。承久元年府帥源實朝薨。陪臣北條義時。迎立幼主。獨專國命。 上皇益憤之。明年復 幸名超寺。密 勅禪行募兵。因手刻 御像以賜之。又明年六師東征。不克。賊軍犯 闕。 上皇父子蒙塵海島。於是禪行痛恨病歿。及北條氏亡。 朝廷追賞其忠。贈大和尙應永二十四年 勅造一宇。安 上皇御像。曰御鳥羽殿。賜。綸旨寄本郡下阪七鄕地三千石爲祀田。後百五十載。織田信長興淺井長政搆兵。以寺僧助敵。放火燒堂宇。沒收其地。信長亡。羽柴秀吉領茲土。重建復舊觀。劃境內四十八町地租。授祀田六段二畝。 今上即位之十一年冬。 車駕巡狩。有 旨致 御像於大津行宮。是年土人相議。創祠宇於名超寺南以祀之。稱後鳥羽神社。今茲丙戌秋。樹碑表之。滋賀縣知事中井君嘉尙。嘱剛撰文。或有以其所傳與舊史不合致疑者。剛謂不必疑也。賴子不言乎。承久之事舊史曲筆可疑。夫舊史果可疑則安知非其不合者之反得其實乎。蓋 上皇英明講武藝。造刀劍。置西面武士。其謀東征。非一朝一夕。乃曰用發妻讒口。殊爲誣妄。然則召禪行參密議。募兵京畿。與 元弘帝召僧文觀圓觀等爲無禮講相類。其事不可謂必無也。抑鎌倉以還。武臣專制。六百餘載。 今上中興。始復王權。而推所由來。上皇父子實啓其端。先是佐州人建碑。表 順德帝遺跡。剛爲之銘。而今淡海人又有此擧。皆能抑體 聖主紹述祖業之叡旨嗚呼其可尙也已。銘曰。

昔今喪亂。冠履倒顚。今兮中興。日月高懸。沿流溯源。孰啓厥先。有儼 御像。德不可諼。瞻彼北海。怒濤捲天。顧此太湖。琉璃滉然。神歸來兮。爰築祠壇。神歸來兮。爰薦蘋蘩。勤王義故。苗裔尙存。討賊方略。口碑是傳。代口以石。垂美萬年。神歸來兮。永護斯民。

明治丙戌十月　　從五位勳六等　川田剛謹撰

●國友鐵砲

天文十二年八月葡萄牙商船大隅國種子島に來るや船長鐵砲及火藥を携ふ將軍足利義輝乃ち國友の地を給し茲に於て鐵砲鑄造及射擊の方法を敎へしむ之より鐵砲を製する者多くあり遂にこの地の一名產となる之を國友鐵砲の始とす

●宮川陣屋舊址

神照村大字國友にあり元錄十一年堀田豐前守正休始めて此地に封せられ祿一万石を賜ひしが三世正陳に至りて更に三千石を加封せられ八世正養に至りて藩籍を奉還せり

●長濱町

古くは今濱と云ふ羽柴秀吉茲に城居して之を長濱と改稱し小谷城下より多く民家を移して市街とおす（今伊部町、郡上町と名づくる所ゐるは即之が爲めあり）爾來漸次繁盛に赴むき今や北國街道の要衝に當りて又湖北の良港として船舶常に出入往來せり而して町數二十九、戶數二千三百、人口一万一千六百餘あり

●八幡神社

長濱町大字神前にあり應神天皇、仲哀天皇、神功皇后の三神を祭祀す延久元年源義家の建立にして後三條天皇の勅願所あり而して往古は坂田八幡宮又は新放生寺と稱し浮屠氏別當職とおり祭祀を掌りしを以て僧坊頗る多く其數三百餘宇に上りしと云ふ而して京極淺井二氏累代當社を崇敬し銘刀數多の奉獻あり又足利將軍義敎も社殿を修補し太刀神馬等の奉納ありて湖北第一の大社おりしが元龜二年姉川の役東軍數多來陣し所々に放火せるを以て殿宇悉く烏有に歸し爾來大に衰頽を極めしも後年淺井氏亡び羽柴秀吉長濱に城居するに至り大に當社の荒廢せるを惜しみ新に社殿を建立し諸稅を免じ境內亂入禁止の制札を建つ是より稍々舊觀に復するに至れり而して例祭は每年十月十五日に行ふ此日は町民より山車十二基を出し壯觀美麗湖北第一の祭と稱せらる

羽柴秀吉當社を崇敬し屢々寮して僧坊妙覺院に憩ふ園中に靈泉あり麻衣の井と云ふ此水を汲で每日點茶の用に供す秀吉之を汲月亭と名づけ侍臣曾呂利新左衛門に命じて庭園を造らしむ而して園中恩知紅梅、不動岩、姥が石等あるは皆之れ淺井氏の小谷城中より移せしものありと云ふ

●長濱城址

湖岸にあり今菜園とおる永正八年三月京極氏の臣上阪景重茲に城を築きて今濱城と名づけ一子泰舜に讓りて老す同十三年八月淺井亮政來り攻めて之を陷る泰舜再び廢城を修補して淺井氏に抗す十四年亮政再び來襲す泰舜力屈して觀音寺城に逃る後年淺井氏亡ぶに及で織田信長其臣羽柴秀吉を茲に封じ十八万石を與ふ天正八年秀吉西征の將とおり妻絮を茲に留めては十年明智の亂淺井の舊將閑阿長之當城を攻む妻絮乃ち難を東淺井郡草野谷に避く柴田勝家之を聞き越前より來りて長濱を略有し義子勝豊をして之を守らしむ慶長十一年德川氏其臣內藤信成を茲に封じて祿五万石を賜ふ寛永五年信成奥州棚倉に移封后に遂に廢城とおる

東淺井郡

東發美濃國南は阪田郡北は伊香郡に境し西は湖に臨む東西五里二十二町南北四里壹町面積拾三方里五〇あり又郡を區畫して十二ヶ村二十七大字とし戶數八千六百二十九、人口四萬一千八百十六あり

●上草野村

郡の東方美濃國界に近き山間の地あり往古草野莊司定康と云

へる人此地の領主たりしが平治元年源義朝京師に敗軍し子頼朝と共に東奔の途次此の谷に來る定康之を憐れみ乃ち父子を野瀬山中の大吉寺に隠して守護す平氏の兵追跡し來り火を放ちて坊舍を燒く是に於て頼朝亦逃れて岡谷に到る時に堤莊司と云へる人あり頼朝を馬桶の中に隠くし其上に登りて桶を造る平氏の兵亦來りて之を探索すれども遂に知れざして去る後年頼朝天下を統一するに及で此地を莊司に賜ひて堤谷と稱す尚定康にも草野莊を賜ひ大吉寺を再建して寺領二百貫を附し以て昔日の受恩に報ぜと云ふ

天正十年明智の亂羽柴秀吉西國にあり長濱城中には母及び妻孥を留む時に阿閉長之攻め來る妻孥等乃ち逃れて難を此地に避く

慶長五年關が原の役石田三成敗軍して此地に隠れ遂に領主田中吉政に捕へられ後六條河原に斬首せらる

● 豐菊墓

七尾村大字今庄にあり豐菊は福永豐重の女にして後鳥羽上皇の侍姫なり承久の亂上皇隠岐に還幸し玉ひしより故郷に歸り悲痛の餘り遂に身を池中に投じて死す名超寺の禪行之を憐み塚を茲に築き法名を勸皇院空月淑忍信女と號す

● 小谷山城址

小谷山にあり永正十三年九月淺井亮政の築く所にして淺井氏累代の居城なりしが天正元年八月織田信長に攻陷せられて遂に廢城となる

淺井氏は三條大納言公綱に出づ公綱寶德二年の春勅勘を蒙り當村大字丁野に遷さる時に公綱一婦人を娶とあし一男子を生まし而して其子三才の時公綱赦免に遇ふて京師に歸へれり後年母其子を伴ひ上洛したるも公綱既に薨去後なりしかば再び故郷に還へりて其子を養育すかくて其子十一才の時領主京極高清の遊獵するに遇ひ馬前に出で已が由緒を語りて奉公せんことを願ひしかば高清之を諾し伴ひ歸りて侍臣とあし郡名に因て淺井氏と稱し新二郎藤原重政と名づけらる是れ淺井氏六代中の初代なり

● 竹生島

竹生村大字早崎を距ること一里餘にあり東西四町十間南北八町五十間周圍二十二町あり而して島上樹木鬱生し水涯岩石削立して唯東方に一の船泊所あるのみ傳へ云ふ景行天皇十三年八月二十四日一夜に現出し二岐の竹茲に生せしを以て竹生島と名づくと（この竹現存して寶嚴寺什物たり）湖中第一の勝景の地なり

都久夫須麻神社

島中に鎮座す延喜式内の一社にして宇賀御魂神を祭る傳へ云ふ天平三年竹生島神靈内裏に顯はる聖武天皇乃ち行基と共にこの島に行幸し玉ひ辨才天女を祭祀し伽藍坊舍四十九院を建立し千手觀音を安置し玉ふと又云ふ承和元年慈覺大師久しく眼病を疾みて癒へざ一夜天女出現し靈藥を授け玉ふと夢みれば眼疾頓に平癒せり大師覺めて堺上を見れば天女の尊像忽然として顯はる大師乃ち其尊像を當島に納む今本尊と稱する所即ち之なりと古來相州江の島、藝州嚴島と共に日本三辨天の一に數へらる昔し都良香當島に遊び三千世界眼前盡くの句を安じ其對句を案じければ明神内より十二因緣心裡空と吟じ給へりと又松室仲算景色を賞美しつゝ

神とある誓のうみの廣ければ
深くぞたのむ沖つ島姫

と詠みければ明神又御殿の中より

春の日の波間にしろき朝はらけ
漕ぎゆく舟や月にのるらん

と詠じ給ひけるとあん又祠殿は慶長八年豐臣秀頼が舊伏見桃山城の日暮御殿を移築修補せる者にして結構壯麗なり

寶嚴寺

天平三年僧行基の草創にして西國三十三所の一なり當寺頗る什寶に富み中に國寶とあれる者數点あり

めにたてゝ誰かみざらん竹生島
波にうつろふあけの玉垣　隆祐

● 仲算琵琶物語

昔し松室の仲算上人に容貌うるはしき一人の童子ありしがふと其容を失ひしまゝ久しく見えざりけり或時上人の從僕山に入り薪をとりつゝありしに梢上に方り讀經の聲聞へしより不思議に思ひ仰ぎ見れば昔て上人に仕へし童子なりければ僕大に驚き歸へりて之を師に告ぐ上人乃ち其所に到り對面せしかば童子の曰く我は既に仙人となれり而して毎年三月十八日竹生島に神仙の會合あればそれに携へたきより師の琵琶を借し給へかしと云ふ上人乃ち持てる琵琶を其樹梢にかけて戻りけり翌年三月十八日仲算舟にて竹生島を巡るに虛空遙に琵琶の音聞こへしが暫くして忽然として船中に落つる者あり之を見れば昔て童子に與へし琵琶なりけり仲算感嘆して止まざ乃ち之を竹生島社内に奉納す

嘉永四年四月平經正北國へ下向の途當島に詣しこの琵琶を借り上玄石上の秘曲を彈奏しければ明神白龍となりて顯はれしこと源平盛衰記、平家物語等に見えたり

● 姉川

源を美濃國界に發し坂田郡に入りて七尾山を廻り再び來りて草野川、田川、高時川と合して湖に入る流域十三里十五町江北第一の大川にして又有名なる古戰場なり

久矣干戈事已休。風烟慘淡滿州秋。両軍吃吃留餘怒。
日夜奔端嚙石流。　成島柳北

● 姉川戰

元龜元年四月織田信長越前に入りて朝倉義景を討たんとするや淺井長政、義景と通じて其歸路を絶す信長利あらざして京師に退く六月信長軍を率ゐて淺井郡に來り小谷城を攻めんとす長政是に於て急を朝倉義景に告ぐ義景乃ち族景連に命じて之に應援せしむ是に於て長政は野村に景連は三田村に陣し而して信長、家康は姉川の南岸に陣し六月二十八日両軍川を隔て、大に戰ふ信長、家康をして景連に當らしめ自ら長政と對戰す長政の兵善く戰ひ暫時に信長の前軍を破り進んで其中堅を衝く時に家康既に景連の軍を破りしより是に於て長政を横擊す長政の軍忽ち破れ次て全軍潰散す長政乃ち小谷に退き景連亦逃れて越前に歸へりたり

● 玉泉寺

虎姫村大字三川にあり榮光山と號す之れ元三大師（慈恵大師）

誕生地あり師は延喜十三年此地に生れ十二才にして比叡山に上り理仙に就きて修學す一日母の病を養はんが爲め歸鄉し再び山に歸らんとす母別れを惜しみ之を遣らざりしかば師自ら我像を彫刻して之を遣せしに發する時彼の像無言のまゝ村外まで送り來る故に其處を駒乞橋と云ふ而して該佛像は無言の大師と稱し現に當寺の本尊たり而して大師天元四年大僧正となり永觀三年寂す年七十四慈惠と諡し土俗元三大師と云ふ而して當寺往古は宏壯なる寺院ありしも織田氏の兵火に灰燼となりしより後田中吉政之を再建す境内に大師誕産水及大師母の墓と稱するものあり

● 伊香郡

國の北端に位し東は美濃國南は東淺井郡に境し北は越前國西は高島郡及び湖水に面す東西五里三十町、南北六里三十四町面積二十三方里二〇而して十三ヶ村、九十五大字ありて戸數七千二百八、人口三万四千六百九十あり

● 木之本

北國街道と北國脇往還との分岐点にあり郡中一の名邑にして又諸官衙の所在地たり此地古來夏秋両度に牛馬の市を開く往古は頗る繁盛ありしも維新以后甚だ衰微せりされと今猶年々牛馬一千數百頭代價數万圓の買買ありと云ふ

● 淨信寺

木之本にあり世に木之本の地藏と稱して有名なるは是なり此地藏は南天笠龍樹菩薩の作にして天武天皇の代難波の浦に漂着したるを帝藥師寺の僧祚蓮に勅して之を揚げしめ其處に一寺を建立して安置し唐隔山金光善寺と名づけ玉ふ然るに祚蓮以爲ら〳〵無緣の有情を度せんと欲せば佛法疎遠の地を撰みて安置するにしかゝと之より諸國を偏歴し一年北陸道に赴むき此地に來るに及び其勝地たることを知り之を奏問す帝之を許させ給ふ祚蓮乃ち寺地を開き伽藍建立して茲に移す實に白鳳三年七月十九日なり時に堂前に大柳あり高數十丈故に寺號を柳本山と改め地を木之本と名づ〳〵弘仁三年僧空海茲に賽して靈像の破損せるを修補し地藏經三卷を書寫して之を納む寛永年中大旱、洪水交々至り五穀不熟萬民困苦す菅原道眞乃ち宇多天皇の勅を奉じ當寺に詣して天下太平風雨順時を祈るに靈驗誠に顯著なりき帝是に於て寺號を長祈山淨信寺と號し玉ふ今稱する所即ち之なり

● 餘吳湖

賤ヶ嶽の北麓餘吳村の西方にあり東西九町南北十七町周圍一里二十八町而して其水流れて柳瀬川と合し其より餘吾川となりて東淺井郡に入る因に餘吳とは大湖の傍にある小湖なるを以て餘湖と名づけしなりと

さえまさる伊吹が嶽の山風に　　俊　賴
氷はてたる余吾の内海

鴉てるや余吾の入江に波はれて　　如願法師
月より上に松風ぞふく

● 賤ヶ嶽

余吳湖の南方に連亘する山にして直立一千四百尺登路八町餘あり今山名の起因として傳ふる所によれば往古僧空海水之本淨信寺に詣でしに夢に尊像空海に告げて曰く堂前の湖中に惡龍棲み時々山に登りて人を害す汝宜しく之を退治すべしと空海乃ち自作の寶劍を以て山に到るに一童女あり言んと欲するもの〻如し空海怪しみ問ふて曰く汝何物ぞと童女曰く賤は此地の主なり師我を責むること何ぞ甚しきやと空海曰くこの地は地藏尊像の靈地なるに汝妄りに之が參詣の者を妨ぐ其罪甚重し故に我今汝を退治せんが爲に來れりと乃ち山を穿ち湖を埋づめけれは惡龍忽ち降伏せり而して童女賤はと云へるにより此の山を賤が嶽と命名し其埋づめたる所を堀切と稱すとこの山一小丘に過きざれと雖も古戰場を以て史上甚有名なり

成島柳北

岳頂猶見雲陣焦。北兵曾此列長蛇。猴郎畢竟非人力。
容易揮才戮夜叉。

● 賤ヶ嶽戰

天正十一年四月柴田勝家越前北庄にありて織田信孝、瀧川一益等と志を合し羽柴秀吉を圖らんと欲し兵を率ゐて柳瀬に到り先鋒佐久間盛政をして急に中川清秀の壘を攻めしむ清秀乃ち出てて戰ひ遂に敗死す時に秀吉岐阜にあり報を聞きて急に軍を返へし炬火を點じて賤ヶ岳に赴く

盛政一度勝ちて備を怠り勝家召還するも之に應せゞ既にして日暮れ盛政南方を望めば濃路の諸山炬火多し盛政思へらく之れ秀吉の大軍來るならんと大に驚き暗に乘じて逃れ去らんとす時に金瓢馬標既に岳南にあり銃丸亂發す加藤清正、福島正則、加藤嘉明、平野長泰、脇坂安治、糟谷武則、片桐且元の七士長鎗を揮ふて奮擊す（世に之を七本鎗と云ふ）北軍之に於て全敗し盛政逃れて北庄に至り後加賀に赴かんと欲して捕へられ勝家亦自ら城を燒き割腹して死す

賤嶽戰址碑

英雄之愼軍機。驕將誤大事。天下古今無不皆然矣。天正十一年賤岳之役。羽柴秀吉與柴田勝家相對壘。互持重。不敢妄動兵。既而柴田氏之將。佐久間盛政率輕兵。襲中川清秀大岩山之壘。清秀敗死。於是乎盛政恃勝。志驕。勝家懼焉。急命旋軍使者頂背相望。盛政不以爲意。時秀吉在美濃。聞報大奔。急回軍。一戰敗之。長驅陷北庄。柴田氏滅焉。此役也。秀吉麾下壯士加藤某等七人。揮槍奮前。所向無敵。世稱之賤岳七槍。夫秀吉智謀勇略。固非勝家之所能頡頏也。雖然勝家亦知兵者矣。勝家之所以大懼也。嗚呼英雄一其揆。何其神也當時設使盛政從勝家言收軍乎。柴田氏之滅。未必如此速也。盛政匹夫勇。狎小捷。誤大事如此。甚夫。軍機之不可不愼。驕志之不可不警也。明治七年十月。余按部登賤岳。偶携國史與飄酒。乃引杯繙卷。考両軍勝負之跡。金瓢馬表歴々在目睫之間。壯哉羽柴氏之雄畧。赫々與湖岳千歲並存矣。頃飯浦大音川並村民。謀建賤岳戰趾碑。來請記余。因記其事跡梗概。併及千昔日登嶽事如此。

明治十一年十一月十日　　滋賀縣令　籠手田安定　撰

● 中川清秀墓

大岩山（賤岳の東）にあり清秀は字を瀨兵衛と云ふ常陸の人秩夫清國の子にして中川左衛門の女婿なり始め荒木村重に隨ひ織田信長に屬し殊功を以て攝津茨木城主十二萬石となる賤

嶽の役大岩山の驛舍を守り佐久間盛政の襲ふところとなり清秀苦戰奮鬪して遂に死す年四十二天和二年其五世の孫中川久恒茲に碑を建て淨信寺の僧文を撰す

菅山寺

余吳村大字坂口の奥山中にあり傳へ云ふ孝德天皇の代當山の嶺上より輝々として光を發する由叡聞に達しければ天皇乃ち勅使をして之を尋ねさせ給ふ勅使來りて山に到れば兩童忽然として顯はれ是に謂て曰く當山は之れ佛法興隆の地なり若し茲に精舍を建立せば玉体安穩ならんと勅使歸りて之を奏上しければ帝叡感の餘り乃ち精舍建立の御願を立て玉ふ降りて四十六代孝鎌天皇の代照擅上人勅を承け天平寶字八年之を草創す本尊は孝德天皇の代薩摩の國に漂着したる天竺毘首羯麻作の靈像にして上人靈夢により茲に安置したるものなりと寛平元年菅原道眞勅使となりて登山し數多の佛堂を修補せらる此時西麓に樓門を建て自筆の額を掲げると龍頭山大箕寺と稱したるを改めて大箕山菅山寺と號せらる龜山帝の代惠曉上人入唐し翌建治元年宋朝より大藏經五千餘卷を齎らす今尚經藏にありと云ふ

羽衣物語

昔し川並の鄕長に桐畑太夫と云へる人あり一日舟を湖上に浮べて遊ぶ時に空中に輕羅の如きものあり太夫珍らしき物哉と乃ち之を取り懷中にして還へらんとす時に一人の天女忽然として現はれ太夫に謂て曰く妾今日こゝに降りて水浴しつゝある間にいつしか衣を失ふ今卿の懷中し給ふは即ち妾の羽衣なり之れ無くば天に歸ることを得ぜ願くば之を返へし給へと太夫諾かぜ是に於て天女あく〳〵太夫に隨ひ其家に至りて遂に娉妻となる居ること一年一男子を產む一日天女太夫に謂て曰く久しく妾の羽衣を藏す或は蠹損あらんかと乃ち箱を開きて之を衣桁にかく時に愛童走り來りて之を被らんとす太夫之を見るや其童子を伴ひ戶外に至る其間に天女彼の羽衣を被り虛空遙に飛び去れり而してこの幼子成長して年十一の時菅山寺に至りて遊ぶ時に菅原是善公當寺に詣しこの童子の容貌非凡なるを見乞ふて養子とす之れ即ち道眞なりと而して菅山寺は道眞幼時修業の地なるを以て菅字を冠し又天滿神社は道眞自ら等身の像を作り此山に鎭座して寺門の繁榮を祈られけるなりと右の信否は今更論ぜるに足らぜこゝには唯趣味ある傳說として掲ぐるのみ

毛受勝助墓

片岡村大字池原にあり勝助は尾張國春井郡稻葉村の人にして柴田勝家の臣なり天正十一年賤ヶ岳の役北軍大に敗れ士卒皆遁走するや勝助窃かに其主勝家を北庄に逃れしめ自ら勝家の具足を着し金弊の馬標を立て大呼して曰く我は柴田修理進勝家なりと時に東軍より島左近出で勝助を捕へんとす勝助乃ち之と奮鬪して遂に戰死す時に年二十九後羽柴秀吉其首級を實檢して勝助の忠節に感嘆しけると云ふ

鹽津濱

鹽津村大字鹽津濱は郡の名邑にして又湖北の良港なり毎日大津より定期行航船ありて港内頗る繁盛なり

夜をかさね鹽津菅原雪つもり　家隆

山こす駒のあとやたえぬる

去りぬらん往來にあらす鹽津山　紫式部

世にふる道はからきものそと

大浦

永原村の一大字にして昔は遠津濱又は遠津大浦と云ふ古歌の名所なり

忘るゝ遠津のはまの岩つゞじ　家隆

山をこえても又歸へりこん

霞ふる遠津大浦による波の　人丸

よしもよしともにくからぬ〳〵に

菅浦、月出崎

菅浦は大浦の南にあり又其南方突出せる所を月出崎、又は葛龜尾崎とも云ふ昔し奈良の人此地にて鐘を鑄坂を引上ぐる時月出てたるを以て名づくとこゝ前面竹生島を望み風色頗る宜し

心にぞ猶ひかれぬれ朝ぼらけ　爲尹

行くてに見ゆる鹽津菅浦

はる〳〵と曇りなき世を歌ふなり　清輔

月出が崎のあまのつり舟

高島郡

北は若狹越前國に境し西は山城丹波國に接し南は滋賀郡東は湖に臨む東西七里七町、南北七里六町、面積四十一方里七五而して郡内を分ちて一町十六ヶ村百十大字とし戶數一万一人口五万二千四百七十八を有し縣下第一の大郡なり

海津

古くは貝津又は粥津に作れり越前街道の要路に當り又大溝今津に次ぐ湖北の良港として船舶常に出入せり

あらち山雪げのそらにあるまゝに　仲實

海津の里にみぞれふりつゝ

強力兼女

兼は海津の遊女なり一年東國の武士上洛の途次此地に宿し馬を湖中に入れて冷しつゝありしに馬俄に逸走せり衆人之を見るも一人の之を留むる者なし時に兼女之に行き遇ひしが毫も驚きたる色なく高き足駄を穿ちたるまゝ走り來れる馬の差し繩の一端を踏み押へければ馬直に止りけり之を見物する人何れも舌を卷きて驚嘆せざる者なし而して其穿ちたる足駄深く砂中に入りて足指を沒せりと又或人あり兼に隻手を出さしめ指毎に弓を張らせしに能く五張を一度に張りたりと指力すらすらの如し全身の力量如何許あらんと見る人聞く人何れもおそれざるは無かりしと云ふ

光孝天皇の代膂力の士佐伯氏長と云へる人あり一年相撲の節に召されて越前より上洛する時高島郡石橋（安曇村内）を過ぎて強力の女に出遇ひ其家に伴はれて角力の法を敎へられしと云ふはこの兼女のことなるべし

酒波寺

川上村大字酒波にあり天平十三年僧行基の開基にして後冷泉天皇再興し玉ひ康和三年堀川天皇又勅して修補せしめ玉ふ弘治二年淺井長政堂宇のいたく荒廢せるを慨き磯野員昌

をして修繕せしめ寺領千八百石を附したりしが後年織田信長此地を領するに及で悉く之を沒收せり爾來遂日頹破に赴むきつゝありしを元和年中佐久間大膳之を惜しみ燈明料三十石を附したり

今津町

西近江路と若狹街道との分るゝ所にあり郡の名邑湖西の要港として繁盛ある所あり

朽木城址

朽木村大字市場にあり之れ朽木氏累代の居住地あり朽木氏は宇多天皇の後裔佐々木氏の庶流にして信綱の二子高信始て朽木莊に住し之より氏とす

周林院

朽木村大字岩神にあり朽木氏の創立あり享錄元年足利義晴京師の亂を避けて朽木に來り當院に寓居し滯留五年を經て歸京あり又朽木氏の夫人（京極氏の女にして豐臣秀吉の妾松の丸の妹）卒後茲に葬り周林院と謚す

彦主人王墓

安曇村大字田中にあり王は宇非王の御子あり武烈天皇の世三尾に別業を造り越前坂中井の振姫を召し納れて妃とあし允恭天皇三十九年に彦人王、彦杵王、彦太王の三氏を生ませられ後年此地に葬し給ふ墓は近年發見したるものあり

繼體天皇舊蹟

天皇は彦主人王の御子にして御名を男大迹王又彦太王と申す允恭天皇三十九年三尾別業に降誕あらせらる天皇御幼年にして父王薨じ玉ひければ御母振姫天皇を伴ひ越前高向に歸り之を養育し玉ふ後年武烈天皇崩御して繼嗣あし因て大連大伴金村群臣と議して天皇を越前に迎へ奉り立てゝ人主とす之を繼體天皇とす因に記す天皇と共に御降誕あらせられたる彦杵王は天皇と共に母に隨ひ越前に歸り給ひしも彦人王のみは長く此地に留まり父母の靈を祭りて三重世神社と稱せらる之れ三子安產の故を以て名づけ給ひしありと

万木（ユルギ）森

安曇村大字西万木邊は上古大森林ありし舊跡にして北万木と稱するは幾万本とも知れざる樹木の叢生せる意あり又この森を一名鷺の森と云へるは森中鷺等多く棲息したるを以てあり

高島やゆるぎの森の鷺すらも　獨りはねじとあらそふものを　讀人不知

雪ふればゆるぎの森の枝毎に　夜ひる鷺のねるかとぞ見る　好忠

安曇川

源を若狹國界と滋賀郡とに發し阿弥陀山の北麓を流れて南船木より湖に入る流域十一里餘川幅二三百間ありて湖西第一の大川あり而して此川古くは阿渡とも又吾迹とも書き往古加茂神社供御の鯉は皆此川より漁して奉りしと云ふ

高島やあど川柳風ふけば　順德院

ぬれぬ雫にかゝる白波

筏おろす安曇の早川せきとめて　好忠

暮れゆく秋をしばしとゞめん

禪智院

高島村大字拜戸にあり伏見姫宮龍溪禪尼の開基にして第四世迄は代々伏見殿の姫宮住職せられしが第五世に至り光運禪尼（久我内大臣女）第六世は仰常禪尼（轉法輪左大臣女）第七世は伏見邦永親王の姫宮等代々高貴の尼宮住職とあられしより世に高島の尼御所と云へり

大溝町

古くは石垣村と云ひ城下とありて大溝と稱す現に郡の名邑として商業やゝ繁盛ある地あり

大溝城址

分部氏累代の居城あり氏は伊勢の人にして分部光喜の養嗣子光信と云へる人元和五年八月始めて大溝城に封せられ祿二万石を食む爾來連綿として襲職し十一世光貞に至り藩籍を奉還す此間年を經ること實に二百五十有一年あり

近藤重藏墓

大溝町瑞雪院にあり重藏名は守重と云ふ幕府の臣あり寛政十年魯人北海に冠するや勘定奉行中川飛彈守守重の用ゆべきを知り之を拔擢して遣露大使に隨行せしむ守重乃ち擇捉に渡り魯人の建てし標榜及十字架を撤去し我標榜を建てゝ還へれり守重之より專ら意を邊疆に盡し屢々北境經營策を上れり文政六年官を辭して地を江戸下澁谷に購ひ茲に住居す九年六月男富藏の隣人某と爭論あし其數人を殺せる罪に座し捕はれて分部光寧の邸に預けらる光寧守重の學に感じ翌年已が領地大溝に歸るに際し伴ひ來りて常に學を子弟に授けしむ居ること二年餘十二年六月十六日守重終に病で歿す年五十九光寧甚しく之を惜しみて遺骸を已が菩提所瑞雪院に葬り碑を江戸駒込西善寺に建つ

勝野原

大溝町大字勝野の邊を云ふ又湖邊を香取浦と云ふ共に古歌の名所あり

高島やかちのゝ原にゆきくれて　やどりとるべき方だにもなし　爲尹

降りつもり勝野の原の雪の上を　分くる朝げの袖のさむけさ　隆祐

三尾山

水尾村邊の山の總名にして湖邊を三尾ヶ崎又三尾の浦とも云ふ之亦古歌の名所にして又藤原仲磨呂戰歿の舊跡あり

五月雨にあは川音も高島や　三尾の柚山ゆきぞかゝれる　頓阿

さゝあみや小松に立ちて見渡せば　三尾のみさきに鶴むれてゆく　仲實

藤原仲磨呂の亂

仲磨呂は孝鎌天皇（女帝）の亂臣にして姓名を惠美押勝と賜ひ左右に近侍せり後僧道鏡と云へるもの出で上皇の寵を專らにするや仲磨呂意不平あり乃ち兵を擧げて之を除かんと欲す天皇之を聞き目下部子磨呂、佐伯伊多智等を遣して之を討たしめ玉ふ仲磨呂窮に妻子を具して宇治より近江に出奔す子磨

呂等之を聞き田原道より勢多に來り橋を燒きて其東奔を遮る仲麿呂之を見て大に懼き乃ち高島郡に來り前少領角家足が家に入り道祖王の兄鹽燒王を立てゝ新帝と稱し精兵數千を率ゐて美濃愛發關に至らんとし湖上を渡るに偶々颶風起りて舟を三尾崎に返へす官軍乃ち之を迎へ討ち大に其の軍を破る仲麿呂敗れて舟に乘り逃走せんとするを官軍の將石村石楯之を捕へて其首を斬る其他妻子從卒三十餘人皆湖濱に刑せらる實に天平寶字八年九月なり

● 藤樹書院

青柳村大字上小川にあり院は方十間木柵を以て四方を繞らし門前に藤樹書院遺跡の石標を建つ而して庭隅には先生遺愛の老藤樹依然として現存す而して舊堂は明治十三年火災に罹りて燒失せるを以て翌年舊形を摸して新築したるもの即ち之なり室內靈殿には藤樹先生神位の六字の靈牌を安置し楣間に藤原忠良公筆德本堂の額を掲ぐ尙別室に遺墨を展觀す中に先生自筆の「致良知」の書及藤樹、蕃山、岡山三氏の和歌の軸物等あり其他遺物としては先生の着用せられし野袴、社杯、其他衣類及笹竹、暖籠等甚多し

江西書院開名久。五十年前訓義方。今年始來絃誦地。
紫藤影掩舊茅堂。

伊藤東涯

● 中江藤樹墓

同村玉林寺にあり藤樹名は原字は惟命通稱を與右衛門と云ふ父早〳〵沒したれば祖父に從ひ伊豫大洲にあり、一日大學を讀み「自天子以至庶人一是皆修身爲本」との章句に至り嘆悟して曰〳〵幸に古聖の遺經存せり聖人豈學びて至るべからさらんやと是より專ら經書を攻究し聖學を起すを以て自任す後年逃れて此地に歸り酒店を開きて農家に賣り暇あれば村徒を集めて書を講ぜ而して自ら浮文を避け躬行を先にす是に於て四隣皆其德に感化せられざるはなく一時稱して近江聖人と云ふ藤樹慶安元年八月二十五日歿す年四十一

尙境內には先生の外令室別所氏及先生の三男常省先生（彌三郎季重と云ふ）の墓等あり

● 白石島

舟木崎を距ること二里餘湖中に四石峙ち水上を突出すること六七間あり而して全石鳥糞を以て白色となれるが故に俗に沖の白石と云ふ傳說によれば蒲生郡石塔寺の石塔と同じく阿育王の鬼神に命じて散置せしめたる石塔の一なりと云ふ

● 饗庭野

饗庭村の西北に在り東西七十五町南北四十五町近江第一の曠原にして今陸軍演習地たり又其南に泰產寺野あり東西二十四町南北十二町あり

● 特別保護建造物

大津市　園城寺

園城寺大門。新羅善神堂。光淨院客殿。勸學院客殿。園城寺闕伽井屋。經藏。三重塔。金堂。圓滿院宸殿

滋賀郡阪本村　延曆寺

釋迦堂。橫川中堂。大講堂鐘樓。戒壇院堂

同　日吉神社

日吉神社本殿。攝社大神神社本殿。同樹下神社本殿。同宇佐宮本殿。同白山姬神社本殿。同牛尾神社本殿及拜殿。同三宮神社本殿及拜殿

西敎寺客殿

同　西敎寺

小野篁神社本殿　和邇村　小野神社
道風神社本殿　同　道風神社
天皇神社本殿　同　天皇神社
地主神社本殿及拜殿　葛川村　地主神社
和田神社本殿　膳所町　和田神社
仁王門及鐘樓　石山村　石山寺
大野神社樓門　栗太郡金勝村　大野神社
春日神社四脚門　同　春日神社
阿彌陀堂及書院　常盤村　觀音寺
追來神社本殿　大寶村　大寶神社境內
老杉神社本殿　笠縫村　老杉神社
大笠原神社本殿　野洲郡篠原村　大笠原神社
生和神社本殿　祇王村　生和神社
小津神社本殿　小津村　小津神社
御上神社本殿及樓門　三上村　御上神社
常樂寺三重塔　甲賀郡石部町　常樂寺
川枯神社本殿　油日村　川枯神社
油日神社樓門及附屬廻廊　同　油日神社
八阪神社本殿　佐山村　八阪神社
淨嚴院本堂　蒲生郡安土村　淨嚴院
總見寺樓門及塔婆　同　總見寺
桑見寺本堂　同　桑見寺
長命寺本堂　島村　長命寺
苗村神社樓門、西本殿及八幡社本殿　苗村　苗村神社
鎌宮神社本殿　老蘇村　鎌宮神社
鏡神社本殿　鏡山村　鏡神社
石塔寺塔婆　櫻川村　石塔寺
西明寺本堂及塔婆　犬上郡東甲良村　西明寺
寶嚴寺觀音堂附唐門渡廊　東淺井郡竹生村　寶嚴寺

● 國寶

大津市　園城寺

木造千手觀音像。全護法善神像。全智證大師像。全黃不動尊像。全新羅明神像。全吉祥天像。絹本著色黃不動尊像（空海筆）全黃金剛童子像。全尊星王像。全多門天像。全不動明王八大童子像。全八大佛頂曼荼羅圖。全天台大師像。全閻魔天像。全水天像、全涅槃像。全尊曼荼羅圖。全新羅明神像。全不動明王像。全不動明王二童像。全兩界曼荼羅圖。全著色孔雀牡丹畫（應舉）。全雞圖（應舉）。全虛空藏菩薩像。紙本著色園城寺境內古圖。紙本墨書開元寺求得經疏目錄。全福州溫州台州求得律論疏記目錄。全大唐國日本國附法血脈圖記。全彌勒

經疏(圓珍將來)。仝智證大師入唐牒狀。仝天台山國淺寺求法錄(圓珍將來)。仝求法目錄(仝上)。仝感夢記(圓珍筆)。仝緣生論(仝上)。仝圓珍俗姓系圖。銅鐘天平年間銘。

木造十一面觀音像　尾藏寺
猿田彦命像　平野神社
木造阿彌陀如來像　安養寺
木造聖觀音像　乘念寺

滋賀郡石山村　石山寺

絹本著色佛涅槃圖掛幅。仝不動明王二童子像。紙本著色石山寺緣起卷物(隆光及文覺筆)。仝源氏物語(光起筆)紙本墨書越中國官倉納穀交替記念物。仝延曆交替記卷物。仝周防國延喜八年戶籍。仝史記。仝漢書。仝左傳。仝玉編。仝佛說淨業障經(吉備由利筆)。仝說一切有部俱舍論(仙釋筆)。書籍行歷抄丹珍記。紙本墨書建久年中撿田帳。

阪本村　延曆寺

紙本墨書將來目錄卷物(傳敎大師筆)。仝羯磨金剛目錄(同筆)仝墨書天台法華宗年分緣起(最證筆)。六祖惠能傳(同上)。道邃和尚傳道文。華嚴要義問答(行福筆)。最證入唐牒。山門再興文書。木造不動明王二童子像。仝千手觀音像。仝釋迦如來像。仝光定大師像。仝不動明王像。銅像釋伽如來迦。木造大威德明王像。仝金剛夜叉明王像。仝降三世明王像。仝軍荼利夜叉明王像。仝四天王像。絹本著色天台大師像(有贊)。仝天台大師像。唐草蒔繪經箱。

阪本村　西敎寺

絹本著色觀經曼陀羅掛幅(惠心僧都筆)。仝阿彌陀如來。仝釋伽如來像(持鉢釋迦如來)。仝阿彌陀如來像。天台大師像。山王諸神像。紙本著色扇面古寫經。紙本黑書宸翰(後土御門院後柏原院)。木造阿彌陀如來像。仝聖觀音像。仝藥師如來像

下阪本村　來迎寺

絹本著色十界圖板裝(巨勢弘高筆)。仝十二天象板裝(高階兼筆)。釋迦三尊十六善神圖。仝十六羅漢圖。仝阿彌陀三尊廿五菩薩來迎圖。仝十六羅漢圖。釋迦三尊像。仝兩界曼荼羅圖木造釋迦如來像。仝十一面觀世音像。仝地藏菩薩像。仝日光月光佛像。堆朱香盆

坂本村　日吉神社

銅造日吉白山宮神輿額。仝日吉二宮神輿額。仝日吉牛尾宮神輿額

木造十一面觀音像　阪本村　盛安寺
木造阿彌陀如來像　同　村　寶光寺
絹本著色地藏菩薩像　同　村　明德院
絹本著色不動明王二童子像　同　村　大林寺
同　村　安樂律院
絹本著色阿彌陀三尊廿五菩薩來迎圖。千手觀音像
木造慈眼大師像　同　村　惠日院
木造阿彌陀如來像　同　乘實院
木造不動明王像　同　大林院
木造地藏菩薩像　同　妙行院
木造阿彌陀如來像　同　壽童院
木造不動明王二童子像　同　玉林院
絹本著色毘沙門天像。水晶舍利塔　同　寶藏坊
木造地藏菩薩半迦像　下阪本村　眞光寺
木造地藏菩薩像。仝不動明王二童子像　石山村　正法寺

木造天命開別命像。伊賀采女宅子媛像。弘文天皇像。彦座王像。

膳所町　石座神社

木造釋迦如來像　同　羅漢堂
木造阿彌陀如來像　同　清德院
木造地藏菩薩像　仰木村　眞迎寺
木造阿彌陀如來像　雄琴村　福領寺
仝　藥師如來像　仰木村　專念寺
仝　千手觀音像　同　東光寺
仝　聖觀音像　堅田町　滿月寺
仝　阿彌陀如來像　和邇村　西岸寺
伊香立村　新知恩院

絹本著色阿彌陀如來廿五菩薩來迎圖（惠心僧都筆）
木造聖觀音像　同　慈眼庵
仝不動明王像。毘沙門天像　葛川村　明王院
仝國常立尊像。神女神僧形像　仝　地主神社
木造女神像　栗太郡瀨田村　建部神社
仝藥師如來像　大石村　法樂寺
仝彌勒菩薩像　同　若王寺
仝地藏菩薩像　同　正願寺
仝藥師如來像　下田上村　安樂寺
仝帝釋天像　同　正法寺
仝藥師如來像。毘沙門天像　山田村　藥師堂
仝阿彌陀如來兩脇士像　草津町　常善寺
仝阿彌陀如來像　同　光傳寺
仝藥師如來像　金勝村　善勝寺
仝阿彌陀如來像　同　敬恩寺
仝地藏菩薩像　同　山口寺
仝阿彌陀如來像　同　正德寺
仝虛空藏菩薩像。毘沙門天像　同　金勝寺
仝地藏菩薩像　葉山村　地藏堂
仝阿彌陀如來兩脇士像　同　新善光寺
仝藥師如來兩脇士像　治田村　蓮臺寺
仝阿彌陀如來像　仝　淨光寺
仝藥師如來像　仝　安養寺
仝狛大　大寶村　大寶神社
常盤村　觀音寺

絹本著色山王本地佛。黃不動尊。藥師三尊像。十六羅漢像。四大尊像。紙本著色聖德太子像。木造阿彌陀如來像。地尊菩薩像。
木造聖觀音像　同　觀音堂
仝地藏菩薩像　同　蓮海寺
仝藥師如來像　同　寶光寺

甲賀郡岩根村　善水寺

木造藥師如來及兩脇士像。仝兜稅毘沙門天像。仝持國天增長天像。仝四天王像。不動明王像。僧形文殊像。金銅誕生釋迦佛像。
絹本著色十六羅漢圖（顏輝筆）　石部町　長壽寺
仝淨土曼荼羅圖（源信筆）　仝　常樂寺

蒲生郡島村　長命寺

絹本著色寶冠阿彌陀如來像。仝勢至菩薩像。釋迦三尊像。涅槃像。木造地藏菩薩像。仝毘沙門天像。仝聖觀音像。千手觀

音像（聖德太子作）　愛知郡角井村　百濟寺
紺紙金泥妙法蓮華經入黑漆蒔畫函。紺本著色日吉山王神像。
紙本黑書寂室和尚遺訓　高野村　永源寺
紺本著色十二天像　犬上郡東甲良村　西明寺
阪田郡柏原村　成菩提院
紺本著色淨土曼荼羅圖。仝聖德太子像。仝不動明王童子像
木造傳敎大師像　大原村　觀音寺
仝藥師如來像　入江村　藥師堂
仝聖觀音像　南鄉里村　總持寺
仝藥師如來像　六莊村　多田寺
仝千手觀音像。毘沙門天像　神照村　神照寺
仝愛染明王像。阿彌陀如來像　長濱町　舍那院
仝十一面觀音像　同　智善院
東淺井郡竹生島　寶嚴寺
紺本著色十六羅漢圖。仝釋迦三尊像。仝如意輪觀音像。彌陀來迎圖。紙本黑書空海將來經等目錄表。刺繡普賢十羅刹女圖額。仝彌陀三尊來迎圖額
木造聖觀音像　竹生村　觀音堂
仝十一面觀音像　高時村　觀音堂
仝千手觀音像　大鄉村　千手院
仝藥師如來像　田根村　藥師堂
仝毘沙門天像　下草野村　寂靜院
伊香郡南富永村　觀音堂
木造十一面觀音像（傳敎大師作）。仝大日如來像（同上）
木之本村　淨信寺
木造地藏菩薩像。閻魔王像（傳空海作）。仝俱生神像（同上）
仝阿彌陀如來像。紺本著色地藏菩薩像
木造素盞嗚命像。仝女神像　高時村　大見神社
仝御神像　同　左波加刀神社
仝十一面觀音像　同　醫王寺
仝　藥師堂
木造藥師如來像。乾漆十二神將像。木造傳敎大師像
木造佛頭　永原村　長綠寺
仝十一面觀音像　高時村　鷄足寺
木造藥師如來像　高島郡大溝町　藥師堂
仝釋迦如來像　新儀村　保福寺
仝大日如來像　仝　大善寺
仝十一面觀音像　海津村　宗正寺

●街路里程

▲東　海　道　總里數拾五里貳拾七町
自京府境至大津（壹里五町）自大津至草津（參里貳拾七町）
自草津至石部（貳里貳拾八町）自石部至三雲（壹里貳拾參町）
自三雲至水口（壹里拾六町）自水口至土山（貳里參拾貳町）
自土山至三重縣境（貳里壹町）

▲中　仙　道　總里數拾五里拾八町
自草津至守山（壹里九町）自守山至武佐（參里參拾參町）自
武佐至愛知川（貳里拾六町）自愛知川至高宮（貳里五町）自
高宮至鳥居本（壹里拾八町）自鳥居本至醒ヶ井（貳里八町）
自醒ヶ井至柏原（壹里拾五町）自柏原至岐阜縣界（拾九町）

▲朝鮮人街道　總里數拾里拾六町
自小篠原至八幡（貳里參拾貳町）自八幡至常樂寺（壹里六町）自
常樂寺至彥根（五里拾壹町）自彥根至鳥居本（壹里參町）

▲御代參街道　總里數七里貳拾町
自北土山至岡本（參里參拾壹町）自岡本至八日市（貳里貳拾壹町）自八日市至小幡（壹里拾貳町）

▲北　國　街　道　總里數拾參里貳町
自下矢倉至米原（貳拾七町）自米原至長濱（貳里五町）自長濱至木之本（參里參拾四町）自木之本至柳ヶ瀨（貳里拾六町）自柳ヶ瀨至中河內（貳里貳拾五町）自中河內至福井縣界（壹里）

▲北　國　脇　往　還　總里數七里拾四町
自木之本至伊部（貳里貳拾町）自伊部至春照（參里九町）自春照至岐阜縣界（壹里貳拾町）

▲西　近　江　路　總里數拾九里
自大津至木戸（六里拾貳町）自木戸至勝野（參里參拾壹町）自勝野至今津（參里拾四町）自今津至海津（參里四町）自海津至福井縣界（二里九町）

▲若　狹　街　道　總里數四里四町
自今津至福井縣界（四里四町）

●各港間里程

自大津至阪本　壹里貳拾貳町　自阪本至堅田　壹里貳拾壹町
自堅田至北小松　四里拾町　自北小松至勝野　壹里參拾貳町
自勝野至南舟木　壹里拾九町　自南舟木至今津　貳里貳拾九町
自今津至鹽津　四里參拾五町　自大津至矢橋　壹里壹町
自大津至山田　壹里拾四町　自大津至支那中　壹里參拾參町
自支那中至赤野井　參拾貳町　自堅田至長命寺　參里拾九町
自長命寺至八幡　壹里壹町　自八幡至常樂寺　貳拾七町
自常樂寺至能登川　參拾町　自彥根至米原　壹里貳拾壹町
自彥根至長濱　貳里參町　自長濱至今津　四里貳拾八町
自堅田至彥根　八里貳拾九町

●鐵道哩數

自岐阜縣界至柏原（一哩二）自柏原至長岡（二・七）自長岡至醒ヶ井（二・八）自醒ヶ井至米原（三・八）自米原至彥根（三・七）
自彥根至河瀨（四・〇）自河瀨至能登川（四・六）自能登川至八幡（五・四）自八幡至野洲（五・九）自野洲至草津（四・七）
自草津至石山（四・八）自石山至馬場（一・七）自馬場至大谷（一・九）自大谷至京都府境（〇・八）以上東海線
自馬場至石場（〇・五）自石場至紺屋關（〇・五）自紺屋關至大津（〇・三）以上大津線
自米原至長濱（四・六）自長濱至虎姬（三・四）自虎姬至高月（三・三）自高月至木之本（二・六）自木之本至中之鄉（二・九）
自中之鄉至柳ヶ瀨（二・九）自柳ヶ瀨至福井縣界（一・七）
以上北陸線
自草津至石部（五・五）自石部至三雲（四・四）自三雲至貴生川（三・二）自貴生川至深川（一・七）自深川至三重縣界（七・〇）以上關西線
自彥根至新町（一・二）自新町至高宮（一・三）自高宮至豐鄉（三・三）自豐鄉至愛知川（一・七）自愛知川至小幡（一・七）
自小幡至八日市（二・九）自八日市至櫻川（三・七）自櫻川至朝日野（二・五）自朝日野至日野（一・六）自日野至水口（三・七）自水口至貴生川（二・四）以上近江線

明治四十二年二月二十七日印刷
明治四十二年二月一日發行

近江名所圖會
奥附
壹部定價金參拾錢

編纂兼發行者　滋賀縣野洲郡祇王村大字中北第三番屋敷　清水新兵衛

印刷者　滋賀縣大津市松本四百七十六番地　法貴定正

印刷所　滋賀縣大津市伊勢屋町第六番屋敷　合資會社　近江新報社

不許複製

發行所

阪田郡長濱町大手橋東詰　文泉堂

大津市中京町七番屋敷　文泉堂支店

22
473

22
473

025496-000-8

22-473

新撰近江名所図会

清水　新兵衛／編

M42

ADC-2955

22
4173